

リリカルの大冒険

銀の鈴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある異世界で大魔王と呼ばれ恐れられた一人の男が生まれ変わった。かつての大魔王は新たな生で何を想い、何を成し遂げるのだろうか？（注意）大魔王様の面影は無くなっています。もはや別人といえます。きっと、大魔王様と原作の魔王様が融合して化学変化の結果、このような大魔王様が生まれたのでしょう。ご了承の上、お読みください。

目次

大魔王、はじめました。

プロローグ	1
1話「魔ビルでの出会い」	4
2話「夜の一族」	12
3話「美少女トリオ」	20
4話「猫派と犬派」	30
5話「イタチ」	36
6話「ジュエルシード」	47
7話「わんこ」	61
8話「未知との遭遇」	73
9話「過去」	82
10話「にゃんこ」	92

11話「黒衣の少年」	108
12話「フェイト・テスタロッサ」	116
13話「時空管理局の聖女」	130
14話「無双の大魔王軍団」	135
15話「吸血鬼」	145
最終話「新たな季節へ」	151
番外編	
大魔王と賢者の石	159
大魔王と強殖装甲	196
大魔王とのび太の平凡な日常	223
大魔王とデモンベイン	253
大魔王とひぐらし	280

大魔王とまどか☆マジカ |

大魔王と禁書目録 |

大魔王、続けてます。

プロローグ、ぱーとつーだよ。

365

第1話「車椅子の少女」 |

第2話「魔導書」 |

第3話「孤高なる男達」 |

第4話「余の名は」 |

327 311

406 396 384 371

大魔王、はじめました。

プロローグ

あたしには前世の記憶がある。

いや、突然何を言ってるんだと思うだろうけど、ホントの事だからしょうがないよね？

最初はあたしだって夢だと思っていたんだよ。だけど少しずつ思い出していく記憶はともリアルで、夢ではあり得ないほどに鮮烈だった。

それに前世のあたしはちよつと「特殊な力」を持っていて、生まれ変わった今も前世ほどじゃないけど、その力を使う事が出来た。

これはもう疑う方が無理ってものだよね。

だから、あたしは決して電波じゃないし、厨二病を患っているわけでもないの。ほら、試しに力を見せてあげる。

上を向けて突き出したあたしの手のひらに巨大な火の玉が現れる。

あたしはそれをポイツと放り投げる。

ゴオオオオオオッ
!!!!

あたしが目標にした巨木が燃え上がる。

それはもうボウボウと勢いよく燃えてアツという間に跡形もなく燃やし尽くしてしまつた。

「今のはメラゾーマじゃないわ……メラよ」

あははははっ、なんだか前世で暴れていた頃を思い出す。

燃え盛る炎に響き渡る悲鳴と怒声。

人々はあたしに恐怖し、怯え、逃げ惑い、隠れる事しかできない。

あたしは世界を蹂躪し、最強の龍でさえあたしを恐れた。

あたしは最強だつた。なんでも出来ると思つてた。

だから、あたしは世界を救おうと思つた。

あたし達、魔族の世界を。

でも結局は負けちゃつた……人間の勇者つて奴にね。

つまり最強だつたあたしが他人の為に戦い始めて、戦い続けて、そして……人生を無駄にしてしまつた。

本当なら若くて楽しい時期に、わざわざお爺ちゃんになつてまで頑張つたつていうのにだよ！

だから生まれ変わったあたしはもう他人の為には戦わないって決めたの。

自分の為だけに戦って、人生を楽しんでやる。

目指せっ、酒池肉林！ってね。

でも残念なのは前世は男だったのに、今は女の子なんだよね。

いくら人生を楽しむといっても、流石に男を侍らす気にはならないの。

とはいっても体が女の子だから、美女を見てもムラムラしないんだよね。

こんな事なら前世で思う存分、女遊びをしておけば良かった。

たぶん恋愛を楽しむことは出来ないかもだけど、それ以外は思う存分に楽しんでやろうと思う。

かつての力が完全とは言えなくても、ある程度は使えるんだからこの世界でなら無双出来るはずだもんね。

まあ、何はともあれ第二の人生は謳歌してやるぞー！

おっと、自己紹介がまだだったわね。

あたしの名前は「高町 なのは」。

前世では「大魔王」と呼ばれていたわ。

これからよろしくね。

1話「廃ビルでの出会い」

あたしが通う小学校はいわゆる進学校だけど、あたしの優秀な頭脳の前には文字通りの子供の遊び場よね。

真面目に勉強なんかしなくても、教科書をペラペラとめくるだけで理解できてしま
う。

だからあたしは勉強よりも体を動かす方を優先する。

「くそうっ、高町を止めろ！」

「あははははっ、このあたしを止めようだなんて百万年早いわよ！」

「なんてドリブルの速さだよ！」

「まるでボールが足に張り付いているみたいだ!？」

「ボールは下僕よ、あたしを崇め讃えているわ！」

「ボールは友達じゃないのかよ!？」

「ボールなんかと友達になれるわけないでしょう。あんたはボールしか友達がい

「ポッチなの？」

「うるせえっ!!ポッチはお前だろ!!」

「喰らえっ!! タイガーシヨット!!」

「プキヤラツ!?!」

あたしが放ったシュートが見事に敵の顎を捉えてノックアウトした。

「誰がボツチよ! あたしは孤高を貫いているだけよー!」

あたしの咆哮がグラウンドに響き渡る。

この後は男子どもが文句をつけてきたから軽く無双して捻ってやった。

*

放課後も哀れな男子共の相手をしてやろうと思ったのに、塾があるからと断られてしまった。

まったく、あたしみたいな可愛い女の子と遊べる機会なんて小学生時代しかないようなクソガキの癖して生意気ね。

代わりに女子と遊ぼうと誘ってみたら、サッカーや野球は嫌だと言われてしまった。

仕方ないから今日は帰ろう。

トボトボと家に帰っていると黒塗りの車が急ブレーキをかけて止まった。

中からはいかにも怪しい風体の男共が降りてくる。

鉄火場だわ！

あたしは久々の荒事の予感に血が滾るのを実感する。

両足を広げて大地を踏みしめて左手を天に、そして右手を地に構える。

これぞ、大魔王の無敵の構え。

名も知れぬ雑魚相手には勿体無い奥義ではあるけど、今のあたしはか弱い女の子でもあるから油断をするわけにはいかない。

もしも不埒な男共の手に落ちれば可憐なあたしは、あーんな事やこーんな事をさせられるだろう。

ウツプ、想像しただけで気持ち悪くなってきた。

「さあつ、どこからでもかかって来なさない！」

しかし男共は構えるあたしを無視して、あたしの前を歩いていた女の子二人を捕まえると強引に車に押し込んで発車してしまった。

「……………」

後に残されたのは、格好つけた構えをした可愛い女の子だけだった。

ブチッ

「あたしを無視するとは万死に値する愚行だわ。あいつら全員ぶっ殺す!!」

あたしはダッシュで車を追いかけた。

*

あたしの前には汚い廃ビルが建っている。

男共はここに入って行ったが、汚すぎて追いかけて中に入る気になれない。

「ここはやつぱり、いきなりイオナズンでいいかな？」

廃ビルごと木っ端微塵にしてしまえばスッキリするだろうし、それでいいよね。

あたしがイオナズンを唱えようと息を吸ったその時、廃ビル内から女の子の悲鳴が聞こえてきた。

さっきの女の子達かな？

まあ、別にいつか。知らない子達だったから放つところ。

あたしは改めてイオナズンを唱えようと息を吸った。

今度はビル内から吸血鬼がどうか聞こえてきた。

吸血鬼っ!?

この世界に本物の吸血鬼がいるの!?

あたしは胸がドキドキするのを抑えられなかった。

この魔物も魔法も何もない、凄くつまらないと思っていた世界にも隠されたものが

あつたのだ!!

「あははははつ、義を見てせざるは勇無きなり! このあたしの目が黒いうちは悪は許さないわよ!」

あたしは久しぶりにトベルーラを唱えると廃ビルに飛び込んだ。

*

「とおっ!!」

ガシャーンと窓を蹴り割って廃ビル内に飛び込んだあたしの目に、ロープで縛られた黒髪と金髪の小学生女子が映った。

これは別にいいや。

あたしはキョロキョロを吸血鬼を探す。

他にいるのはチンピラ共と気障ったらしいスーツの男が一人。

あたしの第六感が告げている。

スーツの男が怪しいとっ!!

ビシツとスーツの男に指を差すとあたしは言い放つ。

「お前が吸血鬼ね!!」

「ほう、どうやら助けが来たようですね。ですが私の相手になりますかね」

男は前髪を気障つたらしく掻き上げながら怪しい目をあたしに向けてくる。

ん……？

何かを感じる。これは暗示の類いのようね。

でもつ、この大魔王にはそんな児戯など効かぬわっ!!

「無駄よ！うす汚い吸血鬼如きの暗示など、あたしに効かないわ！」

この世界で初めて出会った魔物だから飼ってやろうと思っただけ、ご主人様に噛み付くような躰の悪い魔物なんかいらないわ。

あたしはこの吸血鬼を処分することに決めた。

「うす汚いとは言ってくれますね。ですが私がうす汚いという事は、あなたのお友達である彼女もうす汚いという事ですよ」

男は黒髪の女の子を指差す。息を飲む黒髪の女の子。

あたしは男のあからさまな挑発になど乗らずに冷静に言い返す。

「そんな小汚い小娘なんか知らないわよ！」

何故か空気が凍った。

これはまさか『凍れる時間の秘法』なのっ!?

「ま、まあいいでしょう。高貴なる吸血鬼であるこの私を侮辱したことを『メラ』ぐぎや

あああああつ?!?!?!
「

あつさり燃えた。

あの秘法ではなかったみたいね。

「なんなのよ、今の炎はあんたがやったの!？」

縛られている金髪の方があたしに声をかけてきた。

「そっか、見られちゃったんだ。あたしの秘密を見られたからには消えてもらわなきゃいけないわ」

「ちよつと待つてよ!?!あんたが勝手に見せたんでしよう!!あたしは誰にも言わないから消す必要なんかないわよ!!ねっ、ねっ!!」

金髪少女は慌てて命乞いする。

生き残るために必死なその様子が、かつての宿敵の一人だったホップ…じゃない、ステップ…でもない、ジャンプ…:離れた気がする。

まあ、名前なんかどうでもいいわ。

金髪少女が、かつての宿敵の一人に重なってしまい殺る気が失せてしまった。

それによく見ると金髪少女は可愛い顔をしている。キヤアキヤア騒ぐのも賑やかでいいわ。

「そうね。あたしの秘密を守れるなら消さないで置いて上げるわ」

「守る！ 守るわよ！！ あんたの炎の事も、すずかが吸血鬼って事も誰にも言わないわっ！！」

「すずか…吸血鬼…?」

「しまったーっ!!」

「ア、アリサちゃんっ!?!」

よく分からないけど、金髪少女の名前はアリサ、そして黒髪少女はすずかというみた
いね。

さてと、お話の続きはコソコソと部屋から逃げ出そうとしている吸血鬼の手下共を消
し炭にしてからね。

あたしはクズ共に絶望を宣告する。

「大魔王からは逃げられないの」

2話「夜の一族」

あたしの前には、暴力を生業とする男達がその身を震わせながら立っている。

こいつらを手下にしていた吸血鬼は簡単に屠れたけど、ある意味では吸血鬼よりも普通の人間の方が侮れないと思っっている。

あたしのかつての経験がそれを教えてくれる。

人間は決して諦めない。

自分よりも力のある存在にも、その小さな力を合わせて立ち向かってくる。

だからあたしは、アル中のように震えているこいつらにも全力を尽くす。

「ピオリム！ スクルト！ バイキルト！」

大魔王時代だったら、格下の人間相手に使おうとは思わなかった補助呪文も遠慮なく使う。

「何故なら今のあたしは女の子だからっ!!」

大魔王のままなら、その矜持にかけて補助呪文なんか使えなかったけど、非力な女の子ならどんな手段を使っても肯定される！

「あははははっ、いい時代になったものね。さあ、殺戮の時間よ」

あたしは獲物に向かつて歩みだした。

*

バタンツ！

「大丈夫かつ!!……え、なのは!？」

突然、扉が放たれると、そこからあたしの兄が飛び込んできた。

「どうしたのよ、恭也！　　すずか達は無事なの!？」

兄の後ろからは年上のお姉さんが現れた。

あれ？

縛られてる黒髪の女の子……たしか、すずかつて名前の子に似てるような？　　姉妹かな

？

「い、いや、俺の妹がいたから驚いただけだ。まあ、なのはがいるって事はすずかちゃん達も無事な筈だ」

「恭也の妹？　　美由希さんのこと?」

お姉さんは不思議そうにあたしを見ている。

あたしのお姉ちゃんは知っているのに、あたしの事は知らないみたい。

「お兄ちゃん、その美人のお姉さんは誰なのかな？」

「ひいつ!!」　ち、違うんだ!俺は別に隠そうとしていたとかじゃないんだっ!　彼女はただの女の子だからな!　なのはが気にする必要はないぞ!」

なるほど、あたしに内緒にしていたという事は、何か秘密のあるお姉さんのようね。それにしても我が兄ながら秘密の守れない男ね。

「何を慌てているの?　そんな事よりすずかは…すずかつ?!　そこに居たのね!待って今、縄を解いてあげる!」

縛られてるすずか達を見つけたお姉さんは、急いで二人の縄を解こうとする。

あたしは縄を解くお姉さんの後ろで、声を出さずに分かりやすいように口を動かす。

「(秘密を喋れば、全員消す)」

コクコクと青白い顔色をした二人が頷いてくれたから大丈夫だろう。たぶん。

「ここには三人しかいないのか?　すずかちゃん達を攫った奴らは何処に行ったんだ?」

兄の疑問の言葉にあたしが答えてあげた。

「あたしがこの廃ビルの前を通りかかった時に、廃ビルから慌てて飛び出してきた男の人達の事かな?　少し気になったから廃ビルの中に入ってみたら、その子達が縛られているのを見つけたの。あたしが驚いてる最中にお兄ちゃんが飛び込んできたんだよ」

我ながら無理のないストーリーだな。

兄の方は流石に何かを察している様だが、態々それを口にする事はないだろう。

そして予想通り、お姉さんの方はアツサリと信じたみたいで納得する様に頷いている。

「きつと私達がアイツの予想より早く、ここに近付いた事に気付いて逃げ出したのね。アイツは昔からそんな根性ナシだったわ」

お姉さんは何処かに電話をして、誘拐犯達を捕らえるように指示を出していた。行動は早いけど、きつとこの事件の犯人は逃亡に成功するだろう。

「あなた達、誘拐されていたの!? 大丈夫なの? 怖かったよね。もう大丈夫だよ」

あたしは二人を心配するように近付くと、抱き締めてあげながら二人にしか聞こえない声で囁く。

「(すずかちゃんの秘密は後でゆっくりと聞かせてもらうね。あたしの秘密は墓場まで持つていく事をお勧めするよ)」

ビクリと震える二人。

傍目には誘拐されて怯える二人を慰める美少女の図に見えているだろう。

「なのはちゃんは家まで送らせるわ。アリサちゃんには悪いけど少し事情を聞かせてね」

お姉さんはテキパキとその場を仕切り出す。

きつとお姉さんは、アリサちゃんにすずかちゃんの秘密を知られたと気付いて、口止めをする気だろう。

その事にアリサちゃんも気付いたみたいで不安そうに目を泳がす。

その様子が愛らしかったので、アリサちゃんの耳元で囁いてあげた。

「(行くのが怖かったらあたしも一緒に行つてあげるよ。何かされそうなら、あたしが全部消してアゲル)」

何故かアリサちゃんは、すずかちゃんに抱きついたらままお姉さんで行ってしまった。

人間の行動というのは、あたしの予想通りにいかない。

まだまだ勉強不足なのだろう。

家まで送られる車の中で、〃一人〃そう思うあたしであった。

「あれ、どうしてお兄ちゃんは一緒に乗っていないの？」

*

その部屋は、床も壁も天井すらも真っ赤に染められていた。

噫せ返るような血の匂いに気が遠くなりそうになる。

必死に正気を保とうとする私の目に彼女の姿が飛び込んできた。

真つ赤な世界で、彼女だけは綺麗だった。

恭也の声が何処か遠くで聞こえた気がした。

妹…？

美由希さんのこと…？

その瞬間、私の脳裏に何時だったか、恭也が一度だけ口にした言葉が蘇った。

『俺の下の妹は、あの親父が萌えキャラに思えるほどの化け物だ』

その時は、恭也がクソ面白くない冗談を口にしただけだと思っていたけど、今の私なら分かる。

目の前の女の子は化け物だと…

私達は「夜の一族」と呼ばれる超常の力を生まれ持つ一族だけど、この子は格が違いくらいすぎる。

私の本能が、この場から逃げ出せと最大の警鐘をがなり立てている。

あまりにもその声がデカすぎて気付くのが遅れてしまっていた。

その化け物の女の子は、私達に一応は友好的に接してくれている。

この場を荒立てないようにと、無理のあるストーリーを敢えて口にしてくれる。

私はそのストーリー通りに動き、その場を離れた。

彼女を送らせた車とは、逆方向に離れていく車内で私はホツと息を吐く。

隣では恭也が労わるように私の頭を撫でしてくれる。

「どうして、教えてくれなかったの？」

私は敢えて主語を抜いて問う。

「一度、教えた筈だ」

「あんなの冗談だと思いうに決まっているわ」

私は恭也の返事に、思わず頬を膨らませて文句を言う。

「そうか、そうだな。でもアイツは悪い奴じゃないんだ。敵対さえしなきゃ危険はない。

そこは安心してくれ」

恭也の言葉に私はますます怒りが湧いてくる。

「もしも、私が何も知らないまま彼女と会った時に、彼女を怒らせていたらどうなっていたのかしら？」

私の言葉に、恭也は脂汗をかきながら呻くように呟く。

「だ、大丈夫だ。今回のように明らかな犯罪行為じゃない限り、喧嘩レベルで抑えてくれる筈だ……たぶん」

次の瞬間、私のアツパーカットが恭也の顎に決まっていた。

3話「美少女トリオ」

あたしに二人の親友が出来た。

一人目は「アリサ・バニングス」

金髪で気の強い少女だ。前世の世界では気の強い女性が多かったから懐かしい感じがする。

二人目は「月村 すずか」

黒髪で吸血鬼の少女だ。夜の一族とかいうらしい。名前は大層だが能力は大した事はない。そう言ったら少しへこんでた。正直すぎるのは美德にならないと気付かされた一件だった。

兎にも角にもあたし達は親友となり、小学校では美少女トリオとして名を馳せる事になる。

「二人とも家がお金持ちなんだ。よほど悪い事を続けている家系って事ね。うん、気に入ったわ」

「今の言葉のどこに気に入ってる要素があったのよ!?!」

「私の家は悪い事はしていないわよ。アリサちゃん家は分かんないけど」

「あたしん家も悪い事なんかしてないわよっ!!」

二人とも随分と謙遜をする。

魑魅魍魎が跋扈すると噂される経済界で、財産を築くとなると並大抵の事ではないだろくに。

「大丈夫だよ。この世は勝てば官軍だからね」

「何が大丈夫なのよっ!？」

「うん、世界の真理ってヤツだね」

うんうん、すずかちゃんは分かっているみたいだね。

それに引き換えアリサちゃんは……このまま純粹に生きていつてほしいな。

うんっ、アリサちゃん純粹培養計画を発動するのっ!!

あたしはすずかちゃんと視線を合わせると超高速アイコンタクトで計画を説明して、すずかちゃんの協力を取り付けた。

「ねえ、あんた達から不気味なオーラを感じるんだけど、あたしの気のせいよね？」

アリサちゃんが心細げに胸に手を当てて、あたし達に問うてくる。

その姿に今は亡きあたしの息……ゲフンゲフンが刺激された気がした。

「アリサちゃん大丈夫だよ。いつかきつとあたしは生やしてみせるからね」

「何をっ!？」

「二人は仲がいいよね。何だか妬けちやうな」

あれ、すずかちやんが疎外感を受けているのかな？

廃ビルでの一件で、すずかちやんが吸血鬼と知ったあたしは、すずかちやんをペットとして飼おうと思ったんだけど、アリサちやんがドン引き顔で止めるから諦めたんだよね。

「すずかちやんも生やしたいの？」

「だから何を!?!」

「私はアリサちやんに生えて欲しいかな？」

「あたしが何を生やすのよ!?!」

うぬぬ、もしやすずかちやんはライバルかも知れないわね。

まあいいわ。あたしは決して敵に背を向けたりはしないもの。

「アリサちやんはあたしが守る!」

「あんたが一番危険なのよっ!!」

ぐぬぬ、何やら誤解があるみたいね。

アリサちやんのご機嫌取りのために、バニングス家の敵対勢力を地上から物理的に消してこようかしら？

「久しぶりにそれも悪くないわね」

あたしの体の奥底に眠る強大な魔力が、出口を求めて蠢いているのが分かる。
「ククク、闘争本能は抑えられないというわけね」

自分の戦士としての本能が、女の子として転生してもなお顕在なことに安堵すると共に、死してなお戦いから逃れられぬ己の宿業に苦笑してしまう。

「フハハハハハッ、これが余の逃れられぬ運命というわけか！」

あたしは高笑いをするが、この闘争本能が決して満たされることがない事も理解していた。

この大魔王に匹敵する敵など、この世界に存在するわけがないからだ。

なーんて事を考えておけば、これがフラグってヤツになるんだよね。

えへへー、便利な世界になったよね！

「早く来い来い、あたしのライバル〜」

「また、なのはの頭の中がお花畑になってるわね」

「うん、平和な証拠だね」

「まあ、そうね。ところでどうしてあんたは手を繋いでくるのよ？」

「ふふ、親友同士が手を繋ぐのは世界の選択なのよ」

「…あんたの頭の中もお花畑なのね」

*

あたしの家はケーキ屋さんを営んでいる。

近隣でも有名な美味しいケーキ屋さんだよ。

昔は母が一人で切り盛りしていた。アホ父はフラフラと旅行ばかりしては怪我をして帰ってきていた。

ある時など生死に関わるような大怪我をして入院してしまい、流石のあたしもその鈍臭さに呆れ果ててしまった記憶がある。

その時は母が余りに悲しむものだから、ついホイミを唱えてしまった。

つまり大魔王であるあたしがホイミを唱えたという事は…

「今のはベホマズンではないわ……ホイミよ」

などとなってしまい、アホ父が入院していた病院が大騒動になってしまった。

まだ魔力に目覚めたばかりの頃で、制御が甘すぎたせいだ。本来ならばベホマ程度の筈なのに。

ちなみに一部のオカルト紙では、奇跡の病院として取り上げられたらしい。

まあ、結局はその時の騒動に懲りたあたしは、アホ父に旅行趣味は止めて真面目に働くようにと諭したんだけど、アホ父は可愛い娘の言葉を聞こうとはしなかった。

まったく母のヒモのくせに生意気だ。

ムカついたから、何故か家にある道場で二人きりの時にボコボコにして上げた。

何だかチョコマカと動いていたけど、特別に大魔王の奥義で一蹴してやったら、次の日には「現役でやっていく自信が無くなった」とか言い出して、家のお店で働き出した。

ヒモの現役引退：イン○になったのかな？

母はまだまだ若いのに大丈夫かな？

まあ現代は色々（子供用じゃないオモチャとかだね）と発達しているみたいだから大丈夫だよね！

などという話を、お店でケーキを食べながら親友二人にしていたら（勿論、魔法部分は二人にしか聞こえないように話した）真っ赤になった両親にこっ酷く叱られた。

どんな平和な世界でも、理不尽が無くなることは無いのだと思いつた一日だった。

*

「私が『アレ』と、お友達にならなきゃいけないの？」

廃ビルから戻ってきたと思った途端、お姉ちゃんから命令された。

そう「命令」だった。

夜の一族の上位者として私に命令をした。

お姉ちゃんがそんな事するのは初めてだった。

それほどまでに「アレ」を警戒しているのだと思う。私もそれには同意する。

そもそも「アレ」に対する警戒度なら、その力を目の当たりにした私の方が、お姉ちゃんより上だろう。

最初に「アレ」が見せた火炎魔術は威力は凄まじかったけど、まだ理解は出来た。

だけど、その後の殺戮劇で見せた身体能力は理解の範疇を超えていたと言える。

人間を超える身体能力を誇る夜の一族である私が、その影すら捉えることが出来なかつたのだ。

化け物という言葉すら生温いだろう。

「アレ」と敵対せずに友好関係を結ぼうとするお姉ちゃんの判断は正しいと思う。

私だって、お姉ちゃんの立場ならそうすると思う。

だけど、『私の立場ならお姉ちゃんは納得できるの？』「アレ」とお友達になれと言

われて？』そう、問いかける私の視線をソツと外したお姉ちゃんは、ワザとらしい口調で貧血をおこしたと言いながら、恭也さんに寄りかかりながら自室に戻っていった。

くそう、二人ともモゲてしまえ！

*

すずかの一族は「夜の一族」という、人間とは異なる進化を遂げた一族だと聞かされた。

人を超えた身体能力に、幾つかの特殊能力を持つらしい。

あたしはその事を秘密にする事を誓うか、それともその記憶を忘れるかを迫られた。何でも記憶を失わせる術があるらしい。危険はないとの事だ。

あたしは迷わず選択した。

「うん、分かった。秘密にするね」

あたしの返事に『軽っ!?』とか言われたけど仕方ないと思う。

そんな「夜の一族」とかいう細かい話なんかより、あたしの頭の中は「なのは」の事でいっぱいだった。

確かに最初は怖かった。

いきなり火を放つし、口止めで消されそうになるし。

あ、そういうえば口止めは「夜の一族」も同じよね。

あの子も“消す”とは言ったけど、あたしを“殺す”とは言わなかったわ。

それになんだかんだ言っても、あの子は顔も名前も知らないあたし達を助けに来てくれた。

あの子が増えてくれなかったら（どう考えても時間的に恭也さん達の助けは間に合っ
てなかった）あたしは、あの下衆共に女の子として死ぬより酷い目に遭わされていただろ
う。

あの下衆共が消されたことは、自業自得だと思う。

助けに来てくれた恭也さんや忍さんには悪いけど、あたしにとっての恩人は“なのは”
だけだ。

思い返してみても、やっぱり“なのは”は怖いけど、あたしが“夜の一族”に連れて
行かれるときには心配してくれていた。

掛けてくれた言葉は、やっぱり怖い内容だったけど、そんな怖い世界が、この世には
本当にあるんだって知った今のあたしには、“なのは”は凄く優しい女の子だと気付く
事ができた。

「きつと“なのは”とは友達になれるわ」

あたしが小さく呟いた言葉に、さすがが今まで見た事もない愉快な顔になって驚いて

いた。

4話「猫派と犬派」

あたしの家には猫がいる。

数年前に捨てられていたのをあたしが拾ったのだ。

この猫には秘密がある。

たぶん拾ったときに死にかけていたから、当時思い出していた回復呪文をかけまくったせいだと思う。

元気になった猫は喋るようになっていた。

しかも何やら妄想癖まで生じたみたいで、自分は使い魔だとか言い出した。

他にも色々設定を考えては口にする。

ご主人様には魔力があるから自分を使い魔にして欲しいとか言うから、飼い主として責任をとって相手をしてあげた。

いわゆる『私と契約して魔法少女になってよ!』というヤツである。

今思い出しても中々に恥ずかしい儀式だった。

名前も自己申告だったりする。

猫は「リニス」だと名乗った。

*

今日はサッカーの試合だった。

女の子で参加しているのはあただけだったけど、あたしのライバルになれるヤツな
どいなかった。

「くそつ、高町は女だぞ！ 力負けしてんじゃねえつ!!」

「あははははつ、シオルダーアタック！」

「ぐわっ!？」

「ぐえっ!!」

「げぼっ!!」

あたしの華麗なシオルダーアタックの前に、次々と吹き飛んでいく有象無象共。

ゴールまで一直線のあたしに立ちふさがる愚か者はもういないっ!!

「喰らえつ、タイガーショット!!」

ゴールキーパーを吹き飛ばしてゴールネットをも突き破ったボールに、ゴール後ろの
観客達も大はしやぎで逃げ惑っている。

キヤアキヤアと楽しそうに何よりだ！

ピイイイイイイイッー！！！！

暫くしてからやつとゴールの笛がなった。遅すぎるぞ。いや、あたしが速すぎるのだから！

「あははははっ!!今日は絶好調だよ!!」

応援してくれているアリサちゃんに大きく手を振るあたしに、何故か審判が寄ってくる。

なんだろう？

サインなら後にして欲しいな。

「ファウルツ!!」

レッドカードだった。

「どうしてボールを持つてる方がファウルになるのよ!？」

その後は、敵味方入り乱れた乱闘になった。

実に楽しい試合だった。

*

「あんたはバカなの？」

試合は没収試合となったが、打ち上げて『翠屋』で来ていた。

翠屋はあたしの実家でやってるケーキ屋さんの名前で、喫茶コーナーもあるから打ち上げにピッタリだった。

「違うよ、今日の審判がおかしかったただだよ。普通はボールを持つてる方がぶつかってもファウルにならないもん！」

「相手選手を吹き飛ばしながらドリブルしてファウルにならない方がおかしいわよ！」

「そんな事言ったら、日向君は翼君に勝てないよ!？」

「日向君って誰よ!？」

アリサちゃんとはすっかり仲良くなって、こうして休日も付き合ってくれる。

残念ながらもさずかちゃんとは少々距離があるみたいで、今日も用事があるからと断られてしまった。

やっぱり、さずかちゃんもアリサちゃんを狙っているのかな？

“ニヤ”

あ、リニスがお店の方に来ちゃった。

「あら、あんたの家は猫派なの？」

アリサちゃんがリニスを抱き上げながら聞いてきた。

「ううん、特別に猫派ってわけじゃないよ。その子はたまたま拾っただけで、もし拾った

のが犬だったとしても飼ってたと思うよ」

「ふーん、そうなんだ。あ、この子は女の子なのね」

「フニャー!？」

アリサちゃんは大胆にもリニスの後ろ足を両手で掴むと、リニスの両足を払って確認した。

「あ、逃げられちゃったわ」

リニスはアリサちゃんの手から逃れると、大慌てでその場から逃げていった。

今夜はリニスから文句を言われる事を覚悟しながらアリサちゃんに疑問を投げかける。

「アリサちゃんは何派なの？」

わざわざ猫派なのかと聞かって事は、アリサちゃんには拘りがあるとみた。

「あたしは断然、犬派よ。犬はいいわよ、忠実だし、絶対にあたしを裏切らないもの！」
やっぱりアリサちゃんには拘りがあったみたいだね。

アリサちゃんは興奮しながら犬の良い所を捲し立てる。

あたしはそんなアリサちゃんの耳元に口を寄せると呟いた。

「あたしもアリサちゃんを絶対に裏切らないよ。アリサちゃんの為にアレを生やす魔法も研究中だもの」

「だから何を生やす気なのよ!?!」

真っ赤になったアリサちゃんは可愛かった。

5話 「イタチ」

今日はアリサちゃんを挟んで三人で帰宅していた。

「こうして両手を掴まれていると、地球人に捕獲された宇宙人の気持ちになってくるわね」

あたしとすずかちゃんに両手を繋がれているアリサちゃんが妙な事を言っている。

「アリサちゃん、こういう時は両手に花って言うんだよ」

「そうだね。ちなみに三人以上なら花束だよ」

「そんな事を言ってるんじゃないわよ！ 鬱陶しいから手を離せて言ってるのよ！ この状態だと頭も掻けないでしょう!？」

なんだ、そんな事を心配してたんだね。

あたしにお任せだよ！

「大丈夫だよ。体が痒くなったらパンツの中だって、あたしが掻いて上げるからね」

「うん、私もアリサちゃんの体なら隅々まで舐め：じゃなくて掻いてあげるね」

「百万歩譲ってなのは我慢するけど、すずかは完全アウトよっ!!」

「そんなんっ!? なのはは良くて私はどうしてダメなの!？」

「すずかちゃんは、自分の事が分かっていないみたいだ。

「ここはあたしがハッキリと言ってあげるべきだね！」

「そんな事も分からないの？」

「なのはちゃん!?! 私が何を分かっていると言っているのよ!」

「すずかちゃんは前に言っていたよね? 自分ではなくアリサちゃんに生えて欲しいっ

て」

「はっ!?!」

「ちよつと待て、なのは」

「ううん、待てないよ。すずかちゃんは間違っているよ! すずかちゃんの言葉は今の

アリサちゃんを見ていないって事だもん!!」

「ガーン!?! わ、私がアリサちゃんを見ていない…?」

「だからちよつと待て、なのは」

「ううん、絶対に待てないよ。だって、すずかちゃんは今のアリサちゃんに自分好みに変

われって言うてるんだよ! そんなの真実の愛じゃないよっ!!」

「ガガーン!?! そ、そんな…私の想いは間違っていたの?」

「いい加減黙れ、なのは」

「ううん、何があっても黙れないよ。そこがあたしと違うんだよ。あたしは自分の体を

犠牲にしても、アリサちゃんと一つになりたいもの!!」

「ガガガーン!!!!」 つまり私は自分の体可愛さでアリサちゃんの体を蔑ろにしていたの

ねっ!!」

「分かってくれたんだねっ、すずかちゃん!!」

「うんっ、目からウロコが落ちまくったよ!!」

「すずかちゃん!!」

「なのはちゃん!!」

あたし達は感極まって抱きしめ合う。

「く、苦しい……」

もちろん、間にいたアリサちゃんもあたし達の抱擁の中にいた。

仲間外れはダメだからね!

*

「誰か……僕の声が聞こえますか……」

何か聞こえた気がした。

「僕……声が……聞こえますか」

これは、まさか念話なの？

クク、この世界に念話を操れる者がいたとはね。

あたしは溢れてくる狂喜に身を震わせる。

だけど、アリサちゃん達を関わらせるのは危険だと思う。

己の力を過信して二人を守りきれぬなどと奢るのは愚か者だ。

とは言っても正直に話せば付いて来たがる可能性が高いよね。

ここは一芝居打つとしよう。

「今日は新しくできたお店に行こうよ！」

「あんたは寄り道ばっかりね。あんまり不真面目だと不良になるわよ」

「ダメだよ、アリサちゃん。不良に憧れるのは思春期にありがちだけど、それはただの気の迷いなんだから気をつけてね」

「そうだね、一時の気の迷いで将来を棒に振っちゃダメよ」

あたしとすずかちゃんは、一生懸命に横道に逸れようとするアリサちゃんを引き留める。

「なんであたしが悪い事になってんのよっ!？」

アリサちゃんがバタバタと暴れようとするけど、あたしとすずかちゃんの二人に手を繋がれているからビクともしない。

「あはは、じゃあ今日は真つ直ぐ帰ろうね」

「あんたが寄り道しようって言い出しだんでしようが！」

「仕方ないですね。アリサちゃんの教育のために今日は真つ直ぐ帰るとしましょう」

「す、すずか…あんたもなの!？」

あたし達は分かれ道まで仲良く並んで帰ると素直に分かれた。

「バイバイ！」

「ふんっ、寝坊すんじゃないわよ！」

「帰り道は車に気をつけて下さいね」

二人の後ろ姿が見えなくなるまで見送ったあと、あたしはニヤリと嗤う。

「誰か……僕の声が………」

頭にはまだ声が聞こえていた。

「安心して、聞こえているわよ。この大魔王にね」

あたしは「レムオル」を唱えて姿を消すと「トブルーラ」で声の元へと向かった。

風を切り裂きながら飛ぶ感覚に、あたしのテンションは上がっていく。

この先に、たとえかつての勇者が待ち受けていようと、この大魔王に二度の敗北はない事を知らしめてやろう。

「あははははつ、待っていないさい！ 未知なる敵よ！」

*

あたしの前に死にかけてイタチがいた。

突つくとピクピクと動いている。

どうやらあの声の正体はこのイタチだったようだ。

ガツクシ……！

道端で四つん這いになり絶望を表す可愛い女の子がいた。

あたしだった。

「ど、どうやら死を前にした動物が執念で助けを呼んだだけみたいね。野生動物って凄
いよね」

イタチの様子を探ってみてもカス以下の魔力しか感じない。

だけど魔力を全く持たない生き物が多いこの世界でなら貴重な存在かもしれない。

「もしかしたらリニスみたいに喋るようになるかも」

あたしは好奇心を刺激されて、かつてリニスを拾った時のように回復呪文をかけてみる事にした。

リニスの時は助けたくて必至だったから今回は冷静にやってみよう。

“ホイミ” (体力回復)

「傷が消えたね」

“キアリー” (解毒)

「えつと、特に変化はないよね？」

“キアリック” (麻痺治療)

「あれ、ピクピクしてる？」

「キュ…キュウ…」

「目を覚ましたら面倒よね」

“ラリホー” (睡眠)

「グー…」

“マヌーハ” (幻惑解除)

「なんか、飽きてきた」

“キアラル” (混乱治療)

「…イタチって食べれるのかな？」

“シヤナク” (解呪)

ボワンッ

イタチが人間の男の子に変身した。

何故だろう？

「モシヤス」はかけてないよね？

途中からボーとしかけて集中力を切らしたせいかな？

それとも連続して呪文をかけたから呪文同士が相互干渉した結果かも？

「取り敢えず人間の男の子は面倒だから『モシヤス』（変身）」

ポワンツ

あたしの前にアリサちゃんが倒れていた。

「ゴクリ…練習ってことでもいいよね？」

あたしは倒れているアリサちゃんに手を伸ばそうとして…断腸の思いで止めた。

「やっぱり、こんな事はいけないよ。だつて…本番での楽しみが半減しちゃうから！」

あたしは紳士…じゃなくて淑女らしく『モシヤス』の悪用なんかしないよ！

だから『モシヤス』で他の男に変身もしないもん！

男に変身すればアレをわざわざ生やす必要はないと思うかも知れないけど違うんだ

よ！

あたしはあたしだもん！

他の体になったあたしはあたしじゃない！

他の男の体がアリサちゃんに触れるのは我慢できないもんね!

それに……他人のアレに触りたくないよね?

“モシヤス”

ボワンツ

あたしの前にイタチが倒れていた。

「さっさと起きろ、イタチ」

あたしはイタチを蹴っ飛ばした。

「うわっ!? な、何が起こったんだ!?!」

目を覚ましたイタチが喋った。

ふむ、実験は成功したみたいだね。

でも何の呪文の効果が分からないや。

えへへ、あたしは帰ることにした。

「ちよつと待つてよ! 君が助けてくれたんだよね!?!」

イタチが目敏く立ち去ろうとしたあたしに気付く。

混乱していた筈なのに:

そうか! キアラルを唱えていたせいかな!?

「チツ……それでイタチ風情があたしに何の用よ?」

「イタチ風情つて：君は見かけと違って口が悪いつて言われるんじゃない？」

「踏み潰すぞ、畜生が」

「イタイイタイイタイ!? もう踏んでるよ!?!」

ギユウギユウツ!

「ごめんなさい!!ごめんなさい!!許して下さい!!」

「ふん、次はないぞ」

あたしは寛大にも許してやった。

だって踏み潰したら中身に靴が汚れちゃうからね。

「怪我は治してやったんだ。さっさと巣穴に戻れ」

「やっぱり君が助けてくれたんだね。あんな酷い怪我也治せるって事は、君は普通の人

間じゃないよね」

イタチは立ち上がるとあたしの目を見つめながら言った。

「僕も普通の人間じゃないんだ。たぶん君と同じ “魔法使い” だよ」

しまった!?!リニスの時も妄想癖が発病したんだった!!

：人語を操る妄想癖のあるイタチ。

放っておくと騒動を起こしそうだね。

仕方ない。

イタチは飼いたくないけど、リニスのオモチヤ代わりにはなるだろう。あたしは妄想を口走っているイタチを掴み上げると呪文を唱えた。

“ルーラ”

この時のあたしには、掴まれたまま喋り続けているイタチの妄想になど全く興味がなかった。

そんな些末な事よりも重大な事案があつたのだ。

「リニスがいタチを食べてもお腹を壊さないよね？」

6話 「ジュエルシード」

猫とイタチが意気投合した。

何を言ってるのか分からない？

うん、あたしも分かんない。

「それで僕は、地球に散らばったジュエルシードを集めているんです」

「そう、一人で大変だったわね。でも、もう安心してね。これからは私とマスターが手伝って上げるわ」

「リニスさん、ありがとうございます！」

「ううん、困った時はお互い様よ」

妄想癖の持ち主同士を合わせたらダメだって事だね。

ところで動物も厨二病にかかる事を学会とかで発表したら注目されるかも。

「なのはっ、これを受け取ってよー」

イタチが、どこかで拾ってきたと思われる赤い宝石を渡してきた。

その輝きから察するに本物の宝石のようだ。

あたしはそれをソツと机の引き出しに隠す。

「どうして仕舞うの!？」

「こんなの持つてるとこ見られたら盗んだと思われちゃうよ」

「盗んでなんかいないよ! ちゃんと発掘したんだよ!」

「そういうのを盗んだと言うのよ!」

まったく盗んだのを発掘だと言い換えるなんて、タチが悪いわね。イ「タチ」なだけに…

「ごめんなさい」

「なのは、何を謝っているのですか?」

「うん、親父ギャグは禁じ手なの」

「意味がわかりませんよ」

「それでいいの、世界には知らない方が幸せな事があるんだよ」

「は、はあ」

遠い目をするあたしにリニスは納得してくれたみたいだった。

「なのはっ、だからデバイスを…ぐえっ!？」

「さつきからイタチの分際で、あたしを呼び捨てにするなんて随分と偉そうね」

あたしはイタチの腹を踏み躪りながら教育を施す。

グリグリ!

「これからは 〴〵ご主人様」と呼びなさい

「ぼ、僕はイタチじやな…ぐえっ!？」

グイグイ!

「これからは 〴〵ご主人様」と呼びなさい

「僕はユーノ・スクラ…ぐうっ!？」

グニユグニユ

「これからは 〴〵ご主人様」と呼びなさい

「ぼ、僕は人間…ハアハア」

プニユプニユ

「これからは 〴〵ご主人様」と呼びなさい

「ハアハア…ご、ご主人さまあ」

「…やつぱり気持ち悪いから、なのはでいいの」

「そんなあ…ご主人さまあ『えいつ』ヒデブツ!？」

気持ち悪すぎてぶん殴っちゃった。てへ!

*

「まあ、なのはにデバイスは必要ないと思いますよ。彼女は色々と規格外ですから」

「で、でも感じる魔力量はAだよ。確かにすごい事はすごいけど、デバイスは絶対に必要だよ」

「なのはは普段は魔力を完全に抑えていますよ。その制御力は完璧に近いわ」

「え？ でも、なのはは魔力がただ漏れだよ？」

「ふふ、貴方が感じているのは、ほぼ完璧に抑えている魔力の残滓の様なものよ。想像できるかしら？ なのはの本当の魔力を」

「じよ、冗談だよな？ この大きな魔力が漏れ出してる一部に過ぎないなんて」

「こんな冗談を言っても仕方ないでしょう？ なのはの本気を見れば直ぐに分かりますよ」

「なのはの…本気」

ぶん殴って正気に戻ったイタチとリニスが、何やらボソボソと密談をしている。

厨二病同士で気が合うのはいいけど、いきなり部屋で交尾を始められたらイヤだなあ。

注意しとこうかな？

「はっ!!? この気配はジュエルシード!？」

あたしが飼育について頭を悩ましていたら、イタチが急に立ち上がった。

「オシッコならカゴの中でしてね」

あたしは、リニス用のカゴにイタチを掴んで投げ込もうとした。

「ちよ、ちよつと待つて！ オシッコじゃないよ！ ジュエルシードの反応が合ったんだよ！」

あたしに掴まれたイタチが厨二病発言をしている。

仕方ない。これも飼い主の責任として少しだけ付き合つてあげよう。

「それで、その反応はどこからしているの？」

「僕が案内するから付いてきて！」

あたしが相手をしてあげたのが嬉しかったのか、イタチは張り切つて窓から飛び出して行つた。

「はあ、付いて行かなきゃいけないよね。リニスはどうするの？」

「そうですね。私もジュエルシードには興味があるので一緒に行きます」

「それじゃあ、こつちにおいで」

“レムオル” (透明化)

“トベラーラ” (飛行)

腕の中に飛び込んできたリニスをしっかりと抱きしめたあたしは、呪文を唱えて窓か

ら飛び立つ。

「あれ、イタチのくせに足が速いよね」

まるで空を飛んでいるかの様な速度で離れていくイタチの魔力を感じて、あたしは少し驚いた。

「急いで追わないとイタチの魔力は小さいから見失いそうね」

「私が捕捉しているので安心して下さい」

「匂いで？」

「猫扱いはやめて下さい！ 魔力に決まっているでしょう！」

猫に猫扱いするなど言われた。

理不尽だよね！

*

なんだろう、あれは？

イタチに追いついたあたしの前には巨大な不定型の生き物がいた。生き物だよね？

はっ、思い出した！

「あれはジュエルシードが活性化し『この世界のスライムはあんな形なんだ！』ス、スラ

イム？」

前世では愛玩用として一部では人気を博したスライムだったのに、世界が変わればドロドロチックで可愛さゼロだね。

「あれがスライムですか？」

リニスが見たこともない生き物をスライムだと断定するあたしに、疑問を感じたみたいだ。

「あたしは直接は見たことないけど、お兄ちゃん部屋のパソコンで、女騎士がスライムに服を融かされて半裸になっているシーンを見たことがあるわ」

「……恭也さんの部屋ですか？」

「うん、お兄ちゃんはいなかったけど、点きっぱなしのパソコンはそのシーンだったよ」
あたしの言葉にリニスは頭が痛そうにしていた。

「あのムツツリめ、妹がいるのに不用心すぎるわ。今度お仕置きで“行為中”に乱入してやろうかしら」

何かブツブツ言ってるけど、なんだろう？

なんだか不穏な空気を感じるから関わらないようにしよう。

「君達は何をノンビリしているんだよ！ 早くジュエルシードを封印しなくちゃ被害が大きくなるよ！」

イタチが自分の妄想設定にスライムを組み込んだみたいだね。

だけど、スライム相手に被害がどうか無理があり過ぎるよ。

スライムの方を見てみるとウネウネと蠢いているだけだ。

あそこに女騎士を放り込めば、お兄ちゃんが喜びそうだね。

でも、あたしの趣味ではないからあのスライムはいらないや。

あたしはやっぱり、ウネウネよりプルプルのスライム派だからね。

「あたしはスライムを倒せばいいんだよね？」

「うん、まずは力を削ぐんだ。それから封印すればいい！」

飼い主として妄想設定に合わせてあげるのも大事だよね。

あんなに楽しそうにしてるんだから、夢の世界を壊しちやいけないと思う。

もっともペットだから厨二病を許容しているだけだよ。人間だったらぶっ飛ばして

現実を教える所だから勘違いしたらダメだからね。

「じゃあ、攻撃呪文は久しぶりだから少しサーブスしちやおうかな」

スライムの弱点といえはやっぱり火炎系だよね。

あたしは指を一本立てて唱える。

“メラゾーマ”

あたしの指先に炎で形作られたフェニックスが顕現する。

「な、なんなんだ!? あの炎に込められた魔力量だけで、平均的な魔導師の全魔力量に匹敵するよ!!」

「なのはの全力にはまだまだ程遠いですよ」

あたしは二本目の指を立てる。

“メラゾーマ”

二匹目のフェニックスが咆哮をあげる。

「ば、馬鹿な!? あれだけの魔力を使った直後に同じだけの魔力を放てるのか!」

「まだまだ続きますよ?」

そして、あたしが合計5本の指を立てた後には、五匹のフェニックス達があたしを慕うかのようにあたしの身体を覆っていた。

つまりあたしは、フェニックスの身体が邪魔で周りが全く見えない。

「だああああああつ!!!鬱陶しいのおおとおおおつ!!!さっさと行っちゃえええええええつ!!!」

あたしの怒声にフェニックス達は、追い立てられるかのようにスライムへと突撃していった。

次の瞬間、スライムを中心に荒れ狂う炎の渦が巻き起こる。周囲のアスファルトやコンクリートは一瞬で燃え尽きる。

その勢いは凄まじく、あたし達の方にもその炎の触手が伸びようとしていた。

「ひいつ!! こんな馬鹿な死に方はイヤだあああつ!!!」

「大丈夫ですよ」

リニスは冷静にイタチを唾えると、あたしの腕の中に飛び込んでくる。

「マジックバリア!」 (呪文防御)

「うそおおおつ?!?!?!」

鋼鉄すら蒸発する程の炎を完全にシャットアウトする防御陣にイタチが再び驚愕する。

「あのね、自分の魔法で焼け死ぬほど、おバカじゃないわよ」

当たり前のことに驚愕するイタチは、所詮はイタチつて事だね。つまり、おバカつて事なの。

炎が収まった後には青い宝石が落ちていた。

「ジュエルシードだ! 早く封印しなきゃ!」

都合よく落ちていた宝石をジュエルシードとやらに見立てたみたい。

どうしようかな?

あたしはそのジュエルシードとかを拾ってみた。

「うーん、小さな魔力が籠っているみたいだね」

「なのはにとつて小さな魔力という事は、相当大きな魔力ですね」

「なのは、早く封印したいから僕に渡してよ」

イタチが魔力を封印する？

無理だよな？

渡してもいいけど、悲しい結末になりそうだよな？

「……………」

あたしは黙って、ジュエルシードを自分の魔力で包み込んで封印してしまう。

「これでいいよね？」

「う、うん。完璧にジュエルシードが封印されているよ」

「なのは、流石ですね」

どうやらイタチの妄想設定を守れたみたいだね。

うふふ、これで飼い主の責任は果たしたわ。

帰ろうとしたあたしは、ふと手の中のジュエルシードを見て疑問を持った。

この世界に魔力の籠った宝石が都合よく落ちていた？

そんな偶然などあるだろうか？

もしかして…

「知らない間にあたしの魔力が漏れていたのかも？」

あたしの強大な魔力はどんなに制御を頑張っても少しは漏れてしまう。

その漏れた魔力が、宝石などの魔力を溜めやすい物に籠るのは不思議じゃないわ。

「これって、もしかしてマッチポンプ?」

自分で原因を作っておいて、自分で解決する。

うわああああ、恥ずかしくないよ。

でも、リニス達は妄想設定のお陰で、全く気付いていないみたいだね。

無事に封印できて良かったとか言ってる喜んでるんだし、態々本当の事を言っつて、水を差す必要なんかないよね?

うん、この事はあたしの胸の内にだけ留めておこう。

これもペットの夢を守る、飼い主の責任の範囲内だと思おうから。

さてと、さっきの呪文で大きなクレーターみたいな焼け跡が出来ちゃったから、騒ぎになる前に帰らなきゃね。

「もう帰るわよ」

「はい、なのは」

「僕も帰りは一緒にいいかな?」

「いいわよ、おいで」

二人を腕の中に抱えながらふと思った。

さっきの戦闘を誰かに見られていたら後で騒がれるかも？

次からは気をつけよう。

「今回はこれでいいわよね」

“メダパニーマ”（集団混乱）

えへへ、これであたしの事なんか気にする人はいなくなるよね。

あたしは姿を消すと空を飛んで自宅に向かった。

周囲からは奇声がたくさん聞こえてきてウルサイけど今回は我慢だね。

「ところで、リニスさん」

「何かしら？」

「リニスさんのトイレはカゴなんですか？」

「がうっ！」

「ぶぎやあっ!?!」

イタチがリニスに噛まれてた。

リニスがお腹を壊さなかったらいいけど。

7話「わんこ」

今日はアリサちゃんとの山の神社でお散歩中だよ。

人気がない神社だから、アリサちゃんとの間で何かが起こるかも？ ドキドキだね！
すずかちゃんは残念ながら習い事の日なの。何でも「にゃんこトレーナー」とかい
う怪しげな資格に向けて勉強中らしい。

「へえ、こんな所に神社があったのね」

「えへへー、あんまり人が来ないからお散歩に丁度いいよね」

あたしは繋いでいるアリサちゃんの手をニギニギしてみる。

「同性の友達といるのに、身の危険を感じるのはどうしてかしら？」

「ただの友達じゃないよ、親友だよ」

「身の危険の方を否定しなさいよ！」

「親友に嘘は吐きたくないよね？」

「……これ以上は言わないでおくわ。やぶ蛇になる気がするもの」

くそそう、察知されてしまった。

「嘘を吐きたくないって何をするつもりだったのよ！」

と、アリサちゃんが返してきたら

「じゃあ、教えてあげる」

と、あたしが返して大人の階段を一步登る予定だったのに。

「チツ……それで今日はこれからどこに行こっか？」

「(舌打ちしたわ、この子。やっぱり何か企んでたわね) そうね、いつものパターンになるけど、海沿いのお店を見に行きましょう」

「お昼は『翠屋』でいいよね」

「ふふ、そうね。あんたん家の売り上げに協力してあげるわ」

「うんうん、リニスとイタチの餌代を稼がなきゃいけないから、アリサちゃん沢山食べてね」

「イタチってあんた、あれはフェレットよ。それに名前と呼んであげなさいよ」

「フェレット……イタチだよな？ 名前は確か、UMA(ユーマ)だよな」

「それは未確認生物のことでしょう。あんたのペットの名前はユーノでしょうが、なんで飼い主が間違えるのよ」

「ユーノ、ユーノ、ユーマじゃなくてユーノ」

「その覚え方は絶対に間違えるわよ」

「そんな事ないよ、あたしはちゃんと飼い主の責任を果たせる人間だよ」

「さつきまで間違えて覚えてた癖に、よくそんな偉そうに言えるわね、あんたは」

「失敗した過去を乗り越えてこそ、人は成長できるんだよ。今のあたしみたいだね」

「成長するのが早すぎるわよ!」

「それは、あたしが成長期だから!」

「成長期の意味が違くない!?!」

そんな人生についての哲学的な話し合いをしていた時に「ソレ」は現れた。

「グルルルル…」

牛並みの大きさのそれは、身体中に攻撃的な角のようなものを生やした黒色の犬だった。目は四つあるね。

「暴力的な雰囲気の子犬……これが噂に聞く『闘犬』ってヤツなのかな?」

たしか人間の手によって戦う事を目的にして、長い時間と手間をかけて改良をされ続けた品種だったはず。

「うわあ、闘犬なんて初めて見たよ!」

あたしはよく見てみようかと近付いていく。

「あんなのが闘犬なわけないでしょう!?!こらっ、近付いたら危ないわよ!!」

「ええっ!?! わんこじゃないの!?!」

「わんこソムリエ」の資格を持つアリサちゃんの鼻は確かだ。

彼女がわんこじゃないと言えば間違いないだろう。

ちなみに「わんこソムリエ」とは、犬の臭いで犬種を当てるといふ超難関の資格らしい。日本全体でもまだ数名しか資格者がいないとアリサちゃんが資格者証を見せて自慢していた。

「ガアアアアアッ!!」

闘犬モドキが突然、襲いかかってきた。

だけどそのスピードは遅く、あたしから見れば止まっているも同然の速度でしかなかった。

「ガウツ!!」

闘犬モドキはスローモーションな動きのまま、あたしにのし掛かるように飛びついてきた。

その動きは、リニスを抱っこを求めて飛びついてくる姿と似ていた。

「あはははっ、お前も抱っこして欲しいの？ おっきな体をして甘えん坊なんだね」

あたしは両手を広げて闘犬モドキを抱きしめようとした。

ククク、闘犬モドキとはいえ、犬っぽい生き物に愛情を注ぐ可愛い女の子！ アリサ

ちゃんの好感度もアップだね！

「このバカッ!!? 早く逃げなさいよっ!!」

アリサちゃんの切羽詰まった声が聞こえてきた。

「クウウ……ウン」

「ちよ、ちよつと、いくらなんでも残酷だよ!？」

アリサちゃんはいいい匂いがするなあ。くんかくんか。

ボキボキボキ!

「ウ……ウウ……」

「も、もう死んじやつたんじゃない?」

「抱いた時のポリュームは全然足りないけどね」

バキバキバキイイイイッ!!

「……………」

「ポリュームが足らなくて悪かったわね! !小学生なんだから仕方ないでしょう!!」

「しまった!?! 口に出ちゃってた!?!」

あたしの失言に怒ったアリサちゃんが腕の中から逃げていく……!!

「くそう、これも闘犬モドキのせいだつ、あたしが成敗してやる!」

あたしは大きくへこんだ地面を覗き込む。

そこには仔犬がうずくまっていた。

「あれ、小さくなってる? 目の錯覚かな?」

「ちよつと! ! 近付いたら危ないわよ! !」

心配してくれるアリサちゃんに大丈夫だよと手を振りながら、あたしは仔犬に近付いていく。

近付いてみると、仔犬の隣に見覚えのある青い宝石が落ちている事に気付いた。

ま、まさかさっきの闘犬モドキは、あたしの漏れ出た魔力の影響で、この仔犬が変化してたわけ!?

ムムム。

無意識に漏れ出た魔力とはいえ、このあたしが生み出したと言える魔物が、スライムに続き闘犬モドキとは。

こんな低級の魔物があたしの眷属だなんて知られたら困るわね。

今は可愛い女の子に過ぎないとはいえ、かつては大魔王として名を馳せたあたしの誇りに傷が付くわ。

あたしの魔力を吸った青い宝石が、後いくつあるのか分からないけど全て回収すべきね。

「ねえ、大丈夫なの?」

おっと、アリサちゃんが心配してくれてるんだった。

あたしはアリサちゃんに気付かれないように宝石を拾うと手早く封印してしまう。

仔犬は……死にかけてるわね。

そうだつ、閃いた!!

「アリサちゃん、この子…」

「この子、酷いケガだ…」

大怪我を負い、今にも死にそうな仔犬を見たアリサちゃんは言葉を失う。

「アリサちゃんはどうしたい?」

「もちろん…助けたいわ」

「元気になったら、また闘犬モドキになって襲われるかもしれないよ?」

「っ!?…それでもあたしはこの子を救いたい。だって、この子の目が生きたいって

言ってるもの」

仔犬はいつの間にか閉じていた目を開いて、アリサちゃんをジッと見つめていた。

アリサちゃんも涙をためた目で仔犬を見つめていた。

あたしは仔犬の股間を見つめていた。

うんうん、メスだね。種族を超えた美しい友情だよ!

「…:…アリサちゃんがどうしてもこの子を助けたいのなら助けてあげれるよ」

「本当なのっ!?!」

「うん、あたしの命の欠片をこの子に分けてあげればこの子は助かるわ」

「い、命の欠片!? そ、そんなのを分けてあんたは大丈夫なの!？」

その言葉にあたしは何も答えない。

ただ、優しい目でアリサちゃんを見つめるだけだ。

「な、なんとか言いなさいよ…」

「あたしの事は気にしないで、あたしはアリサちゃんの望むことなら何でもしてあげただけだから」

「ど、どうしてよ。そんな事をして、あんたには何の得もないじゃない」

戸惑うようにアリサちゃんはあたしに問う。

あたしは、アリサちゃんの固く握り締められた両手を優しく解すと胸に抱いた。

「ふふ、それならアリサちゃんは、自分が得をしたいからその仔犬を助けたいの? 違うよね。あたしも今のアリサちゃんと同じ気持ちなんだよ。アリサちゃんの心がその仔犬を助けたいって叫ぶように、あたしの心はアリサちゃんを助けたいって叫ぶんだよ」

「な、なによそれ。そんなこと言われて…あたしは…どうすればいいのよ…」

アリサちゃんの頬に涙が伝っていた。

あたしはその涙を指で拭いてあげる。

そして、あたしは能天気な笑う。

「にやははっ、アリサちゃんは自分の願いを素直に口にすれば良いんだよ。あたしはア

リサちゃんの為なら何だつてするし、何だつて出来るんだよ」

「なのは、あんた……」

「ほらほら、笑つてよ。あたしはアリサちゃんの怒った顔も、泣いた顔も、ぜーんぶ好きだけど、やっぱり一番大好きなのは笑った顔なんだよ」

「っ!?……うん、そっか。分かったよ、なのは。あたしもあんたの笑顔が大好きよ。あたしの一番の親友のあんたの事が大好きだよ」

アリサちゃんは、目が潤んだままだったけど、最高の笑顔を見せてくれた。

「お願い、なのはっ、この子を助けてあげて!!」

あたしは思いっきり能天気になりながらアリサちゃんの想いに応える。

「にやははっつ、なのはにお任せだよー!」

そして、あたしは命の欠片を仔犬に分け与える。

“ホイミ”

*

「というわけで、今日は『ホイミ』でアリサちゃんの好感度が激然大アップしたんだよ！」

「なのは、親友に嘘はいけませんよ」

リニスに今日の事を報告をしていると酷いことを言われた。

「あたしは親友に嘘なんか吐かないもん！」

「いえ、ただの回復呪文を命の欠片とか言ったんですよね？」

「命があるから魔力は生み出されるんだよ。つまり魔力は命の欠片と言えるものなの。

魔法はその魔力を消費する。つまり、命の欠片も同然だよ」

「そう言われると正しい気がしないでもないのが、ちよつと悔しいですね」

「どうして悔しいのよ!？」

「ですが命の欠片を分けると、なのはの命が削られるというのは明らかな虚言ですよね」

「あたしは一言もそんな事を言っていないよ？」

「は?！」

「アリサちゃんに命の欠片を渡して大丈夫なのかって聞かれた時に、ちゃんとあたしは大丈夫だよって、意味を込めてアリサちゃんの目を見つめ返したもん」

「ハア…バニングス様もタチの悪い方に目をつけられたものですね」

「タチが悪いって、リニスはだんだんと口が悪くなってる気がするよ」

「いえ、正直なだけです」

「正直すぎるのは美德じゃないよ？」

「わざと勘違いさせる言動をするマスターに言われたくありません」

「それは仕方ないよ。あたしはどんな手を使っても欲しいものは手に入れるって決めたんだからね」

「まったく、邪悪なマスターですね」

「ふふ、だってあたしはこの世の全ての魔を統べる『大魔王』だからね」

8話 「未知との遭遇」

「これが母なる星……地球」

大気圏を越えた宙そらから見つめた地球は、青く澄み渡り美しかった。

それは今朝のことだった。あたしはふと思いつき、トベルーラで宇宙まで行けるかを試したところ、無事に重力の井戸からの脱出に成功した。

もちろん、空気の層を纏っているから息が出来なくなるなんて間拔けな真似にも陥っていない。リニスに注意されていなくても自分で気付いていたわ。

目の前の地球に手を伸ばすと、手に掴めそうな錯覚に襲われる。あたしは幻想的な風景にしばし時を忘れた。

「……さて、そろそろ帰ろうかな」

今日は美しい地球の姿を堪能できた。やはりテレビの画像と比べれると、生は迫力が違う。

なにか越しよりも、やはり生が一番だね。

「帰りはルーラで一気に跳ぼうかな？」

あたしが迷っていると、ほんの僅かな時空の歪みが近くで生じるのを感じた。

「今のは誰かが転移をした？」

伝わってきた感覚は空間転移のものだ。

ルーラとは少し波動が違うが、間違いないだろう。

転移先はおそらく日本だ。注意を払っていなかったから確信はないけどね。

でも時空の歪みがまだ残っているから、転移元は分かる。

「ククク、この世界にも転移が可能な存在がいたのね」

魔法が発達していない世界だと思っていたけど、あたしが知らないだけなのかしら？

「そういえば、身の回りの狭い範囲しか調査していなかったわね」

前世では野望に燃えて、世界中を巻き込んだ戦乱を起こしたけど、今世では個人的な幸せだけを求めるつもりだから世界規模の調査は行っていない。

「でも用心のために調べておいた方がいいわね」

もう戦争をする気などないけど、世界の戦力把握はしておいて損はないと思う。

突然、何かの拍子で巻き込まれても面倒だしね。

とりあえず、あたしは転移元へと調査に向かった。

*

異空間に隠されていたそこは遺跡というか、庭園というか、不思議な構造ではあったけど、明らかに地球の技術レベルを超えているように思えた。

「もしかして、宇宙人の前線基地だったりするのかな？」

昨日テレビで見た特番でも、地球には既に宇宙人が住んでいるとやっていたもんね。

もし宇宙人が地球を狙っているのなら、そのような輩は排除せねばならないだろう。

大魔王であるあたしが、地球を守る為に戦うなど笑い話にもならないけど、あたしの地球を侵略など許せない。

「少し情報収集をしておこう」

あたしは慎重を期するために呪文を唱える。

“トヘロス” (敵避け)

“トラマナ” (畏無効)

“レムオル” (透明化)

“フローミ” (迷宮認識)

“レミラーマ” (財宝探索)

「ふふ、勇者みたいだね」

他人の住居に押し入って、価値のあるものを強奪する。

今思えば、勇者なんて押し込み強盗と変わらないよね。

とりあえずレミラーマ（財宝探索）の反応がある場所に向かうとしよう！

*

「ふふん、魔法はちゃんと効くみたいね。」

宇宙人の前線基地と思われる場所を探索しているあたしは、障害もなく内部に侵入する事に成功した。

基地の内部は、近未来的な雰囲気を感じさせるものだ。

やはり、ここは宇宙人の前線基地で間違いないだろう。

「問題は宇宙人の目的ね」

ただの監視なら大目にもよう。科学の発達した宇宙人が、進化途中の人類を観察しているだけなら理解も出来るからね。

だけど、侵略が目的ならこの大魔王が叩き潰してやる。

あたし自らが征服する気はもうないけど、この星はここに住まう者達の物だ。

宇宙人ごときにくれてやるつもりはない。

「とは言っても、敵の情報は必要だよね」

かつての世界では神をも凌ぐと謳われたあただしだけど、今のあたしはかつてほどの力
は出せない。

魔力自体は衰えてないけど、魔族だった頃の強靱な肉体と違い、脆弱な人間の肉体で
は全力の魔力行使に耐えられないからだ。

「もしも宇宙人の科学力が、今のあたしでは手に負えないレベルなら覚悟が必要ね」

あたしの体内にある魔力の源である「鬼眼」の存在を感じながら考える。

「鬼眼」の力を解放すれば、あたしは人間を超越できるだろう。

その代償として、人としての生は諦めなければならぬ。

「まあ、それは最終手段だよね」

あまり悲観的に考えるのは良くない。

かつて、絶望的な戦力差を跳ね返した勇者達のお気楽さを見習うべきだろう。

どんな状況でも笑顔を忘れてはいけぬ。

「にやはは、意外と大した事のない宇宙人かもしれないもんね」

あたしはお気楽に笑い前に進んだ。

*

あたしの前にケースに閉じ込められた少女の姿があった。

「まさか、地球人をモルモットにしているの?」

ケースの中の少女は、既に息をしていなかった。

透明のケースに触れながら少女の顔を確認する。

「まだ5歳ぐらいかしら?」

まるで寝ているような幼い少女の髪は金色だった。

自然とあたしは、親友のアリサちゃんを思い出した。

「アリサちゃんと同じ、金髪なんだね」

宇宙人の目的が何かは分からないけど、この瞬間、あたしは宇宙人は敵だと認識した。

バキッ!!

透明ケースを砕き、あたしは少女を抱き上げる。

「大丈夫だよ。あたしが助けてあげるね」

鳴り響く警報の中、あたしは優しく腕の中の少女に語りかける。

その時、空間の歪みを感じた。

「何が起きているのっ!?!」

目の前に転移してきた黒衣の魔女。

恐らくはこいつは宇宙人なのだろう。

見た目は地球人と大差なく見えるが、内包する魔力が地球人とは桁外れに大きかった。もつとも、あたしと比べればドングリの背比べに過ぎない。

「お前がここの主人か？」

「貴方は何者なの!?! どうやってここに侵入したの!?!」

あたしの質問に答えずに、宇宙人は喚き散らす。

「いいえっ、そんな事はどうでもいいわ!! それよりその手を離さない!!」

宇宙人は、あたしよりもこの少女の方が大事ならしい。実験体としてだろうか？

フフ、どんな実験をこの子に施していたのか知らないけど、そんなものはこのあたしが台無しにしてやろう。

“ザオリク” (死者蘇生)

この世界では奇跡の呪文をあたしは唱える。

頬に赤みが差し、穏やかな呼吸を始める少女。

“ベホマ” (最上級回復呪文)

そして、あたしは敢えてベホマ (最上級回復呪文) を唱える。

もしも、彼女の身体によからぬ細工が施されていたとしても、この大魔王であるあたしのベホマなら全てを無効に出来る。

「何が起こっているの…?」

呼吸を始めた少女に、目の前の宇宙人は現状を理解出来ないようだった。

この反応であたしは理解する。

少なくとも、魔法技術ではあたしは宇宙人を凌駕していると。

「宇宙人よ。貴様の目的が何かは知らないが、地球に手を出すつもりならこの大魔王が貴様を潰す」

“メラゾーマ”

具現化するフェニックス。

「なっ!? 何なのその馬鹿げた魔力は!?!」

「これは警告だ。地球から立ち去れ、立ち去らなければこうなる」

フェニックスが天井に向かって羽ばたく。

謎の物質で出来た天井を蒸発させながら、フェニックスはその勢いを弱めることなく地上にまで到達して、そのまま飛び去っていった。

「う、うそ…何て威力なの」

よしよし、宇宙人は予想通り驚いているようだね。

「この娘は、大魔王が保護する。さっさと地球から去れ」

“ルーラ”

あたしは呪文を唱えた。

*

「それで、その子連れてきた訳ですか」

「仕方ないよ。あのまま宇宙人の所に置いとけないよ」

「はあ……今頃プレシアは怒り狂って……いえ、先ほどの説明の通りならプレシアだったら冷静に状況を理解して、アリシアの復活を喜んでいる可能性が高いですね」

家に帰ったらリニスが、あたしが抱いている少女を見て酷く驚いていた。

状況を説明しても、リニスはよく分からないことをブツブツと呟いている。

「まあ、この子を無事に保護できて良かったよ」

あたしの部屋のベッドで穏やかな寝息を立てる少女を見ながら、あたしは満足感に浸っていた。

9話「過去」

「いらつしやいませー！」

アリシアの元気な声が店内に響き渡る。

あたしが保護した少女は、順調に回復して今では幼稚園に通っている。彼女を保護した後、あたしは両親を説得して家に住まわせる事にした。

両親の説得には苦勞したけど（後遺症を残さないように洗脳するのは大変なの）今はアリシアは実の妹のように懐いてくれている。

アリシアに事情を聞いてみれば、母親の職場に遊びに行つたときに爆発に巻き込まれてからの記憶はないらしい。

きっと爆発のドサクサに宇宙人に誘拐されたのだろう。

もしかしたらその爆発も宇宙人の仕業かもしれない。

あの宇宙人、やっぱあの時に消しておくべきだったのかもしれないね。

リニスとイタチには、アリシアの前では喋らないように言っておいた。

顔には出さないけど、きっとアリシアの心は傷付いている筈だから、余計なシヨックを与えたくない。

動物が喋るなんてアニメならともかく、現実なら怖いと感じる筈だ。

「別に働かなくていいんだよ？」

「えへへ、ケーキ屋さんで働くのは楽しいから、好きでやってるだけだよ」

アリシアは笑顔でそう答えるけど、やっぱり気を使っていると思う。

アリシアぐらいの年頃ならもつと遊びたいはずだ。

あたしが遊びに連れて行ってあげなきゃいけないよね！

「アリシア、明日はさすがちちゃん家に行くからね」

「さすがさん…確かにちゃんこがいっぱいいるお家だよね」

前に話した事を覚えているんだろう。なんて頭がいい子なんだろう。流石はあたしの妹だね！

「そうだよ、想像以上にちゃんこだからきつとビックリするよ」

「ふわー、そんなになんこがいるんだ！うちのリニスも連れていけば友達が出来るかな？」

「うーん、どうだろうね。にゃんこは縄張りがある生き物だから、大人のリニスだとケンカになっちゃうかもだよ」

リニスは偶然にも、アリシアが飼っていた猫に瓜二つだそうだ。

しかも名前まで一緒だから、アリシアは物凄くリニスを可愛がっている。

イタチの方はと言うと、なぜカリニスアがアリシアに近付けさせない。

一度、アリシアがお風呂に連れて入った時は、噛み殺す一歩手前まで怒ってた。つていうか、アレはあたしが回復させてあげなかつたら普通に死んでたよね。

それ以来、イタチはアリシアに近付かなくなっちゃった。まあ、気持ちは分かるよね。「じゃあ、代わりにユーノを連れていってもいい?」

「ユーノ……誰だっけ?」

「もう、何を言ってるの、お姉ちゃんのペットのユーノだよ」

その言葉でやっと思ひ出す。イタチの事だ。

「うん、いいんじゃないかな（別ににゃんこのオモチャになってもいいしね）」

「えへへ、明日が楽しみだなあ」

アリシアの楽しそうな笑顔に癒される高町一家。

やっぱり、子供の笑顔が一番だね!

*

「あの、アリシアの事なのですが」

またリニスの妄想癖が始まった。

アリシアを連れて帰ったあと、リニスに状況を説明したら、直ぐにアリシアが目覚めた。

咄嗟にリニスとイタチには暫く黙っていてね。と頼んだまま、色々と忙しくなつてしまい数日間も経ってしまった。

気がついた時には、リニスとイタチの妄想癖が爆発していた。

*

何でも、リニスとイタチはナントカという魔法が発達した世界の住人で、リニスはなんとアリシアの母のペットだったらしい。

ある日、アリシアが母親の職場での事故に巻き込まれた時にリニスも命を落としたけど、母親の使い魔になる事で生き返ったという。

でも、母親は愛娘を失った悲しみに耐えられずに禁忌の魔術に手を出して、娘のコピーを作ってしまう。

だけど、その子はアリシアとは姿形はそっくりでも性格はまるで違ったそう。

母親はその子を娘とは思えなくて、今度は亡くなった娘を生き返らせる研究を始めた。

リニスはその子の教育係をしていたけど、その子がある程度成長したら、母親から使い魔の契約を破棄されて、地球に捨てられたそう。

そして、捨てられた先の地球であたしに運良く拾われて、あたしが偶然生き返らせたアリシアと再会した。

めでたしめでたし。

「ハッピーエンドだね。良かったね。ぱちぱちぱちー」

「信用していませんね。なのは」

「ギクツ!? そ、そんな事ないよ?」

「では、証拠を見せましょう」

リニスは自信満々にそう言うと、イタチに目を向けた。

「ユーノは使い魔ではなく、魔導師です。魔力の消費を抑えるために今の姿になっていくのですよ」

「うん、最初は怪我の回復の為に魔力を回していたけど、なのはに治して貰ったからその必要が無くなったんだよ」

「じゃあ、なんでイタチのままなの?」

「うっ!? そ、それは何故かなのはに助けってもらってから元の姿に戻ろうとしても戻れないんだよ!」

しまった。

妄想の矛盾点を突く事は、相手を追い詰めるからしちやいけないんだった。

はあ、飼い主は大変だよ。

「うっ、そうでした。申し訳ありません。恐らくユーノは大怪我を負った後遺症で何らかの不具合が発生していると思います。元の世界の病院で診てもらおう必要があるでしょうね」

うまい！

リニスが設定を上手く作り出したよ。これでイタチが人間になれなくても矛盾はないよね。

「では、私が人間の姿になりましょう。ですが、今の私はなのはの使い魔なので、なのはの命令がなければ人化は出来ません。命令を頂けますか？」

なにつ!?

人化できる設定をそのままにして、その為にはあたしの命令がいる事にされた!?

ここで、あたしが命令を出したら、リニスが人化出来ない事が分かって話は終われるけど、そんな事になれば重度の厨二病の二匹は精神的にどうなるか分からないよね？

「……その命令は出せないわ」

「何故ですか!?! これで私が言っている事が真実だと証明されるのですよ!」

リニスが驚愕の表情でそんな事を言ってくる。

隣でイタチもウンウンと頷いていてムカつく。

「……リ、リニスの過去がどうであれ、あたしはリニスが好きだし、アリシアの事も大好きだからだよ」

あたしはコツソリと足をつねって涙を浮かべる。

「なののはっ!？」

「リニスとアリシアの過去がどんなものだったとしても、あたしの想いは変わらないよ。あたしは二人の事が大好き。そして、全力で二人の事を守ってみせる」

涙が頬を伝う感覚を感じながら、あたしは必至に考えながら話す。

「あたしは二人の過去を知ろうと思わない。過去はどうであれ、リニスはリニスだし、アリシアはアリシアだよ。もちろん、二人が過去の事であたしの力が必要なら幾らでも力は貸すよ。でも、あたしにとつてのリニスは使い魔なんかじゃない。あたしの大切な族のリニスなんだよ。家族に命令なんか絶対にしないよ」

「なのは……あなたはそこまで私の事を想ってくれていたのですね」

「あの、僕の事は?」

「当たり前だよ。だって、あたし達は家族だよ」

あたしはリニスを優しく抱きしめる。

「はい、ありがとうございます。私はこれで過去を忘れる事が出来そうです」

「えーと、僕は?」

「忘れなくてもいいよ。あたしはリニスの過去なんて気にしないけど、リニスにとって
は大事な思い出でしょう？ それを忘れる必要はないよ。思い出は胸に留めて置いて、
たまに大事だった人の事を思い出してあげてね」

「な、なのはっ!」

リニスはあたしの胸の中で、声を出さずに泣いた。

「だから、僕は？」

「男の子は一人で頑張ってるね」

「男女差別だ!？」

「うふふ、差別じゃないよ、区別だよ」

「そんないい笑顔で言う言葉じゃないよね!？」

*

こうしてリニス自身の設定はクリア出来たけど、次はアリシアの設定の番だった。

「アリシアの母親は生きています。なのはが出会ったという、黒衣の魔女がアリシアの
母親であるプレシアなのです」

アリシアから母親の事は聞いている。名前は確かにプレシアだけど、その話はリニス
も聞いていたから知っていて当然だね。

「私は二人を再会させてあげたい」

うん、本当に親子ならあたしだって、会わせてあげたいよ。

でも、アリシアから聞いた話ではプレシアは、優しくて料理上手で明るくて、冗談も好きな素敵な女性との事だ。

とてもじゃないけど、あの黒衣の魔女とは別人だよ。

「そうだね。もう少しアリシアが落ち着いたら、あたしが話をしに行ってみるね」

「お願いしますね、なのは」

「うん、任せておいて」

よしっ、行ってみたら居なくなってた事にしよう!!

「ところで、リニスはすずかちゃん家に行ってみたい? にゃんこ友達が出来るかもだ

よ?」

念のため、聞いておこう。

「いえ、遠慮します。猫は気まぐれなので仲良くできるとは思えません」

「そっか、じゃあ明日はイタチだけだね」

「いや、僕も猫の群れの中には入りたくないよ!」

「リニスは、お留守番をよろしくね」

「はい、なのはとアリシアは楽しんで来て下さいね」

「ねえっ!? 僕の話聞いてる!」

さてと、今日は早く寝て明日に備えなくちやね！

「僕も行きたくないんだけどーっ!!」

10話「にゃんこ」

「うわー！　すごいお屋敷だねー！」

「うんうん、これは相当悪い事をしているに違いないよ！」

あたし達の目の前には大きな屋敷がそびえ立っていた。

すずかちゃんの実家であり、なんちやって吸血鬼の「夜の一族」の総本山である。

「もう、お姉ちゃんってば、そんなこと言ったらダメだよー！」

「でもね、真面目に働いているだけで、こーんなお屋敷が立つなら、今頃『翠屋』は世界

一の大きなケーキ屋さんになっていると思わない？」

「うっ!?　それはそうかも知れないけど」

「アリシア、世の中はね。正しい事だけで回っているんじゃないだよ。どんな手を

使っても「勝った者」が正しいとされる世界なんだよ。アリシアは頭が良いから分か

るよね」

「う、うん。分かりたくないけど、分かるよ」

流星はあたしの妹は理解が早いね。

「だから、すずかちゃん家の豪邸も弱いものから吸い上げたお金で建てているんだよ。

あたし達も見習つて、将来はお金持ちになろうね！」

「えと、あの、それは見習うべきなのかな？」

「ふふ、アリシアも美味しいものは食べたいよね？」

「うん、美味しいものは大好きだよ！」

「可愛い服だつて着たいよね？」

「うん、可愛い服も大好きだよ！」

「お姫様みたいにお城のような所に住みたいよね？」

「うん、お姫様になりたい！」

「お休みの日には色んな所に旅行に行きたいよね？」

「うん、色んな景色を見てみたい！」

「その為には、すずかちゃん家を見習つて、法の隙間を掻い潜り、悪い事をしながらお金を稼ごうね」

「うん、すずかちゃん家みたいに悪い事をしてお金を稼ごうね！」

よしよし、アリシアは理解してくれたようだね。

現代社会ではお金が大事だつて事を！

「にやはは、あたしつてば教育者の才能もあるみたいだね！」

「幼い子供を洗脳しているだけだと思われませう。それと当家の前で当家を侮辱するよう

な言動は、謹んで頂けますようお願い致します。」

ノエルさんが迎えに来てくれたよ。

この人は月村家のメイドさんだ。

「ほら、本物のメイドさんだよ。すごいよね、自宅にメイドさんが居るんだよ」

「ほわー、やっぱり悪い事は儲かるんだねー!」

「単に悪い事をすれば儲かるわけじゃないから気をつけるんだよ。グレーゾーンを見極めて、薄く広く稼ぐ方法を見つけなきゃいけないからね」

「うーん、難しそうだね」

「もちろん難しいよ。だからお金持ちは少ないの。あたし達もお金持ちになる為には、いっぱい勉強して賢くならなきゃいけないんだよ」

「うん、勉強いっぱいして、私賢くなるよー!」

「うんうん、アリシアなら賢くなれるよ」

ふふ、小さい子は素直で可愛いね。

あたしはアリシアの頭を撫でながら微笑ましい気持ちになる。

「恐れながら、なのは様の教育内容は小さな子には宜しくない影響を与えると思考いたします」

「そんな事はないよー!世の中はね、そんな綺麗事だけじゃ生きていけないんだよー!」

「うう、アリシアってば、立派になったね」

この僅かな時間でも成長するなんて、我ながら自分の教育力が怖いほどだね！

「……悪魔に唆される人を見た気分です」

*

「キユーキユー!?!」

「ほらほら、この子達みんな、ユーノとお友達になりたそうだよ!」

アリシアの周囲には、にゃんこ達が群がって、アリシアの頭の上のイタチを狙っていた。

その目は獲物を見つめる狩人の鋭さを持っている。

「あの、ユーノ君を助けなくていいの？ アリシアちゃんってば、何か勘違いしているみたいだよ?」

「大丈夫だよ、ここのにゃんこ達はすずかちゃんがちゃんと教育しているから得体の知れないイタチなんか食べないよ」

「うん、食べはしないだろうけど、オモチャとして甚振るとは思う」

「あはは、イタチには良い運動になるよー!」

普段はゴロゴロしてばっかりだから、こういう機会に運動をさせてあげなきゃね。飼い主は、ちゃんと考えているんだよ。

「ユーノより先にあたしを助けるー!」

豪華なソファアの上で、あたしに押し倒されてクンカクンカされているアリサちゃんが叫んでいる。

「アリサちゃん、大声を出すのは淑女として恥ずかしいわよ」

そんなあたし達の姿を高そうな機材を使って録画していたすずかちゃんが、アリサちゃんの無作法を嗜める。

すずかちゃんの、撮影しながら顔を火照らせてハアハア言ってる姿は、中々にグツとくるものがあるよね。

「すずかあつ!! 今のはあなたにだけは淑女うんぬん言われたくないわよつ!!」

アリサちゃんが更に叫ぶ。手足も振り回すから少し汗をかき出してるよ。

「アリサちゃん、あんまり騒ぐと汗をかいちやうよ」

「あんたが離せば騒がないわよつ!!」

「ああ、アリサちゃんの匂いが強くなってきたよお」

「ノエル、私の代わりに録画をお願いっ、私もアリサちゃんの匂いを嗅ぐ!!」

「お任せ下さい。お嬢様」

「ちよっ!! あんた達っ、冗談はこのぐらいにしなさいよ! いい加減にしないと怒るわよ!」

「クンカクンカー!」

「私にもクンカクンカさせてーっ!!」

「お嬢様が輝いています」

*

怒られました。

今日はもう真面目にいこうと思います。

「ふふ、イタチがあんなに元気に走り回っているよ。連れてきて良かった」

「そうね、ウチの子達もあんなに生き生きと追いかけているわ。もう、仲良しさんね」

「あんたらの目は腐ってんじゃないの? あたしには肉食獣の群れから必死に逃げる小動物にしか見えないわよ」

大きな屋敷の中を縦横無尽に走り回るイタチとにゃんこ達、そのほのぼのとした光景を見ながらのお茶は格別だよね。

「アリスアは遊び疲れて寝ちゃったね」

「アリシアちゃんって、少しアリサちゃんの小さい頃に似ているよね。性格以外」

「すずかちゃんもそう思うんだ。あたしも思ってたんだ。それに名前も似ているよね。性格は似てないけど」

「ふふ、他人なのに不思議だよ。二人が寄り添っていると姉妹にしか見えないもの。性格は完全に他人だけど」

「妹としては、素直で純粋なアリシアが可愛いよね。ツンデレのアリサちゃんが妹だったら少しウザいかもだね」

「うっさいわよあんたら!! 全く反省してないじゃないの!!」

コブシをブンブン振り回して追いかけてくるアリサちゃん。

「ひいっ!? アリサちゃんが本気だよつ、すずかちゃんの責任なんだから止めてきてよ!!」

「何を言っているんですかっ!? どう見ても、なのはちゃんの責任分担の方が大きいですよ!!」

キヤアキヤア逃げ惑うあたし達を、いつの間にか目を覚ましていたアリシアが、楽しそうに眺めていた。

いや、楽しそうなのはいいんだけど、アリサちゃんを止めて欲しいんだけど!?

あたしの助けを呼ぶ声にアリシアが反応してくれた。

「うん！ 私に任せて！」

アリシアはメイドさんから割り箸をもらうとニタリと嗤う。

ブスツ！

アリシアは落ちていた、にゃんこのウン○を割り箸で突き刺す。

ま、まさか、アリシアさん？

「お姉ちゃんは私が守る！ 喰らえつ、にゃんこソード!!」

「「いやあああああつ!!!」」

あたし達三人は、にゃんこソードを片手に追いかけてくるアリシアから逃げ惑う。

「なんで屋敷の中の猫のウン○を放っておくのよ！ ちゃんと始末しなさいよ！ 飼い

主の義務よ！」

「だ、だって、量が多すぎて掃除が追いつかないんだもん！」

「それならずかちゃん慣れてるよね！ 真剣白刃取りでアリシアからにゃんこソ

ードを奪い取つてよ！」

「んなこと出来るかつ!! ふざけんじやないわよつ!!」

「すずかちゃんがアリサちゃん化したっ!」

「あたしはそんなに乱暴な言葉使いじゃないわよ！」

「キャハハハッ！ にゃんこソード！ にゃんこソード!! にゃんこソードオオオオツ!!!」

「ひいつ!? アリシアまでアリサちゃん化しちゃったよお!」

「あんたの中のあたしはどんなイメージなのよ!」

「アリシアちゃんがあんなになるなんて、ストレスが溜まっていたのかしら?」

「幼稚園児なんてあんなものでしょう! うん〇うん〇言わないだけマシだわ!」

「でも、普段は大人しいアリシアが、あんなに楽しそうにはしやぎ回るなんて…ホロリ」

「ホロリじゃないわよ! いい加減何とかしなさいよ! あんたの妹でしょうが!」

「うーん、とは言われても完全にバーサークしちゃってるし」

キャハハハッと笑いながら追いかけてくる今のアリシアに言葉が届くとは思えない。

どうしたものかな? と考えているとイタチから念話が届いた。

『大変だよ、なのは!』

『どうしたの? 尻尾でも食べられちゃった?』

『怖いこと言わないでよつ、そうじゃなくて、ジュエルシードの反応があつたんだよ!』

『ジュエル…シード……つて、何?』

『忘れないでよおおおおつ!』

『じよ、冗談だよ。あれだよ、ナントカがナントカで、ナントカに反応してナントカに

なるナントカが危ない宝石だよね!』

『ほとんど覚えてないよね!』

いやいや、イタチの妄想設定は覚えていないけど、ジュエルシードは覚えているよ。あたしの漏れ出た魔力を吸収した宝石で、その魔力の影響で周囲に悪影響を及ぼしているんだよね。

最近はアリスアの事があったから放置気味だったけど、ジュエルシードの回収はしなきゃいけないと思っっている。

『とにかく、僕が案内するから付いてきてっ！』

イタチは、にゃんこ達の追跡を振り切り、裏庭へと飛び出して行った。

「イタチが裏庭に飛び出して行ったわ！ イタチはあたしが追いかけるから、二人はアリスアと遊んでいてあげてね！」

「ちよつと待ちなさい！ 一人だけ逃げるなんて許さないわよ！」

「裏切り者には死あるのみですよ!？」

「アリスアッ！ ターゲットはアリスちゃん&すずかちゃんよっ！ サーチ&デストロイ！ サーチ&デストロイよ!!」

「イエスマム！ サーチ&デストロイ！ サーチ&デストロイ!!」

アリスアの瞳が妖しく輝く。

懐から取り出すは、もう一本の割り箸だった。

ブスッ!!

「にゃんこダブルソード!!」

「いやあつ!!」 なのはっ、あんた後で覚えていなさいよ!!」

「にゃんこは可愛いけど、うん〇はイヤアアアアアッ!!!」

逃げ惑う二人と、追いかける一人はアツという間に視界から消えていった。

「ふっふっふ、後が怖そうだけど、とりあえずオツケイだね」

あたしはイタチを追いかけて裏庭に向かった。

*

「にゃおおおおおん!」

「きゅーきゅー!」

裏庭では、巨大猫にイタチが遊ばれていた。

「仲よさそうだね」

「そんなわけ無いだろ!」 早く助けてよ!」

巨大猫の前足でゴロゴロされていたイタチは、案外と元気そうだった。

にゃんこ軍団に追いかけて回されて鍛えられたんだろう。

やっぱり適度な運動は有効だね。これからは定期的に連れてこようと思う。

「あれ、何だか寒気がする？」

「気のせいだよ、今日はけっこう暑いよ？」

「う、うん。そうだよね。気のせいだよね（ブルブル）」

巨大猫は暴れることもなく、イタチをゴロゴロしているだけだ。

これなら放っておいてもいいかな？　と思わなくもないけど、やっぱりダメだよね。

でも痛いのは可哀想だから、ザキでコロリと逝かせてあげよう。

巨大猫の近くにイタチがいるけど……まあ、大丈夫かな？

そして、あたしが呪文を唱えようとした瞬間の事だった。

突然、あたしの足元に魔力弾が着弾する。

「え……？」

攻撃されるまで気付かなかった。

強大すぎる魔力を持つあたしの弱点はコレだった。

自分と比べて、余りに小さな魔力だと気付くのが遅れてしまうのだ。

もつとも、そんな小さな魔力で攻撃されてもダメージなんか受けないから、弱点と

いっても致命的といえる程じゃない。

「でも、攻撃されたら腹が立つよ」

あたしは怒りのオーラを……出さなかつた。

「そのジュエルシードは渡さない」

あたしに魔力弾を放った相手は、鬪志を露わにして空から降りてくる。

彼女の風になびく髪は黄金色だった。

全身を包むのは、黒色で露出度の高い水着みたいな服だ。仄かに痴女の疑いが感じられる。

赤黒のマントは厨二病の匂いがする。

手にした鎌は、死神でもイメージしているのだろうか？

そんな彼女はまるで、少しばかり成長の方向性を間違えてしまった数年後のアリシアに見えた。

「うん、アリシアの教育は見直した方がいいかも」

このまま成長すれば “こうなる” という実例を見せつけられたあたしは、アリシアの教育は、普通の少女になるための教育に方向転換をする決意を固めた。

「ねえ、聞いているの？ ジュエルシードは渡さないよ」

反面教師の彼女は、ジュエルシードが欲しいみたいだね。

さつきは攻撃されてムカついたけど、アリシアの数年後みたいな姿を見たら、そんな怒りなんか吹っ飛んじゃうね。

アリシアが厨二病になっちゃったら大変だけど、他人の空似さんだったら別に構わな

い。

逆に面白くて、気に入っちゃった！

「うん、いいよ。ジュエルシードなんかあたしは要らないからあげるよ」

「あれ、そうなの？ 貴女はジュエルシードを集めているんじゃないの？」

彼女はキョトンとした顔になる。

「違うよ。まあ、危険だから見つけたら封印はするけど、別にジュエルシードなんかいら
ないよ」

「なんだ、そうなんだ。良かった、戦わなくて済んだ」

ホッとした顔になった彼女は、根は優しい子なんだろう。

そんな彼女が、どうしてジュエルシードみたいな危険物を欲しがるとかな？

「ねえ、ジュエルシードは中途半端な魔力石だけど、そんな物が必要なの？ なんだつた
らあたしがもつといい魔力石を作ってあげるよ？」

「えっ、本当に!？」

「うん、あたしにとつては簡単な事だもん。ほら」

あたしは落ちている石コロを拾うと、その石コロを原子レベルから変質させながら魔
力を込めていく。

「ウソ…ジュエルシードの何十倍もの魔力が込められているわ」

「ほらね、こっちの方がジュエルシードなんかより安定度も威力も上よ」

彼女に作ったばかりの魔力石を手渡す。

「これをあげるから不安定なジュエルシードは封印するわよ」

本当は処分するんだけど、一応は集めてイタチを納得させてから処分しようと思っ
ている。

だって、妄想設定を中途半端なままにしておくとか切りがないから、一度決着を付けて
あげないといけないのだ。

本当に飼い主は大変だよ。

アリシアに似ている少女は、渡された魔力石を呆然と見つめていたと思ったら、いき
なり抱きついてきた。

「ありがとう！…これならきつと母さんも喜んでくれるはずだよ！」

アリシアに似ているから、つい過剰に親切心を出してしまったが、どうやら彼女は母
親の命令でこんな事をしているみたいだ。

おそらく彼女はあたしと、あまり年は変わらないだろう。そんな彼女に危険なジュエ
ルシード集めをさせるなんて、お説教が必要だね!!

そうと決まればサッサとこの場は収めよう。

あたしは巨大猫にローリングソバットを喰らわせて沈めると、ジュエルシードを封印

する。

そして、アリシア似の少女に問いかけた。

「ねえ、貴女の名前はなんて言うの？」

「あつ、ごめんなさい！ まだ名乗ってなかったね。私はフェイトだよ。フェイト・テスタロッサが、私の名前だよ」

そう言って笑う彼女は、やっぱりアリシアに似ていた。

11話「黒衣の少年」

「そこまでだ。二人とも大人しくしてもらおうか」

突然かけられた声に驚いたのか、フェイトちゃんがあたしから離れてしまう。

まずい!?

これはフェイトちゃんが逃げ出しちゃうパターンだ!

いきなり現れた声の主——黒い服の少年からは、ほんの僅かだけど魔力を感じる。やっぱり探せばこの世界にも魔力を持つ者はけっこう居そうだね。

あたしはフェイトちゃんと少年を見比べる。

片や、アリシア似のエロ可愛い女の子。

片や、黒ずくめの偉そうなクソガキ。

「きつと」が、運命の選択肢なの!」

あたしの脳内に三つの選択肢が現れた。

一番、フェイトちゃんの味方をして一緒に少年をボコボコにする。

二番、少年の味方をしてフェイトちゃんを——うん、これは却下だね!

三番、あたしが少年をボコボコにして、フェイトちゃんに格好良いところを見せつけ

る。

「もちろん、三番だよね!!」

“マホトーン” (魔法封印)

“クモノ” (行動束縛)

少年の足元に蜘蛛の巣に似た魔法陣が浮かび上がる。

「なんだこれは!? 新型のバインドか!」

少年は身動きが取れない事を察すると、何やら呪文を唱え始める。だけど既に魔法は封印済みだ。

あたしはドヤ顔で言い放つ!

「お前は、『バカなっ、魔法が使えないだど!』と言う」

「何故だ!? 魔法が起動しないだどっ!? ……外れているぞ、お前」

「……」

「えつと、正解率は80%ぐらいあるよ!」

「フ、フハハハハッ!! 四捨五入すれば100%だね!!」

「うん! そうだよ!」

一瞬、言葉を無くしたあたしを、フェイトちゃんがナイスフォローしてくれた。

あたしのフェイトちゃんへの好感度が大アップした!

同時に冷たいツツコミの少年は万死に値する！

女の子がスベったらフオローするのが、男の子の心意気つてもものなの！！

「あなたはあたしを怒らせた！」

フェイトちゃんに感謝の笑顔を向けた後、あたしは少年を指差しながら宣告する。

「あなたはもう、泣いたって許してやらない！！」

「あの、泣いたら許してあげよう？」

「うん、そうだね！」

フェイトちゃんの言葉にあつさりと言撤回する。

「お前たち、僕は時空管理局の執務官、クロノ・ハラオウンだ。僕への抵抗は罪に問われるぞ！」

少年は何やら厨二病臭い事を言い出したが、あたしの第六感が告げている——イタチとは違って、こいつの厨二病は筋金入りだと。

イタチの厨二病は、所詮は口先だけのものだ。

何かきっかけがあれば発病するが、普段はイタチらしく食つちや寝のペット生活を謳歌している。

それに対して、こいつは生活の全てを厨二病の設定に当て嵌められていると見た。

服装からしてそうだ。

全身黒ずくめで、執務官とか名乗った通り、軍服チックで服にトゲまで付いている。このレベルの服を手に入れるのは大変だろう。

あれ、そう言えば、フェイトちゃんの服も黒ずくめだよな？

あたしは二人を見比べる。よく似ている気がする。

「なんだ？ なぜ僕とその女を見比べている？」

「あの、どうしたの？」

ゴクリと喉を鳴らして、あたしは問いかける。

「あんた達、もしかして兄妹だったりしない？」

「するか!!」

「この人、お兄ちゃんじゃないよ？」

「……もう一度、お兄ちゃんと呼んでくれないか？」

黒ずくめの変態が、頬を赤く染めてフェイトちゃんにリクエストをする。

「危ないっ、フェイトちゃん！　　『バシルーラ』」

「うわあああああっ!!」

「えっ、魔法で飛ばしたの!？」

よし、変態は滅んだ。

「それでフェイトちゃんは、どこに住んでいるの？」

「あの、さっきの人の事はいいの？」

「いいのいいの、あたしは変態はキライなの。厨二病は可愛げがあるけど、変態は女の子の敵だよ！ 変態死すべし！」

「そうなんだ。変態さんはダメなんだね」

「変態に“さん”は付けないの！」

「は、はい！」

まったく、アリシア似だけあつてこの子にも教育が必要そうだね。

見た目（エロい悪女）と違って、純粹そうだから誰かに騙されそうだよ。

そっか！ だから母親にいいように使われて危険なジュエルシード集めをやらされているんだね！

「うん、分かったよ。今日からフェイトちゃんもウチの子になりなよ」

「ええっ!? 急にそんな事を言われても、母さんがいるし、それにアルフもいるから無理だよ」

「あれ、アルフって誰なの？」

「私の使い魔だよ」

「使い魔……たしかリニス自分が自分は使い魔だつて妄想してたよね。」

「使い魔って、猫だつたりする？」

「ううん、アルフは猫じゃなくて犬だよ」

「うん、そつか。わんこなんだね。いいよ、わんこも一緒に暮らそう」

「あの、だからね。気持ちは嬉しいけど、私には母さんがいるから一緒に暮らせないよ」

「じゃあ、あたしがフェイトちゃんのお母さんとお話してあげるよ」

「母さんとお話をするの？」

「うん、フェイトのお母さんがフェイトに優しくなるなら、フェイトはお母さんと暮らせばいい。でも、フェイトのお母さんがフェイトに厳しいままなら、あたしがフェイトを引き取るわ」

「うええっ!? そ、そそんな事を話するのっ!? だ、駄目だよ。そんな話したら母さんが怒って貴女に酷いことしちゃうよ! 貴女も凄い魔導師みたいだけど、母さんは大魔導師なの…よ……」

あたしは抑えていた魔力を解放する。

別に魔力を高めた訳じゃない。ただ、抑えていた魔力の気配を見せたただけだ。

「えへへー、あたしは大魔導師って奴じゃないけど、大魔王とはかつて呼ばれていたよ。たぶん、フェイトちゃんのお母さんにだって、引けは取らないと思うよ」

「うそ……母さん以上の魔力を感じる」

フエイトちゃんが目を見開いて驚いていた。

それにしても管理局ね：さつきはあのクソガキの妄想かと思ったけど、どうやら違うみたいね。

あたしは空に目を向けるが、そこには何もなかった。

だけど、異空間に潜む巨大な質量を持つ存在をあたしの超感覚が捉えていた。

「ふん、どうやら宇宙人が管理局とやらの正体みたいね」

アリシアを実験体にした宇宙人共め。

大人しく宇宙の彼方に消えるなら見逃してやろうと思ったけど、どうやら消されたいらしい。

どうやらこの大魔王の力を舐めているのだろう。

あたしは右手を空に向ける。

「イオナズン」

フエイトが不思議そうにこちらを見ている。

異空間に向けて放ったから、フエイトには分からなかったみたいだ。

監視している「目」を感じたあたしは、そちらに意識を向けるとオマケとばかりに呪文を唱えた。

「メダパニーマ」（集団混乱）

これで時間稼ぎは出来るだろう。

「宇宙人殲滅の前に、フェイトちゃんの家庭問題が優先だよね！」

フェイトちゃんのお母さんを説得できれば一番いいけど、大事なのはフェイトちゃん
のより良い家庭環境を確保することだ。

「お母さんの事は、あたしに任せてね！」

「で、でも、私は貴女の名前も知らないのに、どうして私に良くしてくれるの?」
しまった!?

フェイトちゃんに自己紹介がまだだったよ!

あたしは満面の笑みを浮かべて元気いっぱい挨拶する。

「あたしは『高町なのは』だよ! 職業は元大魔王! これからよろしくねっ、フェイ
トちゃん!!」

12話「フェイト・テストロッサ」

「あの、フェイト・テストロッサと言います。よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げるフェイトに、一同はなぜか困惑の表情を向ける。

「もうっ、フェイトちゃんが一生懸命に挨拶してるんだから、ちゃんと皆も応えてあげてよ！」

あたしがブンブンと怒ってみせると、すずかちゃんが手を挙げた。

「すずかちゃん、どうぞ」

「あの、質問です。どうしてウチの裏庭から戻ってきたら金髪美少女を連れているのですか？」

「うんうん、いい質問だね。答えは複雑のようにみえて実は簡単なのです。分からないかな？」

アリシアが手を挙げる。

「アリシア、どうぞ」

「はい、お姉ちゃんは金髪萌えだからです！」

「うんうん、いい答えですね。あたしに金髪美少女の良さを教えてくれたアリサちゃん

には、後でぺったんこの胸に豊胸マッサージをしてあげるね」

「誰がぺったんこよ！ あたしは標準よ！　　すずかとかの胸が小学生の癖にデカすぎるだけよ！」

「私もそんなに大きくないよ？　　ふふ、アリサちゃんも直ぐに大きくなるから心配しなくて大丈夫だよ」

「おおっ!?　　すずかちゃんの上から目線だよ！　　レア物だね！」

「むきー!!　　誰も気にしてるなんて言っただけじゃないでしょうがっ!!」

トントン

「なに!?!」

フェイトちゃんがアリサちゃんの肩を叩いた。フオローをしてあげるのかな？

「どんまい」

「やかましいわあああああつ!!!」

まさかの止めだったよ！

「ところで、フェイトさんでしたよね」

「は、はい。フェイトです、あなたはすずかさんですよね」

「うん、よろしくね。」

「はい、よろしくお願ひします」

「それでね、もしかしたらフェイトさんは、アリシアちゃんのご親戚かしら?」

「あつ、それはあたしも思ったわ。アリシアとフェイトって似てるわよね」

「ふえ!? わたしと似てるの?」

やっぱり、ずかちちゃんとアリサちゃんも二人が似てると思うよね。

こうして並んでいると、成長前・成長後って感じだね!

はっ!?

テレビで一瞬で成長させる手品として売り出せば一発屋としてブレイク出来るかも

!

「そうかな? 自分だとわからないけど、似てるのかな?」

アリシアが興味深そうにフェイトちゃんの周りをグルグルと回りながら観察する。

フェイトちゃんは少し恥ずかしそうだ。

モジモジする姿は、何だか新鮮でいいかも。

「活発で強気なアリサちゃんと、大人しくて弱気なフェイトちゃん。ああ、性格の違う姉妹みたい…あたしはどっちを選べばいいの?」

「あのね、お姉ちゃん」

「どうしたの、アリシア?」

アリシアが何だかモジモジとしている。何だか言いたいことが有りそうだけど?

「言いたい事があるなら遠慮せずに言っていいたいんだよ。もしかして、うん〇でもしたくなっちゃったの?」

「うん〇ネタは、もう止めて!!」
うわっ!?

アリスちゃんとすずかちゃんの二人から叫ばれてしまった。

どうしたんだろう。何だか顔色が悪いけど、何かあったのかな?

「あれ、そういえば二人とも服が変わっているけど、着替えたのかな?」

「ギクツ!」

今まで気が付かなかったけど、あたしが裏庭に飛び出す前と服装が変わっているよ?

それに何だか石鹸の匂いがあるような?

クンクンと二人の匂いを嗅ぐ。

「二人ともお風呂に入ったの?」

「そ、そそそんなこと忘れたわ!」

「か、過去は振り返らない主義だから!」

二人とも急に挙動不審になったよ?

「……あたしがいなくなってから何かあったのかな?」

「何もないよっ!!」

「間髪入れずに揃って返事をする二人。

「ここまで息が合った二人は初めて見るんだけど。

「そういうえば、アリシアのにゃんこソードはどうな」「どうもなつてないよ!!」「そ、そっか」

「これ以上は、踏み込まない方が良さそうだね。

「血走り始めた二人の目も怖いしね。

「あたしは気分を入れ替えてアリシアに問いかける。

「それで、アリシアは何が言いたかったの?」

「うん、このあいだね。お兄ちゃんがお部屋で忍さんの写真を見ながら『我が恋人ながら美人だよな』って、言ってたの」

「ふふ、恭也さんは姉さんにメロメロですからね」

「すずかちゃんは嬉しそうに笑う。

「あたしとしては少し恥ずかしいけどね。

「それでね」

「アリシアの話には、まだ続きがあるみたいだね。

「忍さんとすずかさんが一緒に写ってる写真を見ながら『すずかちゃんも可愛いよな』って、言ってたの」

「もう、恭也さんは正直な人ですね」

「すずかちゃんはどこなく嬉しそうに言う。

あたしとしては、小学生相手に何を言つての？ 馬鹿なの？ と言いたい気分だけだね。

「それからね」

「まだ、続くみたいだね。

「忍さんとすずかちゃんの写真をジツと見つめながら『男なら姉妹丼を狙つてみるべきかな？』 っつて、言つてたよ」

「ひっ!?!」

「すずかちゃん体が隠すように自分自身を抱きしめながら短い悲鳴をあげる。

「アリサちゃんは意味が分かつていないみたいで首を傾げている。

「姉妹丼つて何のこと?」

「よく分かんない。でも、アリサさんとフェイトさんが姉妹みたいなら、お姉ちゃんも姉妹丼を狙えばいいのかなつて、思つただけなの」

「それだつ!!」

「アリシアの言葉にあたしは天啓を得た気分になる。

「そうだ! そうなのだ!!」

無理に片方に決めなくていいんだよ!!

“二兎を追う者は一兎をも得ず”

そんなことわざがあるが、それがこのあたしに——この大魔王に当てはまる筈がない。

別にあたしに、先人の残した言葉を蔑ろにするつもりがあるってわけじゃない。

むしろ様々な時代を生きた先人達が残した言葉は侮れないとさえ思っている。

だけどあたしは、もしも先人達があたしの考えを愚かと否定したのなら、こう答えるだろう。

『とはいえ、かつては大魔王はいなかったのだ』

*

モニターの中で、元気に走り回るアリシアの姿に私は涙を流す。

あの日、突然現れた正体不明の少女が、奇跡のような——いいえ、紛れもない奇跡を起こしてアリシアを生き返らせてくれた。

少女はそのままアリシアを連れ去ってしまったけれど、今にして思えばそれが最善だったと思う。

目を覚まして再会した母親が余命幾ばくもないなどと知れば、あの子はどれほど悲しむだろうか。

それなら、少しばかりの希望を持ったまま生きていく方が、あの子の為にはいいだろう。

私は残りの余生を、こうしてあの子の元気な姿を見ながら過ごせるだけで満足出来るのだから。

まあ、あの少女が私の事を誤解しているみたいだから、こうして覗いている事がバレないようにと、少女がアリシアから離れた時にしか覗けないのが辛い所ではあるわね。

でも、大魔導師と呼ばれたこの私を遥かに凌ぐ魔力と、奇跡そのものと言える魔法を操る少女が、アリシアの保護者としてあの子を守ってくれるなら、私は安心して逝く事ができるわ。

あら、アリシアが二人の少女を壁際に追い詰めたわ。

「そこよつ、一気に勝負を決めちゃいなさい！」

アリシアを応援する私。

ああ、こんな日が再び来るなんて！

私が幸せを噛み締めていると、私の住居である『時の庭園』を覆う防御バリアーに何か引つかかった反応があった。

「もうっ、良いところなのに、また野良宇宙怪獣でもかかったのかしら？」

『時の庭園』は異空間に停留させているけど、野良宇宙怪獣の中には異空間に潜れるものも多い、たまに引つかかるから外して逃すのが面倒だった。

「でも、放つとくと腐るから臭いが凄いのよね」

モニターの中では、ジリジリと迫るアリシアと、何とか隙をみて逃げようとする二人が見える。

生で見えないのは残念だけど、早く逃がさないとバリアーで焼け死ぬだろう。そうなったら余計に外すのが面倒だから仕方ない。

「録画はしているから、後でゆっくり見るとしましょう」

私はよっこいしよと腰を上げた。スツと動く身体にふと疑問を感じる。

「そういうえば、最近身体が軽いわね？」

不治の病に冒された身体は鉛のように重かったのに、最近はその重さを感じなくなっていた。

アリシアが生き返った喜びが影響した、精神的なものかと思っていたけど、それにしても身体が軽すぎる。

「あの時の魔法が影響してる…？」

あの少女がアリシアを生き返らせた後で唱えた呪文。たしか『べほま』と言ったかし

ら？

あの時に魔法が発動した際、その魔法光はアリシアだけじゃなく、私をも包み込んだ。恐らくは回復呪文だと思うあれが、私の身体を治した？

ふふ、まさか敵だと思っっている私を治すわけがないわよね。

……でも、あれからよね。身体が軽くなったのは。

間違っつて、私まで治したとかかしら？

それこそあり得ないわね。私を遥かに凌ぐ魔導師がそんな初心者みたいな失敗をする訳がないわ。

それならどうして？

はっ!?

まさか彼女は全てを知った上で、私を治した!?

あり得る話ね。あれほどの魔導師ならそれも不思議じゃないわ。

知った上で私を治したとしたら、それはどうしてかしら？

アリシアを生き返らせて私の不治の病まで治した。

普通に考えれば彼女は私達の恩人だわ。

もしも私に望むことがあれば、何だっつて言う事を聞くわ。わざわざ黙ってこんな事をする必要なんか無い筈よね。

それを敢えてしたという事は、他に望むことがある？

私に恩人からの強制ではなく、自らして欲しいこと？

そんなことが……

あつ！

まさかつ!?

まさかフェイトのことっ!?

愚かな私がアリシアの代わりにと生み出してしまったフェイト。

アリシアの代わりなどいない事に気付いた私が、愛してあげれなかったフェイト。

フェイトを愛してしまつたら、アリシアの事を諦めてしまいそうで怖かった。

そんな事など無いのに。

アリシアとフェイトは、二人とも私の可愛い娘よ。片方だけしか愛せないなどあるはずが無いわ！

ああ、彼女はきつとこの事を気付かせたかったのね。

どうやって私達の事情を知ったのかは分からないけど、彼女ほどの大魔導師なら不可能などないだろう。

心優しい彼女は、私達の家族を救おうとこんな事を、それも命だけでなく心まで救おうとしてくれたのね。

私は涙が流れるのを止めることが出来なかった。

*

落ち着いた私は、バリアーを見に行くことにした。

本当は直ぐにでも彼女に御礼を言いに行きたかったけど、それは私がフェイトと仲直りしてからだ。

彼女の気持ちに答える為には、フェイトを愛している姿を見せる必要がある。

このままフェイトの問題を放ったまま会いに行けば、きっと彼女は相手になってくれな
いだろう。

でも、アリスは凄く活発な子で、愛情表現も向こうからグイグイしてくれたから私は
答えるだけで良かったけど、フェイトは大人しくて、どう接したら喜んでくれるのか
が分からない。

「……抱きしめてチュウでもしたら喜んでくれるかしら？」

色々と考えながら歩いていると、バリアーに引っかかっている物が見えてきた。

ん？

あれは野良宇宙怪獣じゃないみたいだわ。

「た、助けて……」

半分ほど焦っている黒ずくめの少年が、バリアーに引つかかりながら助けを求めていた。

「ええっ?! ちょつと僕っ、大丈夫なの!？」

私は驚きながらも急いで少年をバリアーから助け出した。

「うう…あ、ありがとうございます」

「ううん、僕が引つかかっていたバリアーは、私が住んでいる所のバリアーなの。だから私の方こそごめんなさいね」

私の言葉を聞いた少年は、私を責めるどころか、逆に感謝し始めた。

「それならお姉さんは、やっぱり僕の恩人です。そのバリアーがなければ、僕は異次元の彼方まで飛ばされていました。本当にありがとうございます……」

そこまで言うとは少年は意識を手放した。

「早く治療をしなきゃいけないわね」

私は少年を抱きかかえると治療ルームへと向かった。

「フェイトとの事は、少し後にするしかないわね」

意識を無くしながらも、私の手を離さない少年に母性本能をくすぐられる。

「ふふ、それにしても『お姉さん』なんて呼ばれるのは何年ぶりかしら」
私はちよっぴりドキドキしながら先を急いだ。

13話「時空管理局の聖女」

私が助けた男の子は、クロノ・ハラオウンと名乗った。

全身の火傷に、何やら怪しげな魔法を掛けられたらしく、呪文を唱えられず、身動きも殆ど取れない状態に陥っていた。

喋るのも辛そうだったので、名前以外は殆ど聞いていないが、心根の優しい男の子だということには直ぐに分かった。

彼は殆ど動けないから、身の回りのお世話を全部してあげたら凄く恐縮をしてしまい、最後には「責任は取ります」と言いだしてしまった。

きつと、下の世話やお風呂に入れてあげた時に、彼が起こしてしまった男の子特有の生理現象の所為だろう。

最初は見て見ぬ振りをしていたけど、クロノ君は動けないせいで自分で処理が出来なく、辛そうだったから、ついお手伝いをしてあげた。

うふふ、その時の彼の反応は可愛かったとだけ言っておこう。
そんな時間を過ごしている時に、救援信号が飛び込んできた。

こんな管理外世界の中でも、辺境に位置する場所での救援信号に驚いたけれど、無視

をする訳にもいかない。

私は急ぎ、救援信号の場所へと向かった。

*

まさか時空管理局が誇る、時空航行部隊に所属する次元空間航行艦船『アースラ』が難破しているとは思わなかった。

何でも「第九十七管理外世界」つまり、私がジュエルシードを狙って活動していた地球に派遣されたが、到着後直ぐに原因不明の大爆発が起こり、訓練を積んだはずの隊員達も大半が恐慌状態に陥ったそうだ。

正気を保っていた艦長以下の少数は、何とか現状を復帰しようと頑張っていたが、恐慌状態の隊員達はいままで経っても正気に戻らず、暴れ続けていた。

不思議と恐慌状態に陥った者同士は争わずに、正気の者を狙うという不可思議な状態だったという。

そして、その正気の少数の者達の中に問題があった。

正規の隊員ではない研修生達がいたのだ。

幸いな事に、事故当時の研修生達は『アースラ』内の見学中で、特に魔導防壁が嚴重

な重要施設内にいたため、恐慌状態の隊員達から襲われることはなかった。

だけど、その研修生達はミッドチルドでも上流階級に所属する者達の子弟だった。

時空管理局の高官は勿論として、有力な管理世界の元首レベル、政・経済界の大物達、そんな子弟達が危険に晒されている。

時空管理局も恐慌状態に陥った。

現場の艦長達が命懸けで研修生達を守っている間、時空管理局では責任の押し付け合いで時間を無駄にしていたらしい。

そして、研修生の中に孫を持つ、時空管理局の高官が異変に気づき、研修生達を『アースラ』に見学させた責任者であり、今回の事件を必死に隠蔽しようとしていた者を文字通りにぶっ飛ばして、事態の收拾を命じた。

すぐさま『アースラ』の艦長は、禁止されていた救難信号を発信した。

そこに駆けつけた私は、艦長の要請を受けて、恐慌状態の隊員達を一人残らず叩きのめして拘束した。

あの恩人である彼女に身体を治してもらったお陰で、最盛期の力を取り戻していた私でもギリギリの戦いだった。

何度も挫けそうになったが、まだ年若い研修生達を守る為に、そしてその研修生達のためにも借りながらも何とか勝つ事が出来た。

全てが終わった時になって、やっと時空管理局の応援が到着した。

遅すぎる応援に憤る研修生達だったが、それまでの戦いを通じ、年齢を超えた友情を育んでいた私の取りなしを受けて、その怒りを収めてくれた。

その事は艦長に随分と感謝されたが、私としては今回のことを大事にして、自分の正体が明るみになる事が嫌だったに過ぎない。

しかし、私の正体はアツサリとバレてしまった。

私は法を犯した研究をしていたため、捕まることを覚悟したが、事態は私の思わぬ方向へと進展していった。

研修生達が強烈に私の弁護をしてくれたのだ。

私が出たような事に手を染めるには、必ず理由がある筈だと言って、なんとアリシアが犠牲になったあの忌まわしい事故にまで遡り、再捜査が徹底的に行われた。

その結果、私の名誉は回復され、あの事件に関わった者達は全て法の裁きを受ける事になった。

私の禁忌の研究も情状酌量されて、無罪となった。

全ての事が怒涛の勢いで流れていき、私が気付いた時には、*「悲劇に翻弄されながら
も正しき心を忘れずに若き命を救った時空管理局の聖女」*などと祭り上げられていた。

そう、時空管理局の聖女だ。いつの間にか私は時空管理局の名誉提督とかいう訳の分

からない役職に付いていた。

まったく、時空管理局の保身というのは相変わらずのようだ。事件を解決したのはあくまでも時空管理局にしたいらしい。

私はクロノ君の世話をしながら呆然とそんな事態を受け入れるしかなかった。

ちなみにクロノ君は『アースラ』の艦長の息子だった。

その為、クロノ君の随分と歳の離れたプロポーズも現実味を帯びてしまっていた。

艦長——リンデイには何故か応援されている。

「歳の差なんか気にする必要はないわ！」

彼女としては若いだけ取り柄の、いけ好かない女に息子を取られるより、私と結婚して欲しいそうだ。

それにしても、アリシアとフェイトの事を随分と放ってしまっている。

もう少し、状況が落ち着いたら地球に行かなくてはいけないだろう。

そういうえばジュエルシードはどうなったのだろうか？

私は心配になるが、クロノ君が甘えてくるから応えてあげなくてはいけない。

ああ、いけない母親を許してね。

心の中で、アリシアとフェイトに謝りながら、私はクロノ君とイチャイチャするのだった。

14話 「無双の大魔王軍団」

「やっぱり戦える仲間が足りないね」

フエイトちゃんのお母さんを説得したあとには、宇宙人との戦いが待っている。

もちろん、宇宙人などに負けるつもりは毛頭ないけど、宇宙人の数が分からない。

一斉に地球各地を襲われたら、あたし一人では手に余る危険性がある。

大魔王だった頃は、襲う側だったから何とも思わなかったけど、守る方になると数を頼りに襲ってこられるのはムカつくわね。

「こちらの側の戦力としては、あたしとフエイトちゃんだけだもんね」

「うん、そうだね」

あたし達は、アリサちゃん家の一室を借りて作戦会議を行っていた。

すずかちゃん家からワザワザ移動したのには理由があった。

あそこだと「夜の一族」が監視しているからだ。

あたしに気付かれていないと思っっているだろうけど、大魔王に死角などない。

魔法での監視なら気付かれると思ったのか、機器による盗撮・盗聴だったけど、イン

パス（鑑定呪文）は、魔法・機械・生物などお構い無しに鑑定してくれる。

何となく気になって使った瞬間、あらゆる場所から反応があった時には、驚く前に笑ってしまった程だ。

もしもトイレなどのプライベートエリアに仕掛けていたら、すずかちゃんには悪いけど「夜の一族」を滅ぼそうと思ったが、幸いな事に（もちろん夜の一族にとつて幸いな事に）トイレなどには無かった。

まあ、知られて困る弱点など、あたしには無いから大目に見てあげてるけど、対宇宙人の作戦を知られた場合、どこから情報が漏れるか分からないからだ。

あたしは、宇宙人の情報収集能力を甘く見ない方がいいと判断したわけだ。

「あたしにも魔力があれば戦えたのに悔しいわね」

「仕方ないよ。夜の一族の私だって、少しばかり運動能力が高いただけなもの。とてもじゃないけど、宇宙人なんかと戦える力はないわ。だから、もう帰ってもいいかしら？」
アリサちゃんが悔しそうにしている。すずかちゃんは既に戦うのは諦めているみたいだった。

「わたしには少しだけ魔力があるんだよね！」

アリシアが嬉しそうにしているが、フェイトちゃんが言うには、とてもじゃないけど戦闘レベルには達していないそうだ。

あたしから見れば、フェイトちゃんもアリシアも魔力が小さすぎて差が分からなかつ

た。

こうしてみても、あたしの仲間と戦えるのは、やはりあたしとフェイトちゃんの二人だけだ。

フェイトちゃんは使い魔のアルフも戦えると言っていたけど、あたしの使い魔的ポジションの猫のリニスとイタチの事を考えれば、犬のアルフとやらの戦闘力も想像できる。

あたしはリニスが傷付くのは嫌だから、アルフも戦わせるべきではないだろう。

イタチは弾除けぐらいにはなるかもしれない。

「もうっ、なのは達にだけ戦わせて、あたしは見てることしか出来ないの!」

アリサちゃんが、そんなのは我慢できないと吠える。

うんうん、そろそろあたしの出番だね!

「心配しないで、アリサちゃん!!」

「なによ、あたしは強いから心配するなどとも言いたいのかしら?」

「ふっふっふ、違うよ! 実はこんな事もあるとかと、魔力のない人でも戦えるようになるアイテムを作っておいたのよ!!」

「本当なのっ!」

「私の力も強く出来るのかな?」

「わたしも戦えるって事だよね!!」

「チツ、余計な物を……こっさり帰ろうかしら?」

あたしがかつて戦った世界では、魔力を持たなくても戦う人は数多くいた。

その人達は弱かったか? いいや、そんな事はない。魔力を持たなくても「気の力」

を高め、魔力を帯びた防具で守りを固め、魔法の武器でドラゴンをも屠る戦士達がいた。

この世界の人間は気の力も弱いけど、このあたしが作ったアイテムには、気の力を増幅する力がある。

あたしの計算通りの性能を発揮すれば……そうね、前世の世界で戦士をしていた「ヒュンケル」とかいう坊やを笑いながら、ど突き回せる程度の戦闘力は発揮できるはずだ。

「ジャジャーン!! これがあたしが作ったアイテムだよ!!」

あたしは亜空間にしまっていた数々の魔法のアイテムを取り出す。

ちなみに亜空間の出入口は、あたしのポケットに設定している。

別に青いタヌキをリスペクトしたわけじゃないけど、ポケットだと便利なんだよね。

直接、空間に手をつ込んだら消えたように見えて騒がれるからね。

「こういうのはフィーリングが大事だからね。気に入ったのを手に取ってみて」

あたしの言葉にアリシアが真っ先に飛びついた。

「このステッキが可愛い!!」

ふむふむ、流石はあたしの妹だね。

自分に必要なものが本能で分かるみたいだ。

「そのマジカルステッキはね、持つ人に無限の魔力を供給してくれるんだよ」

多重次元から少しずつ魔力を汲み上げて、持ち主に与えるマジカルステッキ。

一つの次元から汲み上げられる量は微量だけど、多重次元自体が無限にあるから、結果的に無限の魔力を供給できる。

もちろん、マジカルステッキ自体の強度の問題はあるけどね。

「あとね、このニャンコのリュックも可愛いよー」

あたしの妹は化け物か!?

マジカルステッキと対となるマジカルリュックを自分で選ぶなんて!!

ヌイグルミみたいな猫型リュック。

リュックなのに荷物を入れる事はできない。その代わりに魔力を溜める事が出来るのだ。

リュック内に設定した専用の亜空間に溜めるため、人間レベルで考えれば無限に等しい容量がある。

マジカルステッキだけなら、魔力の供給は無限でも溜められる量は、アリシアの許容量に依存する。

マジカルリユックと組み合わせる事で、アリシアが魔力に困る事は無くなるだろう。「最後に気になったのはね、コレだよ!!」

なんて恐ろしい子っ!?

あたしはこの瞬間、アリシアの直感に恐怖したと言っていていいだろう。

マジカルステッキとマジカルリユックは、アリシアに無限の魔力を与えてくれる。

だけど、その無限の魔力も使いこなす事が出来なければ意味が無い。

アリシアが手にしているのは、不気味な顔が浮かび上がっているつばの広いハットだった。

「えへへ、なんだかブサ可愛いね!」

アリシアがそのハットを被ると、ハットに浮かび上がっていた顔が喋り出す。

「ほう、この儂を選ぶとは見込みのあるお嬢ちゃんじゃのう」

「ほわわっ!! 帽子さん喋れるの!?!」

「もちろんじゃよ。儂の名はシャポー。これからよろしくのう」

「うんっ、よろしくね!」

マジカルハットのシャポー爺さん。

持ち主の魔力を消費する事で、数多の魔法を使うマジカルハット。

マジカルハット自体が意思を持っており、状況に適した魔法を使ってくれただけでな

く、持ち主への指導もしてくれる教師タイプ。

シャポー爺さんは、博識で状況判断も優れているため、アリシアのサポートには最適だろう。

まだ幼いアリシアには接近戦は無理だから、この三つで十分だろう。

「私はこちらが気になるわ」

フェイトちゃんが手に取ったのは腕輪だった。

星降る腕輪（大魔王印）

着用する事で、持ち主の速度を持ち主の魔法属性に合わせて上昇させる魔法の腕輪だ。

つまりフェイトちゃんの場合、魔法属性は電気らしいから、雷と同じ速さまで上昇する。

使いこなすのは難しいだろうけど、速度重視の戦いをするのなら、これ以上のアイテムはないだろう。

「他に気になる物はないの？」

「うん、今の私に必要なのは、これだけの気がするわ」

なるほど、フェイトちゃんがそう感じるのなら、それが正しいのだろう。

あたしは黒いマントを手にとると、すぐかちゃんに渡す。

「えっと、これはどういった効果があるの？」

「これはね、身につけた者の潜在能力を圧倒的に引き出した上で、狂氣的にまで上昇させる……」ときめきトウマント」だよ」

「……ひとつ気になるのだけど」

「なあに？」

「どうして、私には自分で選ばせないで、これを手渡したの？」

「すぐかちゃんには、これが一番だと思ったからだよ」

あたしはニツコリと笑ってみせる。

「……まあ、いいわ。それで私にはこれだけなの？」

「これだけってどうか。コレで十分過ぎると思うよ。すぐかちゃんにとってね」

「ふうん、分かったわ。なのはちゃんの言葉を信じるわね」

最後にアリスちゃんは、うんうん唸っていた。

「どうしたの、気になるのは無かった？」

「えっと、あたしの理性としては、その女性騎士の鎧みたいのと銀のレイピア、それに

金の腕輪を選びたいのよ」

アリサちゃんが示したのは、どれも超一級品のマジックアイテムだから、身につければ宇宙人達を圧倒できると思う。

「いいと思うけど、それなら何を悩んでいるの？」

「理性はそうなんだけど……あたしの本能がこつちを選べって吠えるのよ」

アリサちゃんが指差すのは、無骨な大太刀だった。

「こんなお洒落じゃない日本刀は嫌なのに、どうしても気になるのよね」

あとはコレね。

そう言つて、じゃっかん嫌そうに指差すのは、黒い玉がついたペンダントだった。

「うう、これもお洒落じゃないのに気になって仕方ないのよ」

アリサちゃんは悩みまくった結果、本能に負けてしまった。

無骨な大太刀、贅殿遮那（にえとののしやな）

黒いペンダント、コキユートス

大太刀の方は、あらゆる魔法を斬る事によって、無効化してしまう力がある。

魔法の構成自体を解除するため、斬れさえすれば、どんな大魔法でも無効化できるといふ、ある意味バグアイテムかもしれない。

黒いペンダントには、あたしが全力で作った強大な力を持つ擬似生命体が封入されて

いる。

持ち主は、擬似生命体の力を引き出して、自分の力に変えて戦う事ができる。

擬似生命体自体は、唯の力の塊であり、持ち主の戦い方、センスによつて引き出せる力は千差万別である。

力そのものを引き出すため、呪文の詠唱なしで魔法も使う事ができる。ただし、持ち主のイメージ力がシヨボければ、シヨボい魔法しか使えない欠点もある。

こうして、あたしと仲間達は着々と戦う準備を整えていった。

「にやははっ、やっぱり軍団を作っていくのは楽しいの!!」

15話「吸血鬼」

素っ裸で、黒マントを羽織っている痴女がいた。

「いやあああああつ?!」

「すずかちゃんだった。」

「どうして裸になるのよおおおおつ!!」

「すずかちゃんが選んだマジックアイテム。〴〵ときめきトウマント。〴〵

着用者の潜在能力を圧倒的に引き出した上で、狂氣的にまで上昇させる黒マント。

ただし、なんちゃって吸血鬼が着用した場合に限り、着用者は裸になる。(裸のように見えるが、実際には魔力によって編まれたボディスーツ。もちろん、大事な所は見えます) その代わり、噛み付いた相手の姿に変化できる。

「すずかちゃん、裸じゃないから大丈夫だよ」

「え? あ、本当だ。裸みたいだけと違う……けど、体に密着してるから体のラインが丸分かりますよ!」

「うんうん、あたしの設計通りだよ!」

「どうしてこんなもんを設計してんのよつ!!」

すずかちゃんの言葉に、あたしは少し昔の事を思い出す。

当時のあたしは金髪萌えだった。

日本人にありがちな、西洋コンプレックスの裏返しだったのかもしれない。

でも、あたしは出会ったのだ！

十数年前…いや、すでに数十年前のものになるだろうか。

ネットの海をサーファー気取りで渡っているときに出会った。

アニメのエンディングで、裸に黒マント一枚で踊る、黒髪の女の子の艶姿に!!

衝撃だった。

あたしは黒髪の女の子に魅了されたと言っても過言ではないだろう。

金髪美少女もいけど、黒髪美少女もね!!という気持ちになった。

そう、裸に黒マント一枚…どう考えても痴女だった!!

即座に調べた。

その女の子は、吸血鬼と狼女のハーフという設定だった。

その能力は、噛み付いた相手の姿になれるというものだった。

「つまり、なんちやって吸血鬼だったのよっ!!」

「……それで?」

あれ、すずかちゃんの目が冷たい?

あたしが言っている意味が通じていないのかな？

「だからっ、すずかちゃんと同じ、なんちゃって吸血鬼なんだよっ!!」

「……それで？」

あれれ、すずかちゃんの目が絶対零度だよ？

あたしの言葉の真意が伝わっていないのかな？

「あたしの親友もなんちゃって吸血鬼なら、裸に黒マントを再現してあげるのが友情の証だよね!!」

「……それで？」

すずかちゃんの後ろに鬼が見える？ 目の錯覚かな？

ここはズバリと言った方がいいのかも？

「裸に黒マント、とっても似合っているよ!!」

「やかましいわあああああああっ!!!」

ドカーン!!

すずかちゃんの痛恨の一撃が、あたしに決まった!!

この大魔王の足を、一步とはいえ下がらせただどっ!?

「恐るべしっ!!」 江藤 蘭世「!!」

「誰よ、それは!?!」

「ちなみに、黒マントの裏地は女の子っぽく赤色なんだよ。それとも吸血鬼っぽくと言
うべきなのかな？」

「このクソアマがつ!! ンなことつ、誰も聞いてないわよ!!」

かつて、お淑やかな美少女と思われていた女の子がいた。

その女の子は、もういない。

「あんたのせいでしょうがああああつ!!!」

*

ふわああ、今日もよく寝たなあ。

お腹の音で寝覚めた僕は、モゾモゾとご飯の器の所に移動する。

あれ、ご飯が入っていない？

もうっ、ご飯を入れ忘れるなんて、困ったご主人様だなあ。

僕はバンバンと、ご飯の器を叩いて催促をする。

“ごめんね、すぐにご飯を入れるからね”

忘れん坊のご主人様だけど、僕は心の広いフェレットだから許してあげる。

“はい、ご飯を入れたわよ。たっぷりお食べ、イタチ”

またご主人様が、僕のことをイタチと呼ぶ。

僕は下賤なイタチではなく、高貴なフェレットだというのに！

でも、僕はご主人様を許してあげる。

だってあれは、わざと言っているからだ。

僕の気を引きたくて言っているのだ。

つまり、ご主人様はツンデレなのだ。

ふふ、困ったご主人様だ。

今日は特別にご主人様のお膝に乗ってあげよう。

僕の毛皮も撫でさせてもあげよう。

たまにはサービスするのもいいだろう。

だって、僕の大事なご主人様なのだから。

「あのですね、ユーノ。あなた本物のフェレット化していませんか？」

「うわあっ!? そうだよ！僕はフェレットじゃない！僕は人間の魔導師なんだよっ

!!

「イタチ、うるさいわよ！」

「僕はイタチでもないんだあああああつ
!!!!」

最終話 「新たな季節へ」

フェイトちゃんのお母さんが、何も言わずに蒸発してから数週間が過ぎた。

フェイトのお母さんの名前はプレシア・テストロッサ。

その名を聞いた瞬間、アリシアが飲んでいたジュースを吹き出した。

「わたしのお母さんもプレシアだよ！」

その偶然にフェイトとあたしも驚いたけど、なんだか運命のようなものを感じた。

アリシアは、お母さんの職場での事故の影響なのか分からないけど、記憶が所々欠けていた。

その中にはファミリネームも含まれている。

「もし良かったら、アリシアもテストロッサを名乗ってみない？」

フェイトちゃんのそんな提案も、同じ名前のお母さんを持つ親近感から発したのだろう。

数日後、ただのアリシアは「アリシア・テストロッサ」になった。

自称で勝手に名乗っているだけだけど、あたし達に発表した時の、アリシアの嬉しそうな顔が印象的だった。

*

ある日、フェイトちゃんの使い魔であるアルフを紹介された。

最初に会った瞬間は、犬耳と尻尾をつけたコスプレ好きのお姉さんかと思ったが、フェイトちゃんが自分の魔力で作成した使い魔だという。

あたしはその言葉に、リニスが自分では使い魔を名乗っていた事を思い出した。

「リニス、ちよつといいかな」

「なんででしょう?」

“モシヤス”

ドロン!

「えっ、人の姿に変化した!?!」

リニスは猫耳、尻尾付きの綺麗なお姉さんに変化した。

「ふっふっふ、流石はあたしの使い魔だね、すごい美人さんだよ!」

この世界の使い魔というと、猫やフクロウなどの小動物をイメージしていたが、人型が主流らしいとフェイトちゃんに聞いた。

リニスが、使い魔業界で肩身の狭い思いをしないようにと、人型にしてみたなら想像以

上の美人になった。

モンスターばかりのあつちの世界とは、大違いだ。

「あの、これからはこの姿でいけば宜しいのですか？」

リニスが少し困った様子だった。

「何か問題があるの？」

にゃんこよりも人の姿の方が、生活しやすいと思うけど、何かあるのかな？

「あの、いきなり人の姿になると高町家の方達になんと言えば……」

なんだ、そんな事か。

「大丈夫だよ！ 幻影をみせて、にゃんこのままだと誤魔化してもいいし、両親を説得して住み込みのお手伝いさんとして雇ってもいいよ」

「あのですね。それ以上の問題としまして……」

リニスは気まずそうに、ソツと指をさす。

その指が示す先に、ツーンと視線を向けていくと、ブスツとした雰囲気のイタチが睨んでいた。

「僕も人の姿になりたいのに！」

イタチ耳と尻尾を持つ男の子。

うーん、別にいららないや。

「マヌーサ」（幻惑呪文）

「やったあ！ 人間の姿になったぞ！」

イタチが幸せそうにしている。

とりあえず、カゴに入れて鍵をしておいた。

「あの、それでいいのですか？」

「じゃあ、リニスは年頃の男の子と一緒に暮らしたいの？」

リニスは、ハッと何かに気付いたように目を一瞬だけ見開くと、ニツコリと笑った。

「イタチはカゴの中で充分ですね」

高町家の女性達がスカート姿だと、イタチがよく近くにいる事を思い出したりリニスは、そもそもイタチが少年だった事も思い出して、後でシめてやろうと決意したのだった。

*

今日は図書館に見聞を広めにやってきた。

あちらの世界の知識なら誰にも負けないけど、こちらの世界だとまだまだ知らないことが多。

特に戦術関連などは、力押しが多かったあちらよりも、遥かに洗練されている。

知識が邪魔になることはないだろうと、暇さえあれば、こうして勉強を重ねている。

「も、もうちよつとや」

あたしが本を探していると、少し離れた場所で車椅子の少女が、高い位置の本を取ろうと手を伸ばしていた。

あたしは、その少女の頑張る姿に思わず言葉を漏らす。

「人間が足掻く姿は美しいよね」

あたしのように強い力を持たないのに、人は諦めずに足掻く。その姿を尊いと思うようになったのは、いつからだろう？

そんな事を思いながら、あたしは彼女の姿が見える位置にある喫茶スペースに移動すると、お茶しながら必死に足掻く彼女の姿を微笑みながら見学する。

「頑張れ、女の子。あたしが見ていてあげるよ」

10分近くも頑張った少女は、汗を流しながらも達成感で笑顔を見せていた。

「うんうん、頑張ったね。あたしがちゃんと見ていたからね」

あたしは深い満足感を得て、この日は帰路へとついた。

*

今日は炎天下だけど散歩をしていた。

炎天下といっても、魔法で身体の周囲の空気の温度を下げているから過ごしやすい季節と変わらない。

よく買い物をする駄菓子屋の近くまで来ると、見慣れない少女がいた。

その赤い髪の少女は、駄菓子屋のアイスを物欲しそうに見つめていた。

この炎天下でジーと見つめている女の子は、いつからここで立っているのだろうか？

あたしは彼女が見つめている視線の先にあるアイスを手にとると、店主に代金を支払う。

「店主さん、お釣りはいらさないの」

「いつも通りピツタリだよ」

「うん、だからお釣りはいらさないの」

店主とのいつものやり取りをした後、あたしは少女の近くに腰を下ろす。

少女の視線があたしの手元のアイスに集中する。

あたしは袋を破ると、冷たくて甘いアイスを舐める。

ぺろぺろ

ジーー！

ペロペロ

ジーーーーー!!

ペロペロ

ジーーーーー!!!!

炎天下のアイスは美味しいね。

あたしは食べ終わると、残った木の棒を近くにいた女の子に差し出す。

「捨てておいてね」

ムツとする女の子だったけど、あたしが差し出した木の棒に、何かが刻まれているのに気付くと一転して笑顔を浮かべる。

「もらっていいのか!?!」

「二度は言わないよ」

「あ、ああ! ありがとなっ!!」

女の子は嬉しそうに木の棒を受け取ると、駄菓子屋に入っっていった。きつと捨てに行っただね。

あたしはアイスで暑さが和らいだから、そのまま散歩を続けた。

ふと見上げると、ギラギラ照りつける太陽が、新たな季節の到来を激しく自己主張していた。

番外編

大魔王と賢者の石

ある日、お空の散歩中に梟フクロウと出会った。

“バツサバツサ”

一生懸命に何かを掴んだまま羽ばたいていた。ご飯を捕まえたのかな？
と思つたけど、その足が掴んでいるのは封筒だった。

「伝書鳩ならぬ伝書梟かな？」

あたしは興味が湧いて、バツサバツサと一心不乱に飛び続ける梟に近付いてみる。

「ねえねえ、梟さん。何を運んでいるの？」

『ギャース！』

友好的にお話をしようとした美少女に対して、下等な梟は愚かにも威嚇をしてくる。

もちろんムカついた美少女は反撃に転じるよ。

【バギ】（もちろん超絶手加減バージョンだよ）

美少女が放った真空の刃は、狙い通りに封筒を避けて害鳥の鼻のみを切り刻む。

「とお、フライングキャッチ☆」

機動力を失った封筒が風に飛ばされる前にキャッチする。

「さてと、中身は何かな？」

封筒を開けてみると中には書類が入っていた。

書類は英語で書かれていたけど、あたしは既に英語をマスターしているから問題はな
い。

「ホグワーツ魔法魔術学校の入学案内？」

この地球にも魔法使いは存在していたようだ。

「えへへ、宇宙人との戦争も終結して退屈だったから丁度いいかも」

嘗ては大魔王として名を馳せたこのあたしだけど、この世界の魔法に関しては初心者
だ。

魔法学校で新たな魔の深淵に挑むのも一興だろう。

あたしは早速、魔法学校に入学すべく動き出した。

「先ずは家族と親友達を説得する必要があるよね」

【ルーラ】

きつと、あたしを心配して大反対するだろう家族と親友達をどうやって説得するかを、考えながら、あたしは英国の空から姿を消した。

何故かトントン拍子に話が進んだ。

親友の一人である、すずかちゃんに特に積極的に動いてくれた。

夜の一族の伝手で英国の魔法学校へと入学の話をつけてくれたのだ。

特に家族や親友達の反対もなく、あたしは英国へと向かうことになった。

コツソリとアリサちゃんを「モシヤス」でネズミに変化させて連れて行こうとしたけど、直前でリニスにバレて失敗してしまった。

仕方ないから次の機会を待とうと思う。

まあ、何はともあれ英国へ出発だ。

【ルーラ】

英国に着いた。

ホグワーツで必要なものは夜の一族が用意してくれたけど、杖だけは自作の物を使う

予定だ。

「真・光魔の杖〜!」

嘗て愛用した「光魔の杖」を手本として、更に改良を加えた杖だ。

以前の杖は際限なく魔力を吸うため長期戦には不向きだった。

そのため、この「真・光魔の杖」は魔力の上限を設けた。その上限は、たったのメラゾーマ20発分程度だから百年でも千年でも余裕で維持できる。

だけど、上限を設けたため魔力刃の威力は、宇宙人の母艦を一刀両断できる程度の威力しかなかった。

そんな短所のある杖を使う理由は勿論ある。

それはこの杖を所持していれば、あたしが隠蔽しきれない魔力を消費してくれるからだ。

「ふふ、これであたしも普通の女の子だね」

完全に魔力の気配を消したあたしを警戒する者などいないだろう。

ここにいるのは、可憐でキュートな魔法使い見習いの普通の女の子だ。

ククク、これで誰にも警戒されることなく、学生生活を楽しめるね。

「はい、空いているかな？」

ホグワーツ行き列車の個室で寛いでいると、メガネと赤毛の二人組がノックもせず扉を開けて入って来た。

失礼な小僧共だ。

「はいは満員だから他所に行つてね」

あたしは魅力的な笑顔で答える。

昔のあたしなら問答無用で叩き出していただろう。

ふふ、このあたしも優しくなったものだね。

「え、いや、その……僕には席が空いているように見えるんだけど？」

メガネがしつこく食い下がってくる。

「うん、そうだね。でも席は空いているけど、君達の席はないんだよ」

あたしは少しイラつきながらも優しく答える。

「僕達の席はないって、それはどういう意味なの？」

どうやら察しの悪いメガネのようだ。あたしは分かりやすく説明してあげる。

「さつさと失せてくれるかな？　あたしは狭い部屋で男子に囲まれるのは嫌いなもの。」

君達が可愛い女子だったら良かったのにね。じゃあ、さようなら」

ふふ、実力行使ではなく言葉で諭してあげるだなんて、本当にあたしは優しくなった。これもアリサちゃん達の影響かな。

「おったまげー、君って顔は可愛いのに性格は悪い『えいつ』ゲボオオオツ!!」
「ロンツ!!」

反射的に口の悪い赤毛に蹴りをくれてやった。

扉の外まで飛んでいった赤毛を追いかけて、メガネも出ていってくれたから一石二鳥だった。

ピシヤン!

あたしは扉を閉めた。

コンコン

「ねえ、ここにヒキガエルが来なかったかしら?」

ノックと共に入ってきた女の子が、あたしに声をかける。

ん…?」

ヒキガエル…?」

あたしの聞き間違いだろうか。

「えつと、今、ヒキガエルって言ったのかな？」

「そうよ。ペットのヒキガエルがいなくなったから探しているのよ」

その答えにあたしは戸惑ってしまう。

あたし自身も色々と常識から外れた存在だと認めるが、ヒキガエルをペットにする感性は理解できない。

「へ、へえ、貴女ってヒキガエルをペットにしてるんだ。うん、人の趣味はそれぞれだから文句はないよ」

「え、違うわよ。私のペットじゃないわ。ネビルのペットよ。っていうか、魔法界ではヒキガエルのペットは普通じゃないの？　私の家族は魔法族じゃないからその辺りの常識には疎いんだけど」

「なんだ、そうだったんだ。あたしも魔法界の事は知らないから分からないけど、ヒキガエルをペットにしようとは思わないかな」

「どうやらこの女の子は、あたしと同じように魔法界とは無関係な血筋の人間のようなのだ。」

「じゃあ、あなたも私と同じで人間界の出身なのね。良かったわ、私だけ人間界の出身かもって心細かったのよ。そうだ、私の名前はハーマイオニー・グレンジャーよ。これが

「らよろしくね」

「あたしは高町なのは、なのは・高町つて名乗るのが英国流なのかな？　こちらこそ、

これからよろしくね、ハーマイオニーちゃん！」

「あ、うん！　よろしくね、なのはちゃん！」

あたしが差し出した右手を彼女は嬉しそうに握り返してくれた。

列車が到着するまでの間、あたしとハーマイオニーちゃんは楽しくお喋りをして過ぎました。

到着間際になってからハーマイオニーちゃんはヒキガエルのことを思い出した。あたしは、彼女がアワアワし出したのが微笑ましくて、つい笑ってしまい彼女に少し睨まれてしまった。

ホグワーツに到着した後は、何やら組み分け帽子とかいう怪しげなもので寮を選別すると言われた。

「なのはちゃんと同じ寮になれるかしら？」

「大丈夫だよ。あたしは普段の行いが良いから同じ寮になれるよ」

「ふふ、その言い回しは日本人らしいわね」

そんなやり取りの中、ハーマイオニーちゃんの順番となり彼女はグリフィンドールとかいう寮になった。

たしか、ハーマイオニーちゃんの希望もグリフィンドールだったはずだ。

彼女の希望通りの寮になれて良かったけど、ハーマイオニーちゃんは心配そうにあたしの方を見つめている。

うんうん、大丈夫だよ。あたしも同じ寮に行くからね。

あたしは安心させるように手を振ってあげる。

ハーマイオニーちゃんも振り返してくれた。

そして、いよいよあたしの名前が呼ばれた。あたしは前に進み出ると古ぼけた帽子をかぶる。

「…何者じゃ、お主は？」

古ぼけた帽子が問いかけてきた。

「可愛い女の子かな？」

「…何も読めぬ。だが、閉心術ではないな」

なるほど、さつきから精神に働きかけてくる力を感じていたけど、それがこの帽子の能力なわけだね。でも、力が弱すぎてあたしの精神防御を突破する事は出来ないみた

い。

「あたしには通じないけど、乙女の心を覗こうだなんて悪い帽子だね。お仕置が必要かな？」

「ひっ!!? ま、待て、これは仕事なのだ。悪気はないゆえ許してくれぬか!」

帽子から伝わる力を遡って、あたしの力が帽子の核に触れたことに気付いたみたいだね。

あたしが少し圧力を加えれば、帽子の核を潰すことは簡単にできる。

その事に気付いている帽子はブルブルと震えている。

「うーん、確かに少し可哀想かな? それじゃあ、あたしをグリフィンドールにしてく

れたら許してあげるよ」

「グリフィンドオオオオオオール!!!」

帽子が力強く宣言する。

うんうん、勇気に溢れたあたしはグリフィンドールに決まったよ。

ハーマイオニーちゃんが満面の笑みで喜んでくれた。

「ハリポーッター？」

「ええ、魔法界の英雄よ。名を呼んではいけないあの人を倒したのよ」

「ハーマイオニーちゃん、同じ寮になったメガネが英雄だと教えてくれた。つていうか、名を呼んではいけないあの人って誰のことかな？」

「ハア、と呆れた感じで溜息を吐いたハーマイオニーちゃんが教えてくれた。

かつて、英国の魔法界に君臨した闇の帝王の伝説を。

カクカクシカジカ

「なるほど、恐ろしい闇の帝王は赤ん坊に倒されたんだね……ププツ」

「笑つちやダメよ！　魔法界の人達は本気で恐れているんだから！」

「でも、その話だと闇の帝王さんは、少しばかり魔法に優れていたただけだよね？　そんなの大勢で囲んでボコつちやええ良かった気がするんだけど？」

「少しばかりじゃなくて、魔法界でも一二を争う程の魔法使いだったのよ。並みの魔法使いでは帝王の前に立つことすらできなかつたはずよ」

「それなら遠距離からライフフルで射殺すればいいんじゃないかな？」

「誇り高い魔法使いは、人間界の武器なんか使わないのよ」

大勢の人が殺され続けても、誇り高い魔法使い達は人間界の武器なんかには頼らず、闇の帝王さんから隠れて震えていたわけ？

「魔法使いってバカなのかな？」

「それを言ったらお終いよ！」

ハーマイオニーちゃんに魔法界の様式美について説明された。でも、やっぱりバカだと思った。

寮ではハーマイオニーちゃんと同室になった。

人数の関係で本来は四人部屋らしいけど、あたし達は二人つきりだ。

こうなってくるとなんだか運命を感じるよね。

前世では友人と呼べるのは、ミスただけだったのに今世ではあたしの周りには人が集まってくる。

きつかけは、アリサちゃん達と出会ったことだろう。

あの時、あたしの目の前で攫われたアリサちゃんとすずかちゃん。

その理不尽な行為を見過ごさずに、あたしは命懸けの戦いの果てに二人を助け出し

た。

そんな命と魂が交差する激しい戦場で育まれたあたし達の友情は、私にとってかけがえのない一生の宝物だ。

すずかちゃんなんかは友情の証として、彼女の一族にまつわる秘密を教えてくださいましたの。

そんな二人に感じた運命のようなものをハーマイオニーちゃんにも感じる。

「ねえ、なのはちゃん、そんなに見つめられたら着替えにくいんだけど」

「うん、分かったよ！　着替えを手伝えばいいんだね！」

「そんなこと言ってるな…きやあ!!　そこは触っちゃダメ!!」

えへへ、これから楽しくなりそうだね！

「嘘だつ!!」

「な、なに？　急に叫んだりしてどうしたのよ、すずか？」

「ええ、何故かしら？　どうしても否定したい気持ちに襲われたのよ」

「もう、なんなのよそれは？　なのはがないのが寂しくて、いないことを否定した

い。とかかしら?」

「それはないわね。むしろこのまま英国に永住してもらいたいぐらいよ」
「……それは酷すぎない?」

初めての授業に向かう途中で、あたしはニャンコと出会った。

リニスの影響で、あたしはニャンコ派といつても過言ではないだろう。

あれ、そういえばイタチは生きてるのかな?

リニスが人型になるようになってからは、イタチのことは忘れていたよ。

籠の中でミイラになってたりして?

まあ、別にいいか。

「ニャンコ、おいで☆」

プイッ

気まぐれなニャンコらしく、あたしをチラリと見たあと顔を逸らされてしまった。

あたしはちよつぱり殺気をだして威圧してみる。

ニャンコの動きがピタリと止まる。

ギギギと音が出るような動きで、ニャンコがあたしの方に顔を向けてくれた。あたしはニツコリと笑うと再び、声をかける。

「ニャンコ、おいで☆」

「ニヤ、ニヤア」

気まぐれなニャンコらしく、掌を返したようにゴロゴロと喉を鳴らして甘えてきた。

「あはは、お前は甘えん坊だね」

あたしがニャンコを抱き上げると顔を舐めてくる。

「おや、私の猫が懐くとは珍しいな」

背後から近づいていた人間から声をかけられた。

どうやらニャンコの飼い主さんの登場のようだね。

ニャンコの名前はミセスノリス。飼い主さんはフィルチさんだ。

フィルチさんとはニャンコ好き同士として気が合った。

フィルチさんの事務室でお茶とお菓子をご馳走になりながら、あたし達はニャンコ愛を熱く語り合う。

が出来たよ！

ちなみに、あまりの痛みのせいかフィルチさんは改造中の記憶を失っていた。

改造後、基礎的な魔法なら使えるようになったフィルチさんは、あたしのことを女神のように敬うようになった。

えへへ、これでニヤンコ仲間の結束が強くなったね。

今日は魔法薬の授業がある。

前の世界では、魔法薬はあまり発達していなかったから非常に興味深い。

もしかしたら、“アレ”を生やす魔法薬も作れるかもしれないね。

え？

惚れ薬はいらないのかって？

そんなものはいらないよ！

だって、人の気持ちをも薬なんかで操ろうだなんて邪道だもん！

それにね、イヤよイヤよも好きのうちって言う言葉もあるんだよ。

あたしがアリサちゃんの身体を弄ったら凄くイヤがるから、きつとアリサちゃんは凄

くあたしことが好きなんだよ。

だからね、あたしは惚れ薬なんかに頼る必要はないの。
ん？

まだ何かあるの？

人体改造で“アレ”を作れないのかつて？

そんな無茶を言わないでよ！

改造手術は、魂が塩になりそうになるほど痛いんだよ！

あんなの受けるバカな女の子はいないわよ！

まあ、受けるとしたらバカな男の子ぐらいだよね。

そういえば、フィルチさんは男の子だね。納得だよ。

さてと、真面目に授業を受けなきゃね。

目指せつ、“アレ”を生やす薬だよ！

ハーマイオニーちゃんも一緒に研究しようね！

「ええ、いいわよ。ところで“アレ”って何のことなの？」

うん、それはね。

ゴニョゴニョ

「なっ!? そんなの研究しないわよっ!!」

真つ赤になったハーマイオニーちゃんは可愛かった。

今日はハーマイオニーちゃんと空を飛ぶ練習だ。

明日から飛行訓練が始まるけど、人間界出身の彼女は今まで飛んだことがないらしい。

そのため不安なっていた彼女のために、あたしはコーチ役を買ってでた。

「まずは手本を見せるね」

【トベルーラ】

あたしは適当にクルクルと飛び回ってみせる。

「すごい、そんなに自由に空を飛べるのね」

「ハーマイオニーちゃんなら直ぐに飛べるようになるよ」

「そ、そうかしら？　　凄く難しそうだったけど」

ハーマイオニーちゃんは不安そうだったけど、トベルーラは意外と簡単な魔法だ。

十分な魔力量さえあれば、あとは制御力と持続力があれば誰だって使いこなせる。

「じゃあ、魔力放出からいってみよう！」

「魔力放出ってなに？」

「……」

「……」

「き、基礎から始めれば、三ヶ月もあれば魔力放出が出来るようになるかも？」

「飛行訓練は明日だよ!？」

あたしは、うな垂れてしまったハーマイオニーちゃんを慰めた。

今日は飛行訓練の授業だ。

そして、あたし達の前には魔法の箒が置いてある。

えっと、この世界ではマジックアイテムを使って空を飛ぶんだね。

うんうん、あたしも勉強になったよ。

だから、ハーマイオニーちゃんもそのジト目をやめて欲しいな。

変身魔法の授業では、マッチ棒を針に変えろと言われた。

あたしにとってはモシヤスを応用すれば簡単なことだけど、この世界の魔法をマスターするために先生の説明通りの魔法を使うことにしている。

「やりました、先生出来ました！」

「素晴らしい出来ですね、グレンジャー。グリフィンドールに一点加えます」

ハーマイオニーちゃんは成功したみたいだ。彼女はとても勉強家だから魔法の上達が早いね。

ふふ、魔法の先達として、ハーマイオニーちゃんに手本を見せてあげよう。

願わくば、これが彼女にとっていい刺激になりますように。

さてと、これはイメージが大切な魔法なんだよね。

あたしは強い意志力にて、鮮明で明確なイメージを行う。

安っぽいマツチ棒が、硬質の金属となる様を。

硬質の金属が、鋭い刃を持つ刃となる様を。

小さく鋭い刃が、巨大化する様を。

鉄の剣が、火によって鍛えられる様を。

鋼鉄の剣が、魔力を帯びる様を。

魔法剣が、火の属性を帯びる様を。

炎の剣が、洗練される様を。

灼熱の魔剣が、小さな普通の針になる様を。

赤い針が完成した。

「先生、あたしも出来ました!」

「おや、赤色の針ですね。着色した技量は素晴らしいです。グリフィンドールに一点加えます」

「やったあ!」

喜ぶあたしの隣では、全てを見ていたハーマイオニーちゃんが絶句していた。

「ふふ、ハーマイオニーちゃんなら頑張れば同じことが出来るようになるはずだよ」
囁くあたしの声に、彼女は小さく身を震わせた。

ホグワーツには巨人が生息している。

噂によると巨人族の最後の生き残りらしい。

巨人族といえば、サイクロプスやギガンテスが思い出される。

ふふ、懐かしいね。

そうだ！ 貴重な最後の生き残りなら記念に剥製にしておこうかな？

こういうところが、あたしは女の子になっちゃったんだなくと自分でも思うところだね。

なんていうのかな、感傷的というか、センチメンタルというか、女の子っぽくてちよつと恥ずかしいかも？

えへへ、それじゃあ、巨人狩りに行こうつと。

あたしの前に立ち塞がるメガネと赤毛。

へえ、いい度胸をしているね。

あたしの狩りを邪魔しようだなんて。

「もういい、お前らは逃げろ！ このままじゃあ、お前らまで殺されちゃうぞー！」

「何を言ってるんだよ、僕達がハグリットを見捨てて逃げるわけないだろっ!!」

「お前、いい加減にしろよな！ どうしてこんな事をするんだよ！ 僕達は同じグ

リフィンドールじゃないか！」

「この化け物にそんな常識なんか通じんぞ！　いいから逃げる！」

「嫌だつ、ハグリットを見捨てるぐらいなら僕はこいつと戦うよ!!」

「ハリー、僕達だけじゃ無理だ！　ここは一旦逃げて助けを呼ぶべきだよ！」

「馬鹿を言うな、ロン！　こんな化け物に背中を見せれるわけないだろつ!!」

なんでだろう？

まるで、あたしが悪者のような言い草だ。

それに、こんな美少女をつかまえて化け物呼ばわりは酷いと思う。

こんなことなら、久しぶりの狩りだからといって巨人を甚振って遊んだりせずサツサと始末しておけば良かったよ。

そうすればこんな邪魔なんか入らず、気持ちよく巨人の剥製が手に入ったのに。

なんだかやる気が無くなっちゃった。

もういいや。

【メダパニーマ】(集団混乱)

赤毛が言つてたように、あたし達は同じグリフィンドールだからね。

最初の一回だけは、あたしに敵対したこととか、全部を無かつたことにしてあげる。

でも、次にあたししの邪魔をしたら消しちゃうからね。

裸踊りを始めた三人を残して、あたしはその場を後にした。

「ハリー達が、立ち入り禁止の部屋を探っているみたいなのよ」

ハーマイオニーちゃんから相談をされた。

なんでもハリー達が規則を破ろうとしているのを止めたいらしい。

「ハリーといえば、あのメガネの事だったかな？」

「あなた、まだ覚えていなかったの!？」

「男には興味ないもの」

「や、やっぱりそうだったのね」

自分の身体を隠すようにしながら後ずさるハーマイオニーちゃん。

その距離を詰めるあたし。

「どうして離れようとするの? ハーマイオニーちゃん」

「なのはちゃんこそ、どうして近付いてくるの?」

互いに互いの隙を伺い合う。

一瞬でも気を抜いた方が負けるだろう。

「安心して、ハーマイオニーちゃん」

「何を安心するのよ」

「あたし達は女の子同士だよ。どんなことが二人の間で起こったとしても、ハーマイオニーちゃんが妊娠することはないから安心していいよ」

「その言葉のどこに安心していい要素があるのよ?!」

「それで、立ち入り禁止の部屋って何のこと?」

「急に話題が戻ったわね」

ハーマイオニーちゃんは呆れた顔になるけど、やっぱり関心が強いらしく話を続けてくれた。

「ハリー達が忍び込もうと企んでいるみたいなのよ」

「別に関係ないんだから放っておけばいいと思うけど、ハーマイオニーちゃんは真面目だよね」

「あのね、ハリー達が妙なことをすれば減点されるのはグリフィンドールなのよ」

あたしは得点なんかに興味はないんだけど、ハーマイオニーちゃんの相談なら無下にはできないよね。

「うん、分かったよ。ハリー達をブチのめして諦めさせればいいんだね」

「違うわよ!!」 そんな物騒な手段じゃなくて、普通に説得を手伝って欲しいだけよ!」

「うんうん、お話をすればいいんだよね。任せておいてよ！」

胸を叩いて請け負うあたしを何故か不安そうに見つめるハーマイオニーちゃん。
どうしたんだろう？

「…もしかして、頼む相手を間違えたかしら？」

ハーリー達を昼間に説得しようとしても惚けられるから、夜中に例の部屋で待ち伏せることにした。

「待ち伏せはいいけど、見廻りのフィルチさんに見つかったら私達が叱られるわよ」

心配するハーマイオニーちゃんにあたしは安心させるように微笑む。

「ふふ、大丈夫だよ、フィルチさんには今夜のことは話を通してあるからね」

「うそ!?! あのフィルチさんをどうやって説得したの!?!」

「えへへ、ネゴシエーターなのはとは、あたしのことだよ」

戯けて言うあたしにハーマイオニーちゃんは尊敬の眼差しを向けてくれる。

「なのはちゃんが頼りになる……うう、良かったよう。なのはちゃんに相談した私の決

断は間違っていないなかったのね」

「涙目になるほどの事じゃないよね!？」

*

あたし達は例の部屋の前に来た。

「中に入ってみようか？」

「それは規則違反よ。ハリー達を止めに来た私達が『バキッ!』って、言ってるそばから扉を破らないでよ!？」

扉には鍵が掛かっていたからブチ破ってみた。

「なのはちゃんなら魔法で開かれるよね!？」

あたしが中を覗くとワンコが唸っていたから威圧して大人しくさせた。

「なんだ、ワンコのお部屋だったみたいだね」

部屋の中を見渡してもワンコ以外に目ぼしいものは無かった。

「ワンコじゃなくて、ケルベロスよ!　でも、こんな危険な魔獣を飼っていたのね。たしかに立ち入り禁止になるは『ほーら、お手をしてごらん』ケルベロスに芸を仕込まないで!？」

しばらくワンコと遊びながら待っているとハリーと赤毛がやって来た。

「あはは、そんなに顔を舐めちゃダメだよ」

「ケルベロスって、意外と可愛いかも？」

「ほら、ハーマイオニーちゃんにも挨拶をするんだよ」

「チンチンはさせなくていいわよ!!」

「やだ、ハーマイオニーちゃんつてば、どこを見てるの？」

「あんた、ぶん殴られたいのかしら？」

「…気の所為かな？　ハーマイオニーちゃんの口が徐々に悪くなってる気がするよ？」

「誰のせいだと思っているのよ!!」

「……」

「…戻ろうか、ハリー？」

不思議なことに、あかし達が説得する前にハリーと赤毛は戻っていった。

まあ、楽でいいかな。

この世界の魔法を学んでいると不思議に思うことがある。

どうして呪文を唱えるときに杖を振るのだろうか？

「杖は魔力を増幅してくれて、呪文は魔力の方向性を定めてくれるのよ。そして、杖の動きが魔力を正しく導いてくれて魔法が完成するわ」

あたしの疑問にハーマイオニーちゃんが答えてくれるけど、その答えには納得出来なかった。

「でも、あたしは呪文だけで魔法を使えるよ？」

「うん、きつとなのはちゃんの特異体質なのよ。何事にも例外はあるもの」

どこか遠くを見るような目をしながらハーマイオニーちゃんは呟く。

「うん、そうよ。なのはちゃんの理不尽な魔法も例外。なのはちゃんの規格外の魔力量も例外。なのはちゃんのヤバい性癖も例外。うんうん、なにも問題はないわね」

よく分からないけど、ハーマイオニーちゃんは何かを吹っ切ったような清々しい笑顔を見せてくれた。

凄まじくニンク臭い教師がいる。

教室中に充満する臭いは、もはや公害といっても過言ではないだろう。

その教師の言い訳として、その昔、吸血鬼に襲われたのが原因だと言っていた。

その言葉で脳裏に浮かんだのは、すずかちゃんの姿だった。

あんなナンチャツテ吸血鬼に怯えるのは、教師失格じゃないかな？

それに対吸血鬼の装備を常備しているということは、この教師はすずかちゃんの敵だよね。

すずかちゃんはアリサちゃんを巡るライバル関係でもあるけど、あたしの親友でもある。

そんなすずかちゃんの敵となりうる奴は潰しておくべきだろう。

あたしは友情のために動くことを決意した。

ふふ、大魔王だったあたしが、人との友情のために動くだなんて、今のあたしの姿を見たら勇者達は驚くだろう。

ククク、驚きすぎて腰を抜かすかもしれないね。でもきつと、驚いた後は勇者達は喜ぶのだろう。この大魔王の変化に。

たぶん、今のあたしなら魔族だけに捉われずに、全ての種族のことを考えられる真の大魔王として……ううん、もう過去のことだよね。

あの世界のことは、あの世界に生きる者達が考えればいい。

あたしはこの世界に生きる唯の人として、この手で出来ることを為すだけだ。

「うんっ、あたしは友情のために戦うよー」

きつと、この胸にある温かい気持ち、勇者達が感じていた気持ちと同じものなのだろう。

ならば、あたしもこの気持ちと共に戦おう。

かつて、強大な大魔王に立ち向かった勇者達に、このあたしが負けるわけにはいかないのだから。

それは深夜のことだった。

ニンニク臭い教師が、愚かにもたった一人で森へと立ち入ったのだ。

ガサツ

「ひいつ!? な、なんだ、ただの風ですか…」

ただの風に怯えながらも、その臭い教師は歩みを止めようとしなない。

一体何の目的でこんな森の中に？

そんな疑問がほんの僅かだけ心を過るが、あたしにとっては心底どうでもいいことだから直ぐに忘れた。

今のあたしの心にあるのは熱い友情だけだ。

もちろん、友情のためといっても正義を語るつもりはない。何故なら正義というのは立場によって変わるものだからだ。

しかし友情だけは変わらない。

友情は何よりも勝るものだろう。男女の愛情も友情には勝てない。ただし、女女の愛情は友情に匹敵するかもだけど。

例えば、こんな言葉がある。

『結婚は死が二人を分かつまでだが、親友は死んでも親友だ』
まさに至言だろう。

親友に託された想いは永遠だ。

それに対して、夫婦は離婚後、再婚できる。

勝敗は明白だろう。

さて、人気もないことだし、あたしの友情を示してあげる。

【イオナズン】

ドカーン

!!!!!!!

「ただいまっ、皆んな！」

「あんた、まだ一ヶ月しか経ってないのに、どうして帰ってきたのよ」

アリサちゃんは、親友が帰ってきた喜びを必死に隠す。そして呆れた顔を作りながら質問をしてきた。

本当はあたしに抱きつきたいほど嬉しんだよね。

うんうん、あたしは分かっているから安心してね。

「その顔はなんかムカつくわ」

「いひゃいよー、ホッペおしゆねらないれー！」

うう、アリサちゃんのツンデレが痛い。

「誰がツンデレよ!!」

「まあまあ、それで何があったの？　突然帰国するなんて？」

すずかちゃんが、怒れるアリサちゃんを宥めてくれる。

「うん、実はね。夜中にホグワーツで謎の大爆発が起こって、ホグワーツの殆どの建物が破壊されちゃったから休校になったの」

「ええっ!!　　なによそれ!!　　大惨事じゃないの!!」

「うん、そうだね。でも、人的被害は少なかったから不幸中の幸いだね」

「あれ、そうなの？　　でも、殆どの建物が破壊されたんでしょう？」

アリサちゃんとすずかちゃんが不思議そうな顔になる。

たしかに殆どの建物が粉々になるほどの大爆発が起きながら、人的被害が少ないといったら不思議に思うよね。

でも実際に亡くなったのは、たったの一人だけだよ。

その人はホグワーツの教師だったから、もしかしたらその人が何かの魔法を使って、大爆発から学院のみんなを守ったのかもしれないね。

「そうだね、もしかしたらその先生が、なのはちゃんの命の恩人なのかもね」
すずかちゃんが静かに呟いた。

うん、ニンニク臭いけど良い先生だったと思うよ。

「それで、なのはちゃんはその夜、どんな魔法を使ったの？」

「それが大変だったんだよー！　イオナズンを唱えたら、思った以上の爆発が起こるし、全校生徒と教師達にザオリクをかけるのに朝ま……ううん、何でもないよ」

思わず口を滑らせそうになったけど、ギリギリセーフだよね？

「あ、あたしは何も聞いてないから！　無関係だから巻き込まないでよね！」

「そうね。私も何も聞いていないわ。どうせ、証拠なんかないだろうから問い詰めても仕方ないもの……弱みを掴めたら良かったのに」

ふう、なんとか誤魔化せたみたいだね。

それにしても友情のためとはいえ、あの夜は酷い目にあつたよ。

まさか徹夜でザオリクを唱える羽目になるなんてね。

やっぱイオナズンじゃなくて、イオにしておくべきだったと思う。

念を入れてイオナズンを唱えたのは失敗だったね。

まさか森どころかホグワーツ全体を破壊しちゃうだなんて建物が脆すぎだよ。もしかしたら違法建築だったのかな？

ハーマイオニーちゃんもホグワーツが休校になって落ち込んでたんだよね。

今度、慰めに行かなくちゃだね。

まったく、色々大変だよ。

“だけど” と、あたし——“余”は思う。

“余”は、腹黒そうな顔をしている今世での親友に目を向ける。

被害は大きかったが、“余”は守ることができた。

“余”の大事な親友のことを。

あの時の“お前”のように戦って守り抜いた。

ナンチャットテ吸血鬼のことを。

ふふ、今の“余”^{大魔王}は、“お前”^{勇者}と並ぶことが出来ているか？

ふと、どこかで笑い声が聞こえた気がした。

懐かしく感じるその声に、“余”も知らずに笑みを浮かべていた。

〈Fin〉

大魔王と強殖装甲

ある日、お空の散歩に飽きたからトラックの上でお昼寝をしていた。

走るトラックの振動が心地よくて気が付くと真夜中になっていた。

「やっちゃったあ、お母さんに怒られちゃうよ」

どんな言い訳をしようかな？ と考えていたらトラックが山の中で止まった。

「こんな所で止まって、どうしたのかな？」

運転手が野グソを始めたら嫌だなあ。と思い、あたしがルーラで帰ろうとしたときだった。

“バタン！”

「てエメツ！ 素直に持っているモンを渡しやがれ！」

トラックのドアを荒々しく開けて出てきた運転手が、助手席の男を引き摺りだした。

おおっ、これは揉め事だね！

平和な日本だといっても、完全に犯罪がないわけじゃない。

犯罪現場に遭遇することは稀だけど、確実にこの日本でもこういうった事件は起きていく。

「その鞆の中身はどうせ麻薬かなんかだろう？　素直にこつちに渡しな」

ガラの悪そうな運転手が、助手席にいた薄汚れた男を脅しているみたいだね。

「これは、お前が思っているような物じゃない。これは…機械…のよな物だ」

「はあ!?　なにを巫山戯たこと言ってるやがる!」

ククク、最近はずつかり丸くなったあたしだけど、偶にはこんな荒事もいいよね。なんだか血が騒ぐよ。

そして、あたしが出るタイミングを計っていると、薄汚れた男がブツブツと言いながら怪物へと変貌していく。

「なあっ!!　なんだその姿はっ!!」

おおつ、ただの強盗事件かと思ったのに、これは予想外の展開だよ!

怪物は運転手を容易く屠った後、元の姿に戻ると鞆を拾おうとする。

キュピーン☆

あたしの高性能な第六感が、あの鞆にピンピンに反応しているよ。

【アクシオ】（呼び寄せ呪文）

鞆が浮き上がり、あたしの手元に飛んでくる。

「なんだ、鞆が勝手に!？」

怪しい鞆、ゲツトだよ!

えへへ、怪物が守っている鞆だなんて中身が凄く気になっちゃうよね。

怪物の実力は大了たことなさそうだからスルーしてあげる。見た目が気持ち悪いタイプの怪物だからペットにもしたくないしね。

何処にでも行っつていいよ。

「巫山戯るなっ!!　それを返せ!!」

男は再び怪物に変身すると、目の前の無垢なる少女に襲いかかる。

これは文字通りの美女と野獣だね!

野獣の腕が力任せに美女に向かって振り下ろされる。

だけど、美女の動きの方が速かった。

美女は虚空から「真・光魔の杖」を引き抜くと魔力刃を発生させて怪物の腕を斬りとばす。

「ガアッ!？」

怪物は激痛に驚き、後ろに飛び退く。

「だけど、美女もその動きについて行くよ。」

「せめてもの手向けに美女の手で地獄に送ってあげるね。」

「これで終わりだよつ、カラミティエンド！」

「うわあああああつー!!!」

ペチン

「あ、あれ？ やられてないぞ？」

「うう…痛いよー」

大魔王の強靱な身体と違い、か弱く繊細なこの身体が耐えられる程度の闘気を込めたカラミティエンドは卑劣な怪物に跳ね返された。

今の衝撃で手首を捻挫したかもしれない。

「やるわね！ だけど、肉を切らせて骨を断つことには成功したわ。あたしの方が優勢よ！」

あたしは手首を捻挫したけど、怪物は片腕を失った。ダメージは向こうの方が上だ。

前世を含めれば数千年に及ぶ戦闘経験は伊達じゃない。

たかがトラックを襲う怪物に戦闘での駆け引きで後れは取らないわ。

「いや、手首の捻挫は自爆じゃないのか？」

うっさいわね。

思ってた以上にこの身体が脆かったただけだよ。

人間やナンチャッテ吸血鬼相手だったら、闘気で強化すればこの身体でも不足はなかったけど、流石に本物の怪物相手だと荷が重いみたいだ。

思えば今世で初めての負傷だよ。

あたしはズキズキと痛む手首を押さえながら、思わぬ苦戦に苦笑する。

【ホイミ】

捻挫が治った。

「まあ、この程度なら簡単に治るんだけどね」

「なんだそりゃあ!?! 卑怯だぞ!!」

ふふん、負け犬の遠吠えだね。

ちよつとばかり身体が硬いだけの怪物なんか敵じゃない。

あたしは素手に拘らなくても、真・光魔の杖“を使えば斬り捨てられるし、魔法を使えばもつと簡単に終わる。

ただ…ちよつと悔しいだけだ。

「鞆の中身をみせてもらおうわよ」

「うう…」

怪物を横目にしながら鞆を開けると、中には円盤型の機械のような物が三つ収められ

ていた。

「……一つだけで勘弁してあげる」

あたしは一つだけ手に取ると鞆を閉じて怪物に向けて放り投げる。

「ど、どうしてだ？」

鞆を受け止めた怪物は不思議そうにあたしを見つめていた。

「ただの気紛れだよ」

そう、これはただの気紛れだ。

このあたしに初めて手傷を負わせた相手なのだから、この程度の気紛れを起こしてもいいと思う。

「これはついでだよ」

【ベホマ】

「うおお!?　これは!?」

怪物も片腕だと不便だろう。

あたしは特別にベホマを唱えてあげる。

この大魔王のベホマなのだ。失われた腕の再生どころか怪物の全てを癒すことだろう。

あれ、怪物から人間に戻っていくけど、さつきとは戻り方が違うようなの？

「こ、こんな事があるのか？　元の身体に戻っているだと？　お、俺は人間に戻れた

のか？　う、うう……うあああああ……んんん！！！！」

男はまるで子供のような大声で泣きだした。

彼の目からは滝のような涙が流れ、鼻からは無限に湧き出る泉だと言わんばかりの勢いで鼻水を放出し続けていた。

ねちより。と粘つくヨダレが、男の泣き顔を彩るアクセントになっている。

【バシルーラ】

非常に気持ち悪い男は、空の彼方に消えた。

めでたし、めでたし。

あたしの手元に残った機械を解析した結果、これは有機体による強化スーツのようなものだと判明した。

なるほど、超魔生物のように自分の身体そのものを改造するんじゃないかと、鎧のよう

に纏うことで身体能力を強化するんだね。

しかも、強化だけじゃなくて、各種武装に生命維持機能も備えている優れたものだった。だけど問題もあった。これを制御しているコントロール部分が破損すると有機体が暴走するようなのだ。

それにコントロール部分には外部とのリンク機能もあるため、下手に装着したら外部からの影響を受ける可能性が高い。

「うん、これ自体は使い物にならないね」

危険性のあるものを態々使う必要はない。

見本があるんだし、危険性を低下させたものを自分で作ればいいだけの話だ。

うん、あたしはこの有機体による強化の設計思想は有用だと思うよ。

魔法や闘気で身体機能を無理矢理に上げると、どうしても身体の負担が大きい。

あたしみたいに華奢な女の子だとその負担が特に大きいし、また強化の上限の問題もある。

有機体による身体機能と防御力の上昇のみに機能を限定すればコントロールも容易になり、あたしなら専用の制御機能は不要だろう。

よし、そうと決まれば早速作ってみようつと。

「また現れたのか！ ショッカーめ！」

十数人の怪しい男達に囲まれながらも、その少年は臆することなく対峙していた。

彼の名は、深町晶（ふかまち しょう）、ごく普通の男子高校生だった。そう、つい最近まではだ。

それはある深夜のことだった。

彼の自宅の屋根を突き破って、彼の部屋に怪しい鞆が突っ込んできた時から彼のヒーロー人生が始まった。

彼は親しくしている先輩（もちろん、むさ苦しい男の先輩だから全国の男子高校生達は安心してくれ。綺麗な女子の先輩なんかじゃないから、深町君を妬む必要なんかないぞ！）と謎の鞆を開けてみた。

何故、一人で開けなかったかというと深町君は割とビビりな所があるごく普通の男子高校生だからだ。

謎の鞆からは、円盤型の機械のような物が出てきた。

「えらくごっついフリスビーですね、先輩！」

「そうだな、恐らくはプロ用のフリスビーだと思うぞ。俺も初めて目にしたから断言は

できんがな」

深町君は、飛来してきた鞆から出てきたから、中身も空を飛ぶものだろうと推測した結果、ついフリスビーだと口走ってしまった。

そして、自分に懐いている可愛い後輩（彼の名誉のために言っておくがホモ的な意味ではないぞ）の深町君が言い切った事を否定できるほど彼は——瀬川哲郎（せがわ つろう）は空気の読めない男ではなかった。

たとえ、腹の中では『こんな重いフリスビーがあるか！』と、突っ込んでいても瀬川先輩は口には出さなかった。

「じゃあ、先輩、折角だから公園に行つてこのフリスビーで遊びましょうよ！」
明らかに金属に覆われているブツを投げ合う。

瀬川先輩は血みどろになった自分達のごく近い未来の姿を幻視したが、『これも青春の1ページだよな』などと、その恰幅のいい（決して肥満体だとは本人が認めないので、このような表現をしております）体格と同じように、デカすぎる器を見せつけるように笑顔で了承した。

「おう、いいぞ。いつもの公園でいいよな」

瀬川先輩はそう言い放つと、フリスビー（深町君談）に手を伸ばす。

“カチ”

その伸ばした手から全ては始まった。

「うわっ!!」　なんだこれは!!」

フリスビー（深町君談は誤りの可能性が高まった）に触れた手が、何かのスイッチに触れたような音を立てると、フリスビーから粘つく気持ち悪い物体Xが飛び出して瀬川先輩に襲いかかった。

「先輩っ!?!」

深町君は、物体Xに全身を覆われた瀬川先輩を見て思った。

『先輩が死んだ!　　だけど、安心して下さい!　　先輩の妹の瑞紀（みずき）ちゃんは僕が幸せにしてみせます!』

深町君は尊敬する先輩が安心して旅立てるようにと、先輩の妹にして自身の幼馴染でもある瑞紀の事を請け負うことを男らしく誓う。

〃フシユウウウウウウツツ!!!!〃

だが、深町君の誓いは無駄に終わった。

完全に粘体に覆われて沈黙していた瀬川先輩が、荒々しい呼吸音をたてながら復活したのだ。

瀬川先輩を覆っていた粘体はいつの間にか干からびていた。

それを中から破って、瀬川先輩は復活したのだ。

もちろん、深町君は反射的に叫びまくる。

「瀬川哲郎、復活!!」「瀬川哲郎、復活!!」「瀬川哲郎、復活!!」「瀬川哲郎、復活!!」「瀬川哲郎、復活!!」「瀬川哲郎、復活!!」

だが、深町君が復活した瀬川先輩の姿をハッキリと認識した瞬間、その叫びは止まった。

「先輩…そ、その姿は……?」

瀬川先輩の全身を包むのは、まるで昆虫を思わせるようなフォームをした全身スーツと仮面だった。

その姿は、正義のヒーロー仮面ライダーに似ていると、特撮好きの深町君の心を激しく揺さぶった。

「はっ!!」これは僕のものだあああっ!!!

変身した先輩の姿に激しく感銘を受けた深町君は、鞆に残っていたfrisbeeもとい、仮面ライダー変身ユニットを誰にも渡さないといわんばかりに猛スピードでユニットに飛びかかった。

「へんっしん!!」

カチツ

ちやつかりと瀬川先輩が押した部分を見ていた深町君は、自分の運命を変えるスイツ

チを喜び勇んで押ししてしまう。

こうして生まれた正義のヒーロー二人は、運命が導くように現れた謎の集団と戦う日々が始まった。

ちなみに、深町君が襲い来る組織をショツカーと呼ぶのは、初めて彼らに襲われた日の前日に、初代ライダーの動画を見ていたからという事は、口にするまでもない常識だろう。

そして、襲いかかった彼らも『いやいや、私達はショツカーという組織ではなくてです、クロノスという組織の者なんですよ』などと、馬鹿正直に名乗るわけもないために定着してしまった。

こうして生まれた二人のライダーは、正義を守るために日夜戦い続けていたのだ。

そして、今日は運悪く深町君が一人になった時にショツカーに襲われてしまった。

だが、正義のライダーが一人で戦い勝利することはお約束なのだから、深町君は一人でも臆することなくショツカーをブチのめしまくっていた。

ある程度、ショツカーの戦闘員の数が減ったことを確認した深町君は止めの必殺技を繰り出す。

深町君は、胸部装甲に手をかけると一気に開く。

内部には正義のエネルギーが充填されている。

「くらえっ、正義のおっぱいビィイイイームウウウウウウツ!!!」

男のロマン溢れる極太おっぱいビームが、一瞬の抵抗も許さずに戦闘員達を蒸発させていった。

そこはライダーキックだろ!!とか、そんなのライダーじゃねえ!!などといった苦情は深町君は受け付けない。

彼は特撮ファンではあるが、純粋なライダーファンではないからだ。

そしてなんととっても、彼は健全で健康な男子高校生なのだ。

おっぱいに興味津々なのだ。

おっぱいビームもやむ無しだろう。

「ふっ、正義は勝つー!」

決めポーズをとる彼は輝いていた。

後は、瀬川先輩の目を盗んで、幼馴染の瑞紀をヒロインに引きずり込むだけだ。

いけいけ、深町!!

ゴーゴー、深町!!

日本の正義は君にかかっているぞ!!

日本クロノス支部は恐慌状態に陥っていた。

日本支部が総力を挙げて発掘した降臨者の遺産を奪われてしまったのだ。

犯人は行方不明だが、遺産を手に入れたと思しき者達は運良く見つかった。

というか、街中を異形の姿で走り回っていた二人組を見つけられないわけがなかった。

見つけた瞬間は日本支部は歓喜に包まれたが、すぐにそれは絶望へと変貌した。

ただのバカだと思われた二人組を捕らえようとした戦闘員達が全滅したのだ。

つまり、途轍もなく強いバカ達だったのだ。

これほど手に負えない存在はないだろう。

他人を殺める苦悩を感じず、異形に対する恐怖もなく、街中でも平気で大量破壊兵器を使用するバカ二人。

今のクロノスは雌伏の時期だ。下手に目立つわけにはいかなかった。

まだ相手が一人だったなら、狙う隙もあっただろう。

だが、二人組だと隙がなかった。

戦闘員の被害が増大し、戦闘部門からの管理部門への苦情が殺到していた。

このままでは戦闘部門のストライキが発生しかねない事態にまで事態は追い詰められていた。

もう、降臨者の遺産は発掘していなかったことにすればいいんじゃないか？

そんな投げやりな意見が日本支部内での大勢を占めようとしていたとき、突然事態が動き始めた。

なんと、クロノス本部から獣神将（ゾアロード）達が揃って日本支部を訪れたのだ。

日本支部が誇る獣化兵（ゾアノイド）など比べようもない強者であり、クロノスにおける最高権力者達の来訪に日本支部はパニックになった。

そして精神的に追い詰められた一部の者達が暴走をして、バカ二人組を無断で襲った挙句にバカ二人組を連れのまま日本支部に逃げ帰ってしまったのだ。

シヨッカーの本部だと思い込んでテンションの上がったバカ二人組は、普段よりも情け容赦なく暴れまわった。

その破壊活動は、とうとうテレビ放映されるほどに目立ってしまった。

ことここに至り、獣神将達はその重い腰をあげる決断をする。

獣神将の圧倒的な戦闘力は、バカ二人組をも上回った。

数で負け、実力でも負けるバカ二人組は呆気なく追い詰められていく。

最早これまでかとバカ二人組が覚悟を決めたとき、獣神将のトップであるアルカン

フェルがその姿を現した。

降臨者の手によって産み出された唯一の獣神将であるアルカンフェルの力は凄まじかった。

なにしろ、最近引きこもって怪しい研究に没頭していた「彼女」ですら、その力に気付くほどの存在感を発していたのだ。

「なんだか面白そうな気配がするの！」

そして、大魔王彼女は動き出した。

高層ビル街から中ぐらいの力を発する存在を感じた。

宇宙人との戦争中でも、単体ではここまでのは感じたことはなかったよ。

恐らくは、宇宙人の戦艦主砲クラスの攻撃力を持っていると思う。

突然の強敵の出現にあたしは運命を感じた。

何故、今のタイミングなのだろう？

もう少し前なら、あたしは魔法でこの敵をアツサリと倒したただけだろう。

もう少し後なら、“新しい力”の実験も済み、余裕をもって戦えただろう。

だけど、現実に強敵が現れたのは今だ。

研究していた“新しい力”が完成した直後だ。

不安なら魔法で戦う？

そんな思いは自分で否定する。

そんなことはありえないことだ。

このチャンスを逃せば、これほどの強敵が現れるのは、次はいつになるか分かったも

のじゃない。

「絶対の強敵^{実験動物}を逃す手はないよね」

あたしは魔法に頼らない新しい力を手に入れた。

天の采配で手に入れた未知の細胞を元に完成させた武装——強殖装甲こそがあたしの新たな力だ。

強殖装甲は、肉体的には脆弱なあたしを、あの超魔生物をも超える存在へと、あたしの健康に害がない程度の負担だけで押し上げてくれる。

残念ながら、前世の肉体には及ばないけどそれは仕方ないと思う。そこまでを求めるのは贅沢だろう。

そして、あたしは待機状態の強殖装甲の起動スイッチを押した。起動した強殖装甲から現れた強殖細胞が、瞬く間にあたしの全身を覆い尽くし、ある形となる。

そして、 “ソレ” は急速に巨大化していき僅か数秒で完全体となった。

「アングァアアアアアアアアアッ!!!」

天を衝く凄まじい咆哮と共に現れたのは、太古の地球を支配した恐竜に似た姿だった。

あたしはこの強殖装甲の銘をこう名付けた。

大魔王の最強の鎧 “強殖装甲ゴジラ” と。

突如、現れた怪獣王ゴジラによって、高層ビル街付近の混乱は頂点を迎えた。

「アングァアアアアアアアアアッ!!!」

大気を震わす大咆哮。

高層ビル街を粉碎する強靱な体躯。

最強の怪獣王を前にしては、獣化兵ごときは木っ端に等しい。

獣神将ですら怪獣王が発する威圧感だけで格の違いを思い知らされた。

怪獣王の体長は100mを超える。

だが、大きさだけなら怪獣王に迫る巨大な獣神将が存在した。

彼は仲間達から、『いやこんな奴らは仲間じゃない!』と思う奴らに強制させられて怪獣王に立ち向かわされた。

「ゴオオオオオオオオオオオ!!!」

怪獣王の口から放たれたのは、放射熱線に似たもつとヤバそうな破壊光線だった。

怪獣王に立ち向かわされた獣神将はアツサリと塵と化した。

その身もふたもない結果に呆然とする獣神将達だったが、すぐに正気に戻り逃げ惑うも、予定調和の如く次々と怪獣王に踏み潰されていく。

何故か転移や飛行能力を封じられていた獣神将達には絶望しかなかった。

だが、そんな絶望を打ち破らんと我等がアルカンフェルが立ち上がった。

他の獣神将達とは違い、飛行能力を封じられていないアルカンフェルは怪獣王の目の高さまで飛んでいく。

そして、アルカンフェルは問うた。

お前は何者なのだと。

「ベチンツ！」

怪獣王の尻尾攻撃!!

アルカンフェルに9999のダメージ!!

アルカンフェルを倒した!!

この日、謎の犯罪組織クロノスは壊滅した。

「えへへ、思ってた以上に強殖装甲ゴジラは強いみたいだね」

アリサちゃん達と観に行った怪獣映画を参考にして作った強殖装甲ゴジラは強力だった。

防御力の点については文句なしだろう。

ただ、ゴジラだと攻撃が美味すぎて面白みに欠けるからそこは要検討かな。

質量が大きければ大きいほど防御力は上がるからとゴジラを採用したけど、その代わり動きが鈍くなってしまった。

よく考えたら前世での最終決戦時もそうだね。折角、力を解放して巨大化しても攻

撃が美味になり過ぎたからそれが敗因に繋がった気がするよ。

「うん、強殖装甲は薄皮一枚程度で良いかもだね」

あたしの計算なら、薄皮一枚の強殖装甲だけでもクロコダイン並みの防御力になるはずだ。

別に肉體戦闘専門になる気は無いから、その程度に抑えてもいいだろう。

その場合は名称も変えなきゃだね。

さてと、早速、家に帰って改良しようっと！

帰宅するためルーラを唱えようとしたあたしは、ふと気付いて別の呪文を先に口にした。

【オプス・レパロ】（建物よ、直れ）

散らかしたまま放っておくと、アリサちゃん達に怒られそうだからね。
そして、あたしは姿を消した。

「先輩、どうやらゴジラは帰ったみたいですよ」

「ああ、俺達は生き残れたみたいだな」

瓦礫の隙間に隠れていたはずの深町君と瀬川先輩の二人は、突然何事もなかったかのように修復された街並みに驚きながらも、生き残れたことを神に感謝していた。

「先輩、僕はもう正義のヒーローを卒業しようと思います」

「そうか、奇遇だな。俺もだよ」

「あはは、気が合いますね」

「ふっ、そうだな」

長い戦いの日々だった。

運命の悪戯で、正義のヒーローという重荷を背負わされた若い二人にとっては苦難の毎日だった。

共に戦い、共に笑い、共に泣いた日々を思い出して、深町君と先輩は感慨深い想いとらわれる。

「僕達は勝てたんですね、先輩」

「ああ、組織の実力者達は倒された。残っているのは雑魚だけだろう」

何度も窮地に陥った。その度に二人は勇気と知恵をもってその窮地を脱してきた。

だけど、今回ばかりはダメだと二人は感じた。敵の幹部達はそれ程までに恐ろしい相

手達だったのだ。

しかし、二人は最後まで諦めなかった。みつともないまでに足掻いた。

最後の瞬間まで諦めなかった二人の執念が、最終的に奇跡を呼び寄せたのだろう。

二人は敵の幹部達に追い詰められた。そして遂には敵組織の首魁までもが姿を現した。

深町君は、せめて先輩を犠牲にしても自分だけは助かる手段を考えた。何故なら自分が助かれば、先輩が大事に思っている彼の妹を一生をかけて守れるからだ。

そこにあるのは尊敬する先輩への敬愛と、愛する幼馴染への純粋な愛情だけだった。

一方、瀬川先輩も考えていた。

それは同級生の多賀なつき（たが なつき）のことだ。

先輩は彼女に恋をしていた。

彼が部長を務めるSF研究会の部員でもある彼女は、妹以外では初めて彼に親しく接してくれた女の子だった。

普通なら女の子に笑いかけられただけで、『こいつ、俺のこと好きなんじゃね？』などと、勘違いするお年頃の先輩が彼女のことを気にならないわけがなかった。

自分に親しく接してくれて趣味も合う。しかも結構可愛いとくれば、男子高校生の面目にかけても恋をするしかないだろう。

いや、ここで彼女に恋をしないようなら、
“瀬川先輩は深町君を狙っている説”が濃厚になること間違いはない。

そんな彼女を残して逝くことなど、先輩には出来なかった。

どうせ彼女もいない後輩を囮にしてでも自分は生き延びてやる。と、先輩は決意した。

そこにあるのは、同級生の彼女への淡く純粹な想いだけだった。

深町君と先輩は、互いに背を預けながらも相手の隙を狙っていた。

こいつを犠牲にして生き延びてやる。

二人の想いが重なった瞬間だった。

その瞬間、奇跡が起こった。

伝説の怪獣王ゴジラが日本を襲来したのだ。

特撮ファンの二人は知っていた。

ウルトラマンシリーズのやられ役の怪獣共と怪獣王ゴジラは格が違うことを。

ウルトラマンシリーズの怪獣共なら自分達でも倒せる可能性がある。だが、怪獣王ゴジラはダメなのだ。

考えてみてほしい。ゴジラが正義のヒーローに倒されるシーンが思い浮かぶだろうか？

特撮ファンの二人は即座に否定する。

“そんなことはあり得ない”

怪獣王ゴジラは、人類に対する地球からの警告なのだ。

地球は決して人間のものではない。

驕り高ぶる人間に天罰をくだすのが怪獣王ゴジラなのだ。

もちろん、ユーモア溢れるパターンのゴジラを支持する特撮ファンもいるだろう。だが、ここにいる二人は違った。

メッセージ性の強い初代ゴジラ版を支持する派だった。

「晶、隠れるぞ!!」

「はいっ、先輩!!」

だからこそ二人は即座に隠れた。

怪獣王ゴジラに勝てるわけないと認めたのだ。

そして、その判断に間違いはなかった。

敵組織の首魁及び幹部達は、自分らの力に驕ったのだろう。愚かにも怪獣王ゴジラに立ち向かい、そして当然のようにアツサリと潰された。

戦いは終わったのだ。

シヨツカーは滅んだのだ。

二人の男達は愛する女性の元へと向かう。
その傷付いた身体と心を癒すために。

ちなみに、彼らの想いが彼女達に受け入れられるかどうかは別の青春ストーリーとなるので、各自で脳内補完をしてほしい。

） F i n ）

大魔王とのび太の平凡な日常

「のび太のくせに生意気だぞー！」

今日も僕はいじめられている。

僕は頭が悪くて、運動も出来ない。要領も悪いからクラスでは最底辺の立場だった。そのせいでよくからかわれたり、いじめられたりしている。

「なんとか言えよ、のび太！」

反論すれば余計にいじめられる事を経験で学んだ僕は、ただ黙っている事しか出来なかった。

「おい、何か言えって、言ってるだろー！」

ドン

黙ったままの僕に苛立ったのだろう。スネ夫は僕を突き飛ばした。

「うわ!? あつ、ぶつかってゴメンね」

つき突き飛ばされた僕は、近くにいた女子にぶつかってしまった。

咄嗟に謝ったけど、彼女には悪い事をしてしまったなあ。

「あれ、スネ夫、顔が真っ青だよ？」

さつきまで真っ赤な顔で、僕をいじめていたスネ夫だったのに、今見ると真っ青な顔色になっていた。

「……」

スネ夫は、僕の言葉が聞こえていないみたいだ。本当にどうしてしまったのだろうか？ その時、可愛らしい声が聞こえた。

「あたしにぶつかるだなんて、いい度胸をしてるよね♪」

それはいつそ嬉しそうにさえ聞こえる響きを帯びた声だったけど、その声の持ち主に気付いた僕は、目の前のスネ夫以上に真っ青になる。

僕がぶつかったのは「最凶の彼女」だったんだ。

「ぼ、僕は関係ないから!!」

スネ夫は今まで見たこともないような素早さで教室を飛び出していった。

僕もスネ夫の後に続いて逃げ出そうとした。

「ガシッ!!」

だけど、それよりも遥かに早く僕の肩は、「最凶の彼女」に掴まれていた。

「当て逃げはいけないと思うよ?」

恐る恐る振り返った僕に、可愛らしく首を傾げながら「最凶の彼女」は言った。

たぶん今日が、僕の命日になるのだろう。

「えへへ、このケーキは美味しいよね」

彼女は僕の土下座とケーキセットだけで許してくれた。

僕の知っている彼女なら絶対にあり得ないことだ。

そういえば、彼女はこの間まで海外留学をしていたから、なにか心境の変化があったのだろうか？

ニコニコと微笑みながらケーキをパクつく姿は、普通の可愛い女子にしか見えないけど、彼女はその笑顔のままスポーツ自慢の男子達と乱闘をして、無傷で勝利を収めるような猛者だ。

その気性の荒さは学校でも随一で、あのガキ大将のジャイアンですら逆らおうとしない相手なんだ。

最近でこそ同じ女子の友達が出来たみたいで、ほん少し危険度が下がったみたいだけど、学校一の危険人物であることに違いはない……と、思うんだけどなあ。

以前に間近で見たときは肌がピリピリとして震えも止まらなかったのに、今の彼女の側においても何も感じない。

「ん？ どうしたの、あたしの顔をジツと見つめたりして。惚れちゃったの？」

「ち、違うよっ!!? そんな恐ろしいことしないよ!!」

しまった!?

こんな返事をしたら絶対に怒り出すよ!!

「あはは、もう冗談なんだからそんな慌てないでよね」

僕の予想に反して、彼女は朗らかに笑うだけだった。

これは明らかにおかしい。

いくら心境の変化だといっても限度がある。

飢えた闘犬とすら称された「最凶の彼女」が、こんな普通の反応を返すわけが物理的

にあり得るわけがないぞ。

何かがあるはずだ。

僕はこの異常事態を解決するための推理を試みる。

そうか!

分かったぞ!!

「君は高町さんの偽物だね! たぶん留学中に彼女と入れ替わったんだ! いや、

警戒しないで欲しい。僕は君を歓迎するよ。あの「生きた災害」と恐れられた高町さ

んなんかより、穏やかな君の方が何億倍も好ましいからね。これからよろしく」

次の瞬間、僕の脳天に彼女の踵がめり込んでいた。

気がつくど部屋で寝ていた。

「あれ、全部夢だったのかな？」

「うん、うなされていたから悪夢だったんだね」

寝ていた僕の近くで、高町さんがどら焼きを食べていた。

お皿が二つあるけど、両方とも既に空になっている。

「どうやら僕の今日のおやつは無しらしい。」

僕の視線に気付いたのか、高町さんが食べかけのどら焼きを差し出してきた。

「美少女の食べかけだから10万円と言いたい所だけど、同じクラスのよしみで一万円でいいよ」

「いらんよ!?! それにそれは僕のおやつだよね!」

「いらんならあたしが食べるね」

高町さんは何事もなかったようにどら焼きを食べ出した。

「……どうして僕は部屋で寝ていたの？」

きつと僕の予想通りだろうけど。

僕の予想だと、高町さんの怒りに触れた僕は殴られて気絶でもしたのだろう。

気絶した僕を家まで運んでくれた高町さんには感謝すべきかもしれないけど、気絶させた犯人も高町さんだと思うと素直に感謝出来ないかな。

「うん、あんたにカカト落としを決めた後も蹴りまくっていたら警察が来ちゃったんだ。とりあえず、その場の全員の記憶を奪って逃走しようとしたんだけど、あんたを残しておいて厄介なことになっても面倒くさいから、家まで引き摺って来たんだよ。家まで運んであげたんだから感謝していいよ」

予想以上の酷い現実だった。

……どうりで、全身が痛いはずだよ。

でも、記憶を奪うって、どうやるんだらう？ まさか、記憶を無くすほど殴りまくっ

たんじゃ……深く考えるのは止めよう。

まあ、僕にとっては高町さんに殴られるのもジャイアンに殴られるのもどうせ変わら
ない。

いや、今の高町さんは近付いても怖くない分、ジャイアンよりマシかな。それにジャイアンだったら間違っても家に運んでくれたりしないからね。

高町さんはどら焼きを食べ終わると、勝手に本棚から漫画を取り出して読み出した。別にいいんだけど、高町さんは帰らないのかな？

高町さんと夕御飯を食べている。

何でも、高町さんの両親は町内会の寄り合いで遅くなるらしい。

兄はデートに出かけ、姉と妹はそのデートの尾行をしに行つたそうだ。お手伝いさんもいるらしいけど、その人は友人の家にお呼ばれしていて今日は高町さん一人だそう
だ。

一部に不穏な単語があつたけど、そこはスルーするのが処世術というのだろう。

現に僕の両親は何も言わない。

僕の両親は、僕が初めて友達を連れてきた思つて、高町さんを歓迎している。

いやいや、母さんは気絶をした僕を引き摺つてきた高町さんの姿を見るはずだよね
!?

「女の子なら引き摺るしか出来ないわよ。むしろ引き摺つてでも家まで運んでくれたのだから、のび太はちゃんと感謝しなさい」

「えへへ、あたしは当たり前前的事をしたただけだよ」

ウググ、僕をボコボコしたのは高町さんなのに、まるで高町さんが良い子のように扱われているなんて悔しいぞ……怖くて反論は出来ないけど。

「なのはちゃんは勉強も出来るのよね」

「大した事ないよ。日本に飛び級制度があれば、今頃は大学に入っている程度だもん」

「スポーツも得意なのよね」

「あはは、サッカー部のレギュラーを負かせる程度だよ」

「なのはちゃんは可愛いし、学校でもモテそうよね」

「うーん、それはどうだろう。男子達には遠巻きにされることが多いからよく分からな
いかな」

母さんと高町さんの会話だけを聞いていると、高町さんは凄い女子のように思える
な。

いや、確かに高町さんは凄い女子ではあるけど、「凄い」の言葉のニュアンスがきつ
と母さんと僕とでは絶対に違うと断言できるよ。

「なのはちゃんは本当に凄いのね。そうだわ、出来ればいいのだけど、のび太を鍛えて
あげてくれないかしら？ この子ってば、ちつともやる気になつてくれないけど、な
のはちゃんみたいな可愛い女の子に鍛えてもらえるなら頑張ると思うのよね」

やめて!?

母さんは僕を殺したいの!

高町さんに鍛えられるなんて、死ねって言ってるようもんだよね!!

…なんて、怖くて口には出せないけど。

まあ、高町さんがそんな面倒なことを引き受ける訳ないよね。

「うーん、あたしは色々忙しいからちよつと無理かな」

うんうん、そうだよ。高町さんにそんな暇はないよ。

「一番、三日で普通の子コース、二番、三日で優等生コース、三番、三日で末は博士か大臣かコース。この三つのコースから選んでくれるなら、明日から三連休だから付き合っ
てあげてもいいよ」

「ぜひっ、三番コースをお願いします!」

最悪だ!!

どうして、あの高町さんがこんな時だけ譲歩するんだよ!!

どう考えても、碌に喋った事もない人間を鍛えようとするような親切な人じゃないよ
ね!!

「あんたは運がいいよね。今回の連休は、アリサちゃんとすずかちゃんが用事があつて遊べなかったから暇だったんだ。こんなチャンスは二度とないよ」

「ただの暇つぶしかよー！」

「あれ、誰に向かって口を聞いているのかな？」

しまった!?! 口に出してた!

笑顔の高町さんからピリピリとしたものを感じるぞ。

うう、どうしよう? 土下座で許してくれるかな?

ふと、高町さんの視線が僕のお皿に向いていることに気付いた。

今日のおかずは僕の大好きなエビフライだけど、命には変えられないよね。

おずおずと高町さんお皿に、僕のエビフライを置いたらピリピリが収まった。

ああ、今日の夕御飯はおかず抜きか…

一日目

「まずは基礎知識が大事だよね」

最初は漢字の書き取りをした後、そのテストをした。

なんだか普通だなあ。と思いつながらやっていたけど、いつまで経っても終わらない。

もうお昼かな? と思つて時計を見ても一分しか過ぎてなかった。

えっ!? 一分だって!?

壁の時計を二度見しても間違っていないなかった。念のため、置き時計を確認しても一分しか経っていない。

「時間が過ぎるのが遅く感じるのは、あんたが勉強を嫌がっているからだよ」
確かに嫌なときは時間が経つのが遅く感じるけど…

「もう、面倒だからグダグダ言うな!」

「ゲボツ!」

肝臓に抉り込むような手刀を喰らった。

よ、余計なことを考えずに勉強しよう。

漢字が終わった後も全ての教科を基礎からさせられた。

空腹になると緑色でドロドロの謎の液体を飲まされた。

クソまずいけど、これを飲むと空腹は無くなるし、頭の中もスッキリする気がした。

そして延々と勉強と謎の液体を飲むだけの時間が過ぎていく。

僅かでも僕の集中が無くなれば、容赦無く高町さんの手刀が襲ってくるから手を抜かなかった。

意外と丁寧で分かりやすく勉強を教えてくれる高町さんだけど、途中から無機質な感じになった気がする。そして、もう一人の高町さんが後ろで寝転がって漫画を読んでい

る。

うん、幻覚が見える。

ズボツ

「ゲフウ!？」

すいません。勉強に集中します。

そんな地獄のような一年が過ぎた。と、思えるような一日が終わった。

二日目

「勉強だけじゃなくて、運動も必要だよね」

狭い部屋の中を走らされた。

それも全力でだ。

なのに壁にはぶつからない。

どこまでも走り続けられる。

大丈夫だ。

幻覚にはもう慣れた。

すぐに腹は痛くなったし、息も上がる。ただ、僕の足は止まらない。

すぐ後ろを走る高町さんが恐ろしいからだ。

殴られるから恐ろしいわけじゃない。何故か分からないけど恐ろしいんだ。

まるで、昔の高町さんのようだ。

いや、昔の高町さん以上だ。

僕の肌は泡立ち、鼓動は早鐘のように鳴っている。魂が悲鳴を上げているのが分かった。

ただただ、高町さんが恐ろしい。

僕は走った。走った。走った。倒れた。

起き上がって走った。走った。気絶した。

気付くとまた走った。走った。走った。心臓が止まった気がした。

気のせいだった。

僕は走った。走った。走った。発狂した気がした。

もちろん、気のせいだった。

僕は走った。走った。走った。

やっと、休憩になった。

時計を見た。

まだ、一分しか経っていないかった。

三日目

高町さんが飽きて帰っちゃった。

「いい加減すぎる!?! でも、助かったー!」

二日目は本当に地獄だったからね。

運動と勉強を交互に行ったんだ。

僕の間覚だと3年ぐらいに感じた濃密な一日だったよ。

さてと、今日は少し勉強してから散歩でもしようかな。

あれ、どうして僕は自然と勉強しているのかな？

*

空き地に行くとスネ夫が飛行機のラジコンで遊んでいた。

「いいな、いいな、僕にも貸してよ！」

「バーカ、のび太なんかに貸すわけないだろう」

僕はスネ夫に頼んだけど、あっさりと断られてしまった。

うう、悔しいな。

でも、仕方ないよね。

トボトボと家に向かってしていると、高町さんに出会った。

「げっ!？」

「ふーん、あんたは家庭教師までしてあげたあたしに会って『げっ』なんて言うんだね」

思わず声を上げてしまった僕に高町さんはニツコリと微笑む。

ヅクリ

その笑顔に死神の姿を幻視した僕が取るべき行動は一つだけだった。

「尊敬する高町さんにケーキセツトを献上させて下さい!!」

「あはは、そこまで言うなら仕方ないなあ、付き合っただけよ」

僕は命拾いをした。

*

「ふーん、男子はラジコンが好きなんだね」

僕はさっきの出来事をなんとなく高町さんに話した。

高町さんは美味しそうにケーキを食べている。ちなみに僕は水だけだ。僕のお小遣いが高町さんのお腹の中に消えていく。

僕がそんな事を考えていたら高町さんが突然口を開いた。

「そんなにラジコンがしたいなら、あたしがスネ夫をシメてあんたに貸すように言ってあげようか？」

はあっ!?

高町さんは何を言っているんだ!

確かに高町さんならスネ夫に言う事を聞かせるのなんて、息をするよりも簡単だろうけど暴力はダメだよ。

「へえ、いつも暴力を振るわれてるあんたがそんなこと言うんだ」

「…高町さんは知っていたんだね。僕がイジメられてるって」

「クラスの全員が知っているよ」

「そっか、そうだよね」

僕がイジメられているのを皆んなが知っていたんだ。

でも、誰も助けてくれない。

「戦おうともしない奴を助けるお人好しなんかいないよ」

僕が落ち込んでいると高町さんが突然そんな事を言った。

「皆んな、自分の事で精一杯なんだよ。誰かのために行動を起こすのは凄く勇気がいる事なんだよ」

確かにその通りだ。僕を助けようとするれば、逆に自分がイジメられる危険だってある。

「本当に助けて欲しいなら、自分でも勇気を示さなきゃね。誰だって、本当は何が正しいかを知っているんだよ。だけど、そのために行動する勇気が足りない。それなら当事者が頑張って勇気を奮い起さなきゃね」

高町さんがケーキをパクパクと食べながらそんな事を言ってくれる。

「でも、高町さんはさっき僕を助けようとしてくれたよね。僕は勇気を示していないよ」

「あなたの指導が一日残っていたからね。その分だから気にしなくていいよ」

「そっか、そういうえば二日間の指導のお礼を言っただけだね。ありがとう、高町さん。お陰で勉強と運動が少しは出来るようになったよ」

「少しはって、あなたはまだ気付いてないみたいだね」

えっ、何のこと？　そう言おうとした僕を遮るように高町さんは言った。

「ケーキ、美味しかったよ」

そうやって、一度も振り返らずに高町さんは行ってしまった。

「この問題が分かる者はいるか？」

先生の言葉に誰も手を挙げようとしな。

どうしてだろう、随分と簡単な問題だと思っけど？

うーん、そっか。

簡単すぎて、逆に誰も答える気が起きないんだな。

それなら、偶には僕が答えてもいいよね。

「はいー」

「なに、野比がこの問題が分かるのか？」

どうして、そんなに不思議そうな顔をするんだろう？

いくら僕でもここまで簡単な問題なら解けるぞ。

「はい、答えは……」

僕が答えると先生は驚いた表情のまま『正解だ』と口にした。

同級生達も驚いているのが雰囲気伝わってきた。

…僕はどれほど頭が悪いと思われているのだろうか？
流石に少し悲しくなってしまった。

「のび太をチームに入れたら負けるからダメだ。さっさとどっかに行け、行かなきゃぶ
ん殴るぞ」

野球の試合に出させてほしいとキャプテンのジャイアンに頼むと素っ気なく断られ
た。

うう、悔しいけど、確かに僕は運動音痴だからなあ。

僕は諦めてトボトボと家に向かってしていると、高町さんに出会った。

「うげっ!?!」

「なるほど、あんたは家庭教師までしてあげたあたしに会って『うげっ』なんて言うんだ
ね」

しまった!?! また、口が滑ってしまった。

高町さんがブンブンと腕を振りながらニヤリと邪悪に笑って、僕を見ている。

ま、不味い、殺される。

「世界一可愛くて素敵な高町さんにケーキセットを奢らせて下さいー!」

「にやはは、世界一は言い過ぎだよ。うーん、そうだね、世界で二番目か三番目ぐらいだ
と思うよ」

僕は生き延びれた。

*

「男の子は野球が好きなんだね」

なんとなく、さっきの出来事を高町さんに話してしまった。

「じゃあ、あたしがジャイアンをブチのめして、あんたにキャプテンの座を譲りわたすよ
うに言っただけよ?」

はあっ!?

何を言っているんだよ!?

確かに高町さんならジャイアンを言いなりにさせるのなんて、ケーキを食べるより簡
単だろうけど暴力はダメだよ。

ジャイアンは僕にとっては嫌な奴だけど、野球に関しては真剣に取り組んでいるんだ
よ。そんなジャイアンをキャプテンの座から暴力で引き摺りおろすなんて出来ないよ。

「ふーん、いつも暴力で言うことを聞かされてるあんたがそんなこと言うんだね」

「自分が暴力を振るわれてるからこそ、その理不尽さが許せないんだよ」

「そっか。でもあんたが暴力を許せなくても、結局はあんたは暴力で言うことを聞かされるだけだよ」

「…それならどうすればいいんだよ」

「人間には言葉という武器があるんだよ。世の中には暴力でしか解決しないこともあるけど、同級生同士の問題なら大抵は言葉で解決するよ」

高町さんは口ゲンカをしろって言っているのかな？

確かに口ゲンカなら怪我はしないかもしれないけど、言葉の暴力は心を傷付けるんだよ。

「このバカチンめー!!」

「ゲボオオオオオツ!!」

高町さんの突き上げるようなフックが僕の身体を浮かせる。

「誰が口ゲンカをしろって言ったのよ! 言葉は武器ってのは比喻に決まってるでしょう! あんたにはちゃんと国語の勉強の時に教えたでしょうが!」

「は、はい……すいませんでした。高町せん…せ」

内臓が破裂したような痛みで、僕の意識は闇に沈んでいった。

*

「居眠りすんな！」

高町さんの声で目が覚めた。どうやら居眠りをしてしまったようだ。

「だからね、あんたはちゃんと言葉で話し合う必要があるんだよ。萎縮して何も言わないあんたがムカつくから、ジヤイアンもつい暴力を振るっちゃうこともあると思うの。もちろん、話し合うだけで全てが解決するわけないけど、あんたが暴力が嫌なら言葉で戦うしかないんだよ」

言葉で戦う。か…

今まで全てのことをその「暴威」でねじ伏せてきた高町さんのその言葉は、説得力が有るような無いような…ちよつと微妙だな。

「なんか文句があるのかな？」

不味い!?

高町さんが不機嫌になってきた。

「ううん！　高町さんの言う通りだと思うよ！

僕は言葉が足りなかった！　こ

れからは勇気をだしてちゃんと言葉で戦うよ！」

僕の必死の剣幕に納得してくれたみたいだ。高町さんはウンウンと頷いたら素直に帰ってくれた。

まあ、ちょうどケーキセットを食べ終えたことも関係するんだろうけど。

「しずかちゃん、一緒に宿題をやらない？」

「ええ、いいわよ。のび太さん」

勇気を出して、しずかちゃんを誘ったらオツケーしてくれた。

しずかちゃんは優しく可愛くクラスのアイドルだ。

可愛いだけなら他にも何人かいるけど、性格に非常に難のある子達だから、僕にとってはしずかちゃんが一番だ。

「やあ、しずかちゃん。僕と図書館に行つて勉強をしないかい？」

僕達が話し合っていると、出木杉の奴が割り込んできた。

「あの、ごめんなさい。今日はのび太さんと宿題をする約束なの」

しずかちゃんは先約の僕との約束を優先してくれた。やっぱり優しいなあ。

「おや、のび太くんとかい？　それは宿題をするんじゃないかと、宿題を見せてくれとい

う事じゃないのかい？ のび太くん、宿題は自分でやりたまえ。では、しずかちゃん
は僕と一緒に図書館に行くって事でいいよね」

出木杉は勝手に話を纏めると、しずかちゃんを連れて行くこうとする。

出木杉は僕のことを見下すような目で——いや、見下した目で見た後、フツと鼻で笑
いやがった。

そして、そのまましずかちゃんを連れて行ってしまった。

うぐぐ、悔しい。

確かに前の僕ならしずかちゃんに宿題を見せてもらおうと考えただろう。

でも、高町さんの悪夢の指導を受けた今の僕は、ちゃんと自分で宿題をするし、予習
と復習に自主学習だっしてしてるんだ。

絶対に出木杉にだって負けな——いや、これは言い過ぎだな。

えっと、絶対に宿題を見せてくれだなんて言うもんか！

僕は高町さんとの会話を思い出す。

しずかちゃんは困った顔をしていた。だけど、僕が何も言えないから黙ってたんだ。

僕は勇気を出さなきゃいけないかったんだ。

出木杉の言葉にちゃんと反論すべきだったんだ。

過去はどうあれ、今の僕は違うと言うことを言葉にして伝えなければ分かってもらえ

るわけがない。

次こそは僕は勇気をだして言葉で戦うぞ！

僕はそう心に誓って帰宅した。

「あんたはアンポンタンなの！」

いつものように僕は高町さんにケーキセットを奢る羽目になっていた。

いや、奢ることはいいんだ。高町さんには世話になってるからね。

ただ、出木杉との一件を報告したら叱られたのには納得がいかないよ。

「僕は次はちゃんと戦うって決めたんだよ！ たとえ、高町さん相手でも僕の気持ちは曲げないぞ！」

高町さん相手でも一歩も引かずに僕は言葉で戦うぞ！

あれ、どうしたの　高町さん？

高町さんはフォークをテーブルに置くと、空っぽになった手を僕に見せてくれた。

指を開いた手は、小さくて白くて可愛い手だった。それに柔らかそうで優しい手だと

思った。

小さな手の指が、ゆっくりと閉じていった。
可愛い小さな握り拳が出来上がっていく。

「ギチリ」

金属が歪んだような音が聞こえた気がした。

あれ、あんなに可愛かった握り拳が、何故か金属の塊のように見える。
いつもの幻覚かな？

高町さんはその金属の塊を振りかぶる。

危ないよ、そんな金属の塊を振りかぶったりしたらダメだよ。

「戦うのにも『機』というものがあるんだよ。戦うべき時に戦えなかったあんたは負け犬だよ。そして、戦うべき相手を見誤れば死ぬだけなの」

僕の顔面に金属の塊がめり込んだ感触と共に、僕の意識は永久に閉ざされた。

*

という夢をみていた気がする。

居眠りをしてた僕は高町さんに蹴り起こされた。

「あんたは考えすぎだよ。心に芯を持たせれば、後はその心が命じるままに動けばいいんだよ。たとえば、それで失敗しても自分の信念を貫き通した結果なら笑って死ねるよ」

いや、失敗したからといって死にたくないよ。

なんだか、高町さんの見ている世界と僕の世界は別次元のような気がするなあ。もちろん、僕の気のせいだろうけど。

でも、高町さんの言うことは理解できる。

人生における選択はやり直しは出来ない。そういうことを言いたいのだろう。

今日の出来事は確かに小さな事だ。でも、その小さな選択の積み重ねが人生なんだ。

次は頑張ればいい。そんな思いであれば結局は今までと変わらないだろう。

「ありがとう、高町さん。目が覚めたよ。僕はもう迷ったりしないよ」

「うんうん、出来の悪い教え子を持つと苦労するよ。じゃあ、あんたの目が覚めたお祝いに出木杉の奴はあたしが始末してあげようか？」

「それはダメだよ!？」

やっぱり、高町さんの見ている世界は僕と違うのかな？

「のび太のくせに生意気だぞ！」

スネ夫がまた言い掛かりをつけてきた。

「さっきのはスネ夫が悪いんだろ！」

もちろん、スネ夫の方が悪いのだから僕は抗議する。

「そうよ、さっきのはスネ夫さんが悪いわよ」

クラスメイトのしずかちゃんも援護してくれる。

「う、うるさあい！　僕は悪くないぞ！」

だけど、スネ夫は意地になって自分の非を認めようとしなない。

ここはスネ夫を追い詰めるべきか？

いや、それは違う。

スネ夫は嫌な奴だけど、なんだかんだいって、こんな僕にも話しかけてくれる奴なんだ。

僕はスネ夫とちゃんとした友達になりたいんだ。

僕がスネ夫に歩み寄るべきなんだ。

「まったく、スネ夫は素直じゃないなあ。でも、僕も少し言い過ぎたと思うからゴメンな」

「ふ、ふん、その通りだぞ。ま、まあ、僕にも少しは責任がある。わ、悪かったな」

「うふふ、これで仲直りよね。みんなで遊びましょう」

「うん、そうだね。ほら、スネ夫も一緒に遊ぼうよ」

「……言っておくけど、しずかちゃんの誘いだから行くんだぞ。のび太だけなら行かない」

いんだからな」

「あはは、分かっているよ。でも、今は一緒に遊んでくれるんだろ？　ならそれでいいよ。ほら、早く行こうよ！」

「……ふん。のび太のくせに仕切るなんて生意気だぞ。のび太こそ僕について来い！」

僕達は競うようにグラウンドに駆けていく。

途中で、高町さんとすれ違う。

すれ違った瞬間、彼女が笑ってくれた気がした。

「少しは成長したみたいだね」

そんな声が聞こえた気がした。

振り向くと、彼女はいなかった。

どうやら、また幻覚だったようだ。

あはは、こんな幻覚なら大歓迎だな。

スネ夫の僕を呼ぶ声が聞こえた。

僕は慌ててスネ夫達の後を追いかけた。

）
F
i
n
）

大魔王とデモンベイン

商店街の福引で海外旅行が当たった。

家族旅行だね！　　と思ったけど、商店街の予算の関係でお一人様だけだった。

海外旅行を当てたのはあたしだけど、子供一人での海外旅行だなんて許してもらえないよね。

残念だけど諦めるしかないと思う。

でも、一応はお願いをしてみようかな？

望み薄だけど、当たって碎けるだよね！

あつさりと許可がでた。

うーん、どうしてなのかな？

お母さんはニッコリと微笑みながら許可をだしてくれた。（ちなみにお父さんには発言権はないんだよ）

お母さんの前では普通の女の子として振舞っていると思うんだけど？

まあ、別にいいか！

何気に飛行機で旅行に行くのは初めてだから楽しみだよ。

いつもはトベルーラで自分で飛んでいくか、ルーラで目的地に直行するからね。そういえば、機内食ってどんなだろう？

きつと美味しんだろうね！

皆んなにもお土産を買ってくるから楽しみにしててね！

機内食は可もなく不可なくって感じだった。

目的地に到着してホテルに向かったけど、なんだかボロい。

なんだかテンションが下がってきた。

はあ：商店街の福引きならこの程度でも仕方ないか。

とりあえず荷物を置いて近くを散策してみよう。

古くさい町並みを見物しながら散歩をしていると、これまた古い教会を見つけた。日本ではあまり教会がないから少し珍しいかな。

うん、折角だから見物してみよう。ちよつと妖しい気配も漂ってくるしね。

「邪魔しませぬ」

中に入ると子供達が遊んでいた。

その中の一人が妖しい気配を発している。

翡翠の色の瞳に腰まで伸びた銀髪、そして陶磁器のような白い肌。

まるで人形みたいに綺麗な子だ。雰囲気としてはニャンコタイプだね。

よしよし、近所のニャンコ達を軒並み手懐けたあたしの手腕の見せ所だよ。

「よしよし、よし。怖くないよー。こっちにおいでー」

優しく声をかけながら、チツチと指を揺らして興味を覚えさせるのがポイントだね。

「お主、我を猫と勘違いしとらんか？」

呆れを含んだ少女の声。

だけどその声は、透き通った水晶を思わせるような美しい響きを持っていた。

そして、強い意志を感じさせるその眼差し。

これは掘り出し物だね。

絶対に確保しよう。

あたしはこの場で愛でるだけでなく、ペットにすることを決めた。

「なにやら嫌な予感がするのだが？」

後ずさる少女。

どうやら勘もいいみたいだね。

ますます欲しくなっちゃうよ。

「ねえ、あたしのペットにならない？」

「ペット!? 予感以上にヤバイ奴だった!?!」

少女はパタパタと走って行って、奥にいた若い男の後ろに隠れてしまった。

「おいおい、どうしたんだよ アル。お前が逃げ出すなんて珍しいな」

「油断するでない、九郎! 此奴は見かけ通りの娘ではないぞ! 上手く気配は消

しておるが、上級悪魔以上の存在やもしれん!」

アルと呼ばれた少女は必死の形相で、若い男に警戒を促す。

「アルちゃんって言うんだ。あたしはなのはだよ。よろしくね」

あたしはニツコリと満面の笑みを浮かべて挨拶をする。

「おう、よろしくな。俺は大十字 九郎って言うんだ。アルの保護者のようなもんだ」

「おい、九郎! なにをフレンドリーに接しておる。もっと警戒をせぬか!」

「あのな、アル。彼女はどうみても友好的じゃないか。態々敵対するような言動をするなよ」

「何を言うておるか！ 彼奴の我を見る目をしかと見よ！ どうみても情欲に濡れておるわ！」

「お前っ!?! こんな子供に對してなんてこと言うんだよ！」

むむ、なにやら仲が良さそうな二人だよ。

これは引き離すのは無理かなあ？

「アルちゃん、そんなに警戒しないで欲しいな。あたしは友達になりたいだけだよ」

あたしの言葉に九郎は、〃ほらみる〃ってアルちゃんに言っている。

肝心のアルちゃんは疑いの目のままだよ。

うーん、どうやって警戒心を解こうかな？

「まあまあ、アルちゃんもそんなにピリピリしないで仲良くしましょう」

近くにいたシスターさんが初めて口を開いた。

へえ、アルちゃんに目を奪われていて気付かなかったけど、このシスターさんも綺麗な人だね。

金髪でおっぱいの大きい女性だ。

「えっと、シスターさんのお名前を聞いてもいいですか？」

「うふふ、私はライカよ。ライカ・クルセイドって言うのよ。よろしくね、なのはちゃん」
「うん、よろしくお願ひします。ライカさん！」

あたしは子供らしく元気一杯に挨拶をする。

「あらあら、元気でいい子みたいじゃない。アルちゃんも恥ずかしがらずに仲良くしまし
しょうね」

「我は恥ずかしがっておるわけではないわ！　貞操の危機を感じておるのだ！」

「お前はさつきから何を言ってるんだよ。なのはちゃんは女の子だろうが」

「九郎こそ冷静に考えぬか。この世に女ほど怖いものはなからう？」

アルちゃんの言葉に九郎は、チラつとライカさんに視線を向けてからアルちゃんに向
き直る。

「すまん。アルの言う通りだ。俺が間違っていた」

「どおいう意味かなあ!?　九郎ちゃあん!!」

九郎の正直すぎる言葉にライカさんが気色ばむ。

あはは、男の子ってバカだよね。

そんな事を考えている時だった。

教会の扉が大きく開け放たれた。

夕日が差し込む扉から現れた少年。

黄昏に照らされて、その少年は立っていた。

黄金比を体現したかのような身体をもつ、人外じみた美しい少年。

穏やかな笑みを浮かべながらも、どこか狂気を孕んだような微笑みを浮かべて、ゆっくりと此方に向かって歩いてくる。

黄金の髪と黄金の瞳をもつ少年は、九郎に向かっていた。

九郎の知り合いかな？

黄金の少年から感じる魔力は、九郎とは比較にならないほどに大きかった。

九郎の師匠なのかな？

そう思い、あたしは挨拶をする。

「初めまして、アルちゃんの友達で、なのはと言います」

愛想よく挨拶するあたしに黄金の少年は目を向けようともしない。

失礼な奴だね！

「なのはっ！ 其奴から離れろ！」

アルの悲鳴じみた叫びが聞こえた。

「邪魔だ」

黄金の少年が眩くと同時に、魔力が炸裂した。

。パチン

ちよっぴり身体が震えた。

これは…あたしに對する挑戦だと思つていいよね。

【バシルーラ】

「なに!？」

ヒューーーーン!

黄金の少年は吹つ飛んでいった。

にやはは、九郎に免じてこの程度で許してあげるね。

「マ、マスターテリオンを吹き飛ばすだど? それに今の魔力は……お主は何者だ?」

振り向くと、アルちゃんが厳しい目であたしを見つめていた。

秘密結社ブラックロッジ——それは世界征服を企む悪の秘密結社らしい。

そのブラックロッジの大導師（グランドマスター）が、さっきのマスターテリオンと
いうわけだ。

九郎の師匠じゃなかったんだ。それなら潰せばよかったね。

「そのマスターテリオンを、ああも容易く吹き飛ばすとは……なのはも魔術師なのだ、それも相当な実力を持つている魔術師だ」

「そうだね、でも他の人には内緒だよ」

「分かっておるわ。我が吹聴するわけ無かろう」

アルちゃんは真面目な顔で請け負ってくれた。まあ、お互い様だから当然だね。

それにしても世界征服を企む秘密結社かあ。そんな愉快な組織がホントに実在するんだね。

……今、ブーメランだと思った奴はぶつ飛ばすよ。大魔王あたしときは正々堂々と戦ったもん。コソコソとしてる奴らと一緒にしないでね。

「なのは、言っておくが先ほどの件でマスターテリオンを侮ってはならんぞ。彼奴の真の恐ろしきは鬼械神（デウス・マキナ）にある」

アルちゃんは続ける。

ブラックロッジで真に警戒すべきは、鬼械神（デウス・マキナ）を使役するマスターテリオンと幹部であるアンチクロス達であると。

「鬼械神（デウス・マキナ）って、なにかない？」

あたしの言葉にアルちゃんはニヤリと邪悪に嗤う。

「よかろう、見せてやるぞ。ついて来るが良い」

「おいおい!! 何を勝手に言っているんだ。姫さんがそんな事を許してくれるわけないだろう」

姫さんとな？

興味をそそられる単語だよね!

「ふむ、では妾が教えてしんぜよう」

「アルツ!」

騒ぐ九郎は邪魔だからとりあえず気絶させておこう。

えい。

「はう!?!」

《バタン》

九郎はぶっ倒れた。

「な、汝は妾より容赦がないな」

アルちゃん頬が少し引き攣っていた。

えへへ、これでゆっくりとお話が聞けるね。

霸道 瑠璃（はどう るり）——彼女が総帥を務める霸道財閥が造り上げたのがアル達のデモンベインだ。

だけど、厄介なことにこの瑠璃は頭が固く、偏狭な女のためアル達を認めようとしな
いらしい。

最強の魔道書である自分と九郎のコンビこそが、デモンベインにとって最高の相棒となる。その事を説得中だが、いかんせん聞く耳を持たない状況らしい。

ふむふむ、アルちゃんは人間じゃないと思っていたけど、魔道書の精霊だったのか。
うんうん、可愛い精霊さんだよね。

あたしも魔道書の精霊さんが欲しいなあ。

…九郎を始末すれば、アルちゃんと契約できるかなあ？

「それは止めてくれぬか。なのはの魔力は確かに強大だが、残念ながら妾とは波長が合
わぬ」

うーん、アルちゃんにはその気が無さそうだね。残念だけど諦めるしかないのかなあ
？

「では、デモンベインの見物に行くとしよう」

れつつらごーだね。

あたしは九郎を引き摺りながら歩き出した。

「いつてらっしやい。でも、あまり九郎ちゃんをいじめないでね」

ライカさんがあたし達を見送りながら九郎の心配をしている。

あたしは引き摺っている九郎に目を向ける。少しポロくなっている。ライカさんは心配そうな目を九郎に向けている。

…仕方ないか。

【アストロン】（鋼鉄化）

これで引き摺っても大丈夫だね。

「なんだ!? その呪文は!」

アルちゃんが目を剥いて驚いていた。

この世界にはなかった呪文だったかな?

「えへへ、あたしの精霊になつてくれたら教えるよ」

「うぬぬ……く、九郎の寿命まで待つてくれぬか?」

「うんつ、予約成立だね!」

アルちゃんとの予約が出来ただけでも、今回の海外旅行は当たりだったね!

それにデモンベインも興味深いよ。是非とも手に入れて研究したいよね。

あたしはウキウキとした足取りでデモンベインの元へと向かった。

「こ、鋼鉄になった九郎ちゃんを片手で引き摺れるなんて…なのはちゃん、貴女は一体何者なの？」

教会に残ったライカさんの眩きは、あたしには届かなかった。

あたしは覇道の秘密基地に侵入する直前に呪文を唱えた。

【レムオル】（透明化）

【トラマナ】（罨無効）

【ステルス】（敵除け）

「うむ、その魔術も初めて目にするぞ」

「にやはは、探索用の魔法だよ」

あたし達はこっそりと基地内に忍び込んだ。

*

あたし達は問題なくデモンベインのもとに辿り着いた。

「やはり、そなたの魔法とやらは我らの魔術とは体系がまるで違うようだな」

「契約するまでは内緒だよ」

「うむ、分かっておる。ククク、九郎が死んだ後が楽しみだ」

「アルウウウツツ!!? お前、俺の命を狙っているのかっ!!?」

「ぬわっ!!? ちよつと待たんか! 汝は勘違いしておるぞ!」

「勘違いだど!!? じゃあ、俺の死後が楽しみだと聞こえたのは、俺の空耳だったのか?」

「いや、それは真実だ」

「アアアアルウウウウーッ!!!」

タイミング悪く目覚めた九郎がアルちゃんに詰め寄っている。

その姿は美少女を襲う変質者そのものだった。

じゃれ合う二人は放っておいて、あたしはデモンベインに目を向ける。

ふむふむ。

デモンベインの内部からそこそこの魔力を感じるよ。

これは興味深いオモチャかもしれないね。

間違いなく鬼岩城よりは戦闘力は上だろう。

それにこの感じる魔力は、あのジュエルシードとかいう魔力石と同程度だけど、ジュエルシードとは違い魔力を生み出す機能があるみたいだね。

ジュエルシードが魔力を蓄えた蓄電池だとしたら、このデモンベインには魔力を生み出す発電機が内蔵されている。

この違いは大きいよね。魔力を消費するだけの動力源と魔力を生み出す動力源とじゃ、継戦能力が桁違いだ。

ククク、デウス・エクス・マキナ機械仕掛けの神とはよく言ったものだね。

機械仕掛けでありながら、魔力を生み出す能力があるなんてね。

鬼岩城はあくまでもあたしの魔力で動いていた。

だけど、このデモンベインは自ら魔力を生み出している。

面白い、面白いね！

あたしの全力を用いてデモンベインを解析してあげるよ！

「そこで騒いでいるのは大十字さんと古本娘、それと貴女は……どちら様かしら？」

あたしがデモンベインを見つめている最中に近寄ってきていた女の子が声をかけてきた。

女の子は黒髪の美少女でドレス姿だった。彼女の後ろには執事っぽい男が控えてい

る。

うん、どうやらこの娘が「姫さん」みたいだね。

あたしが姫さんを観察していると彼女は不機嫌そうな顔になる。もしかして気が短いのかな？

「貴女が何者かは存じませし、どうやってここまで入り込んだのか分かりませんが、ここは霸道の私有地です。即刻退去を求めますわ。もしも素直に従って頂けなければ少々手荒な真似も覚悟して下さい」

へえ、このあたしに手荒な真似が出来るつもりなんだ。

姫さんが、あたしに視線を向ける。

あたしは基本的に強気な女の子は好きだったりする。ツンデレなアリサちゃんはもちろん大好きだし、すずかちゃんのように多少の敵意混じりに接してくる女の子も微笑ましく感じてしまう。

あたしの周囲にいる女の子達は親しみや敬意、畏れのような感情をもつて接してくる。

間違っても…この姫さんのように「侮蔑」を含んだ視線を向けてくることはない。

このような視線を向けてくるのは…

あたしの敵殲滅対象だけだ。

あたしの口元が歪んでいく。

身の程知らずの小娘に嗤いかける。

「ふふ、小娘如きが随分と生意気な口をきくんだね。身分相応という言葉を知っているのかな？」

小娘の後ろにいた執事が小娘を庇うように前に出た。

「お嬢様、この者は危険です。この場はお引き下さい」

「ウインフィールド、なにを大袈裟なことを仰っているのかしら？

ば怖いものなんて…え？」

小娘の言葉は途中で止まる。

ウインフィールドと呼ばれた執事が汗だくになっていることに気付いたようだね。

「お嬢様、申し訳ありません。私ではお嬢様を守りきることは難しいと思います。ですが、このウインフィールドの命に代えましても、お嬢様がお逃げになるまでは耐えてみせましょう」

執事は蒼白な顔になりながらも、小娘を安心させるように微笑みながら構えた。

その優しく、それでいて決意を秘めた眼差しは、あたしにかつての宿敵を思い出させ

た。

「……いいわ、貴方のその勇氣に免じてチャンスをあげる。あたしに一撃でも当てられたら小娘を見逃してあげるわ」

「一撃……本気でございますか？」

「もちろん——」

あたしはゆっくりと両足を開き、両手を上下に構える。

“天地魔闘の構え”

「——あたしは本気だよ」

「……なるほど、確かに貴女様は本気のようにですね。これほどの絶望を前にしたのは……今は亡き、大旦那様以来でございます」

蒼白になりながらもニヤリと笑みを浮かべた執事の言葉に、あたしの心は歓喜に満たされる。

こいつは実力差が分からない愚か者ではない。実力差を分かった上で、あたしを挑発しながら自らを鼓舞しているんだ。

本気をみせたあたしにも引くことはないと言い放ったのだ。

本当に面白い。

これほどの男と出会えるなんて。

これほどの勇気をもった男が、この世界にも居たことにあたしは敬意を払おう。だからこそ、あたしは全力を尽くす。

この男の勇気と、その気高い誇りを汚さぬように!!

「なあ、アル。こいつらは何をやっているんだ?」

「うむ、空気を読まぬその発言は我が主人ながら見事だな」

「何言ってるんだよ、アル?　おい、お前らもこんな所で喧嘩なんかするなよな。ついてい

うか、ウィンフィールド。お前、女の子相手にその拳はなんの真似だ?　もし、その

拳をなののは向けるつもりなら俺が許さないからな!」

「大十字様…」

執事が鬨気を霧散させる。

「申し訳ございません。大十字様のお怒りはご尤もでございます。執事ともあろうものが暴力にて女性をお迎えるなど以ての外でございました。たとえば、その女性が地上最強の生物だったとしても許されることではありません」

執事は最高の礼をもって、己の不手際を詫びる。

あれれ、空気が弛緩しちやったね。

まあ、別にいいか。

折角の九郎の氣遣いを無にするほどの問題じゃないからね。

小娘はムカつくけど、九郎とこの執事に免じて一度だけは見逃してあげる。

「言っておくけど二度目は許さないからね。そっちの小娘の教育はしっかりしておいてね」

「ご寛恕いただき感謝いたします。不肖ながらこのウインフィールドの全身全霊にかけてお嬢様の教育を致します」

「ちよっ!? 何を言って…モゴモゴ!?」

「汝は余計なことを口にするでないわ! せっかく拾った命を捨てたいのか!」

あれ、アルちゃんの小娘の口を塞いでいるよ。窒息死させるつもりなのかな?

「おいおい、だからそんなに騒ぐんじやねえよ」

九郎が呆れながら苦言を口にしたとき、突然周囲に警報が鳴り響いた。

「大変です! 破壊ロボが現れました!」

メイドっぽい制服の女が飛び込んできて大声で叫んだ。

破壊ロボ?

鬼械神(デウス・マキナ)とは違うのかな?

警報が鳴り響き続ける中、あたしは首を傾げた。

その光に目を奪われた。

「レムリア・インパクトオオオオッ!!」

デモンベインの必殺技が破壊ロボに叩き込まれる。

その圧倒的な熱量は、あたしの本気のメラゾーマをも超えるだろう。

はつきり言おう。

あたしはデモンベインを甘くみていた。

ううん、あたしは「この世界」の魔法や魔術の全てを甘く見ていた。

かつて、大魔王だった自分と比べれば格下だと見下していた。

もしも、レムリア・インパクトをあたしが喰らっていれば回復する間もなく消滅した
だろう。

恐らくレムリア・インパクトは、フバーハ（冷熱防御）では防ぎきれない。

接触型の魔法だからマホカンタ（呪文反射）でも跳ね返せないだろう。

喰らえば間違いなく負ける。

そのことに気付いた瞬間、身体に寒気が走る。

そして同時に全身が歓喜に包まれた。

あたしは、魔法の頂点を極めたなどと勘違いをしていた。

あたしは、大魔王と呼ばれて神をも超えたなどと自惚れていた。

あたしは、火系魔法の一つすら極めていない未熟者に過ぎなかった。

あたしは、未だ魔道の探求者の一人に過ぎなかったのだ。

すでに失われていたと思っていた熱い想いが蘇ってくる。魔道を極めんと燃えていた数千年前の情熱を思い出す。

まだまだ世界には、この大魔王の知識も及ばぬ神秘が眠っているのだろう。

「にやははく、世界はとんでもなく広いの！」

レムリア・インパクトの無限熱量の中、昇華していく破壊ロボを見つめながらあたしは、魔道の奥深さに心躍らせていた。

「それからどうなったのよ?」

海外旅行から帰ってきたあたしは、お土産を渡すためにアリサちゃん家に来ていた。そのついでに旅行での出来事をアリサちゃんに話していた。

「もちろん魔法研究を頑張っているよ!」

かつての情熱を取り戻したあたしは精力的に魔法研究をしている。

えへへー、すでに幾つか新たな魔法も開発したんだよ!

「そうじゃなくてつ、話に出てきた秘密結社とかマスターテリオンはどうしたのかつて聞いてんのよ!」

「そんなの知らないよ?」

「知らないってなんでよ!?!」

どうしてアリサちゃんは驚いているのかな?

「だって、福引きの海外旅行は一泊だけだから、次の日には帰国したんだよ? 後のことは分かんないよ」

もちろん、アルちゃんとは九郎が死んだら契約をする約束をしているから、あたしの連絡先は教えている。

そこんところは抜きはないから安心してね!

「それこそ知ったことじゃないわよ! それより世界征服を企むようなヤバい奴らを

放つとくなんて、なんだかあんたらしくないわね」

「だって、福引きが…」

「あんたなら海外なんて魔法でひとつ飛びでしようがっ！」

いやー、そうなんだけど、あたしがブラックロτζを殲滅しちやったら九郎が長生きしそうなんだよね。

そうなつちやうと、アルちゃんが来てくれるのがだいぶ先になつちやうよね？

「あ、悪魔だわ!!? 悪魔がここにいるわっ!!」

アリサちゃんがドン引きした顔で後ずさる。

マズい、このままじゃア リサちゃんに嫌われちやうよ!!

「誤解だよ! アルちゃんと契約したら九郎を生き返らせるつもりだから問題ないよ!」

「それも酷いわよ!! あんた、やつぱり悪魔だわ!!」

アリサちゃん!?

アリサちゃんの目に嫌悪の色が宿り始めちやったよ!?

うおのれえーっ!!

ブラックロτζめええええっ!!

あたしとアリサちゃんの絆を切り裂くつもりだなっ!!!!

「冗談はここまでだよっ、アリサちゃん!!」

「え? どうするつもりよ、あんた?」

「世界の平和は、あたしが守る!!」

「ちよっ!?! 待ちなさいよ!!」

【ルーラ!!】

あたしはマスターテリオンの魔力を辿って転移した。

数時間後、アーカムシティは焦土と化した。

「あんたはやり過ぎよーっ!! 元に戻してきなさいっ!!」

何故か正義を成したはずの美少女は、アーカムシティの修復作業に追われることに

なったよ。

【オプス・レパロ】（建物よ、直れ）

【ザオリク】（死者蘇生）

【メダパニーマ】（集団混乱）

あたしは全力の魔法でアーカムシティを元通りに戻した。

ついでに住民達を混乱させて、記憶をあやふやにしておいたから完璧だね。

えへへ、でも流石に少し疲れちゃった。

「でも、これでアリサちゃんとの絆も元通りだよね!!」

「……そうね。（よく考えたら、こいつは出会った頃から悪魔だったわよね。今更の話だったわ）」

「にやはは、あたしとアリサちゃんの愛は永遠なの!!」

こうして、初の海外旅行はあたしとアリサちゃんの愛情を確かめ合う結果となったん

だよ。

めでたし、めでたしだね!!

〈 F i n 〉

大魔王とひぐらし

「えいー！」

壁に向かってイタチを投げつける。

「むぎゆう☆」

ペチャっていう感じで、イタチは壁にへばりついた。

念のため言っておくけど、これはペットの虐待じゃなくて躰けなんだよ。

「あんだ、またお姉ちゃんと一緒にお風呂に入ったよね！」

「ち、違うんだ。あれは美由希さんが無理矢理……」

「美由希さん言うな！」

イタチの分際でお姉ちゃんを名前呼びするなんて万死に値するよ！

しかもあたしでもお姉ちゃんとは一緒にお風呂に入れないのに、どうしてイタチ如きが入れるのよ！

「なのはの場合、一緒にお風呂に入ったら胸を揉みまくるから嫌がられるのだと思いますよ」

リニスの意味不明なことを言う。

「姉妹なんだから揉み合いっこは当然なんだよ！　その証拠にアリシアは喜んでくれるもん！」

「アリシアのあれは喜んでいるのではなく、くすぐったくて笑っているだけですよ。それに近い将来、間違いなくアリシアにもお風呂を拒否されると予想されます」

大丈夫だもん！

アリシアはそんな子じゃないと信じているもん！

だって、あたし達は仲良し姉妹って、町内でも評判のラブラブ姉妹だからね！

もうっ、それにしてもさっきからリニスはイタチを庇っているのかな？

いつの間にそんなに仲良くなったんだろう。

「なによ、リニスはイタチの味方なの？」

「え、もしかして僕にデレてくれたの？」

あたしの言葉にイタチは期待のこもった眼差しをリニスに向ける。

「そんなわけありません」

「ふぎやつ!?!」

リニスは無表情でイタチを踏みつける。

「このようなエロイタチを庇うなど考えられません」

「あふう、えふう、ダメえ、中身が出ちゃうふう」

リニスに踵でグリグリとされてるイタチから妙な声が発せられる。

正直いつて気持ち悪いんだけど。

「ねえ、その気持ち悪いイタチ……捨ててもいいかな?」

あたしの言葉にリニスは少し考える。

「そうですね。個人的には賛成ですが、このエロイタチを下手に捨てると騒動の元になりませんか?」

うーん、そうなんだよね。

このイタチは人語を操るわ、エロいわ、エムいわ、終いには中二病でもあるんだよね。こんなのをその辺に解き放つたら他人の迷惑だよ。

リニスの足の下でハアハア言い出したイタチを冷たい目で見ながらあたしは考える。

「……そうだ。バーベキューをするとか?」

あたしが口にした言葉に対して、リニスは嫌そうな顔になる。

「これを食べるのですか? 絶対にお腹を壊しますよ」

反対はしません、私は絶対に参加しませんよと続けるリニス。

そうだね、あたしも食べたくないよ。

そうだ、お兄ちゃんに食べさせるのはどうだろう?

ううん、やっぱりダメだよ。

エロいお兄ちゃんにエロいイタチを食べさせたりしたら、スーパーエロいお兄ちゃんにパワーアップするかもだよ。

今でもお兄ちゃんは、忍さんとすずかちゃんの姉妹丼を狙ってるようなエロ助なんだから、これ以上のパワーアップは危険すぎる。

「仕方ありませんね。お仕置きとして一週間ぐらい野良暮らしをさせるといのは如何ですか？」

考え込むあたしにリニスが提案する。

「ちよ、ちよつと待ってよ!! シテイボーイの僕に野良生活をしろって言うの!!」

リニスの足の下で恍惚とした表情になっていたイタチが急に慌てだす。

なるほど、イタチは飼いたいイタチ生活に浸りきっているから野良暮らしは辛いだろうね。

お手頃なお仕置きかな？

「うん、そうしようかな。そうだ、念のためにイタチに言うておくけど、お仕置き中は人間の言葉を喋るのは禁止だよ。もし喋ったらアレをちよん切るからね」

「ひい!! 絶対に喋らないよ!!」

あたしが指でチョコキを作って、アレを切る真似をするとイタチは予想以上に怯えた。

「ちなみに切る係はリニスだよ。あたしはイタチのアレなんか触りたくないからね」

「私だって触りたくありませんよ!」

リニスは本気で嫌そうだったけど、あたしも本気で嫌だから諦めてもらおう。

うんうん、イタチが喋らなかつたらすむ話だからね。

「貴方は絶対に喋らないで下さい!!」

「グエエツ!!? ホントに中身が出るうううっ!!!」

リニスの全力のグリグリにイタチは絶体絶命だった。

…このまま天国に逝ってくれないかな?

「どっこい生きてた僕だよ!!」

フェレット界きつての紳士と呼ばれた僕が、あの程度のプレイで天国行きなんてするわけがない。

まったく、御主人様は僕を甘く見過ぎだよ。

「それにしても此処は何処だろう?」

常識知らずの御主人様は、可愛いフェレットを本当に田舎の山に転送してしまった。

一週間限定とはいえ、こんな山の中でサバイバル生活なんて耐えられないよ。

こんな時こそ優秀な嗅覚を活用する場面だよ。

僕はクンクンと周囲の匂いを嗅ぐと、獣とは違う匂いを発見した。

「この匂いは……可愛い女の子の匂いだ！」

すぐに可愛い女の子を見つけられるなんて、やっぱり僕は大了なものだよ。

こんな凄い僕を山の中に放置する御主人は酷すぎる！

そうだよつ、僕みたいなお利口さんで手触りの良い毛皮を持つフェレットを放置する
ような御主人様は……なのはなんかもう御主人様じゃないよ！

僕は、なのはなんかより若くて優しくて可愛い女の子を新たらしい御主人様にするん
だ。

一週間が経っても帰ってなんかやるもんか。

……まあ、なのはが泣いて謝るなら考えてあげても良いけどね。

「それじゃあ、早速この匂いを辿っていこう」

僕はクンクンと匂いを嗅ぎながら山道を駆けていった。

「みい……僕の足から離れて欲しいのです」

突然現れたイタチは、私のふくらはぎにしがみ付くと離れなくなってしまった。

これで私のふくらはぎにしがみ付いたまま腰を振るようなら遠慮なく蹴っ飛ばすところだけど、震えながら涙目で継るような目を向けられると邪険にしにくいわね……でもイタチつて、こんなに感情表現が豊かだったかしら？

「もしかして、僕について来たいのですか？」

「キュウキュウ♪」

私の言葉にイタチは嬉しそうな鳴き声をあげると首を縦にふる。

「仕方ないのです。ペットを飼うのは初めてだけど……いや、羽入がいたわね」

『僕は梨花のペットじゃないのです！』

つい口が滑ったせいで、羽入が喧しく騒ぎ始める。

「はいはい、羽入はペットじゃないわ、私の家族よ。これで良いでしょう？」

『うー、なんだか誠意を感じないのです！ 僕は梨花に謝罪を……』

羽入がしつこくゴチャゴチャと言いつけるのを聞き流しながら私はイタチを抱きあげる。

「キュウ♪」

私の胸に顔を埋めるイタチ。

フンフンと匂いを嗅ぎ始めるその姿は、客観的に見れば愛らしい筈なのになんだか嫌

悪感を感じてしまう。何故かスケベな男に匂いを嗅がれている様な気分になる。

「……考えすぎね。少し疲れているのかしら?」

これまで数え切れないほどの人生を繰り返してきたのだから仕方ないのだろう。

最近の私は少々、精神的に不安定になっていた。

「そういえばアニマルセラピーというものもあつたわね」

腕の中のイタチの背を撫でるととても柔らかくて癒されるような気がする。

「フンフンッ!」

無我夢中で私の匂いを嗅いでいるイタチの姿も甘えていると思えば気になら……い

や、やっぱりセクハラをされている気分になるわね。

「あまり調子に乗るのならチョッキンするのですよ?」

「キュピイ!」

まるで言葉を理解しているかのようにイタチは匂いを嗅ぐのを止める。

「キュイキュイ♪」

イタチはまるで誤魔化すように可愛い鳴き声をあげて甘えてくる。

「…随分と頭の良いイタチね。もしかして羽入以上かしら?」

『その言葉には本気で抗議するのですよ!!』

さらに騒ぎ立てる羽入。

イタチはそんな羽入の姿に勝ち誇ったかのような視線を向ける。その視線に気付いた羽入がムキート更にヒートアップする。

まったく、いつにも増して騒がしすぎるわね。

……あれ？

イタチには羽入が見えている？

ま、まあ別に問題はないわよね。野生動物だしね。

『梨花は渡さないのですっ!!』

「キュウキュウ!!」

イタチと本気で言い争っているように見える羽入は少し残念に思えるけど、微笑ましい光景だと言えなくはないもの。

ふふ、それにイタチに懐かれるだなんて初めての内経験ね。

もしかしたら、今回は何か違うことが起こるのかしら？

ほんの僅かばかりの期待を感じて、私は自分でも気付かないうちに微笑みを浮かべていた。

イタチと出会ってからの日常は、確かにいつもとは違っていた。

圭一はイタチと出会った瞬間から何かしらのシンパシーを感じたみたいで、イタチと共にいつもの圭一以上にエロ方面に暴走した。

あまりにもセクハラが酷すぎるせいで、よく詩音に本気で折檻されているが懲りる様子が見当たらない。

耐久力はいつもの圭一を大きく上回っているけど、頼もしさは何故かまったく感じない。というか頼りたくない。

魅音と出会ったイタチは、魅音のおっぱい目掛けて突撃したことを皮切りに魅音に対して圭一と共にセクハラをしまくり始めた。

魅音は初めて受けたセクハラのせいなのか、か弱い乙女のようになってしまった。

イタチと圭一を見かけると頬を真っ赤に染めながら、自分の身体を守るように両手で抱きしめる姿は新鮮で、同性の私でもグツときそうにな……コホン、今回の魅音は乙女すぎて頼りになりそうにない。

レナなんかは最悪だ。イタチと組んでセクハラをする圭一の姿はレナにとって可愛くないらしく、距離を置かれるどころか敵対に近い関係になってしまった。

本気のレナパンチの恐ろしさは……思い出したくもない。

唯一の救いは沙都子だった。

今回は全てにおいて最悪の状況に近いけれど、沙都子だけは救われた。

そう……あれは沙都子にとって最悪のあの男が雛見沢に戻ってきた日のことだった。

*

「うそ……あの男が戻ってきた」

目を追うごとに悪くなる状況に打ちのめされていた私のとどめを刺すように、その男の姿が目に見えびんできた。

その男——鉄平は沙都子の叔父だけど、最悪の男だった。

鉄平が雛見沢に戻ってきた場合、間違いなく沙都子の家に転がり込んで沙都子も連れていってしまう。そして鉄平の虐待を受けた沙都子は……

「キュイ？」

怒りと絶望に震える私に気付いたイタチが不思議そうに首を傾げている。だけど今の私にはそんなイタチに構っている余裕などなかった。

無謀なのは分かっていた。

無駄なのは分かっていた。

それでも私は自分の行動を止められなかった。

いいえ、止めようと思わなかった。

「お前なんか雛見沢から出ていけーっ!!」

私はなりふり構わず鉄平に殴りかかる。

そんな馬鹿な真似をするほどに私は追い詰められていた。

圭一に魅音、それに詩音は当てにならなくなった。レナに至っては敵対に近い。

全てはイタチを拾ってから始まった負の連鎖。

だけど、私はイタチを憎むことは出来なかった。

何故なら間違いなくイタチが来てから我が家には笑い声が増えたもの。

「キュイキュイ♪」

『そうなのです！ 梨花のご飯は美味しいのですよ』

「キュイ♪」

『あなたの嫁にはやらないのです！』

「キュイ？」

『僕があんたの嫁になりたいわけじゃないのですよ!?!』

「キュイ♪」

『照れてないのです!!』

「キュイキュイ♪」

『2号にならしてあげる!? あまり調子に乗るならばつ飛ばしますよ!!』

何故か分からないけど意思が通じ合っているイタチと羽入。なんだかんだいって仲が良かった。

「わたくしとお風呂に入りますか？」

「キュイキュイ♪」

「うふふ、ではご一緒しましょう」

「キュイー♪」

「はい、お身体はわたくしが洗ってさしあげますね」

「キュイ♪」

「うふふ、イタチさんは甘えん坊さんですわね」

「キュイ!」

「イタチさんはイタチではなく、高貴なフェレットなのですか? 申し訳ありません。」

わたくしには違いが分かりませんわ」

「キュイキュイ!」

「うふふ、もちろん冗談ですわ。からかったりして申し訳ありません」

「キユイ」

本当に何故だか分からないけど意思が通じ合っているイタチと沙都子。エロイタチと一緒に風呂に入ろうだなんて沙都子の気がしれないけど、二人(?)の仲は良かった。

甚だ疑問しか感じなかったけど、イタチがいるだけで我が家は明るくなった。

外の人間関係は最悪になったけれど、その代わり家庭内の雰囲気は今までで一番良くなった。

まあ、こんな状況では今回も私は生き残ることは出来ないだろうけど、私は満足していた。

最後の瞬間まで、この温かい家庭で過ごせるのならば私に後悔などない。

そして、そんな幸せな家庭を壊す鉄平の存在は絶対に許せなかった。

「うわああああつ!!」

雄叫びを上げながらもトテトテとしか走れない己の身が恨めしい。

鉄平には既に気付かれている。

拳を握り締めて迫る私の姿に驚いたように目を見開いているけど、さすがに大人しく殴られてなどはくれないだろう。

私は殴り返される覚悟を決めた。だから歯を食いしばりながら拳を振りかぶる。

「キュイキュイ?」

『あの男は僕達の敵なのです!!』

「キュイ!」

『そうなのです!! サーチアンドデストロイなのです!!』

「キュイ! キュピキュピキュピーン☆」

『おおつ、未知なる魔法なのです!』

後ろでイタチと羽入が何か叫んでいる。だけど、頭に血が上っていた私の耳には聞こえなかった。

「くたばれつ、鉄平!!」

その瞬間だった。

私の身に奇跡が舞い降りた。

「ゲボオオオオオオツ!」

私の小さな拳を喰らった鉄平が血反吐を吐きつつ吹き飛んだ。

不思議なことに鉄平は驚愕の表情のまま、まるで金縛りにあったかのように無防備に攻撃を喰らった。

その状況に呆気にとられる私だったが、すぐに自分の身体から光が放たれているのに気付いた。

光輝く身体から込み上げてくる無尽蔵とも思えるほどの熱い活力に心が震えた。握り締めた小さな拳からは、獅子をも屠れるほどの狂気の如き闘気が感じられた。どのような奇跡がこの身に舞い降りたのかは分からないけど、ただ一つハッキリと分かることがあった。

“今なら殺れる！”

吹き飛ばされて仰向きのまま呻いている鉄平に目を向ける。

その隙だらけの姿に私の口角が引きつるようにながっていく。

『行っけー!!　なのです♪』

「キュイキュイ♪」

羽入の声援と、恐らくは同じように声援を送ってくれているイタチの鳴き声に背中を押された私は鉄平に全力で襲いかかった。

「みい…変態のおじさんが怖かったです」

悲鳴をあげる元気もなくなり、ピクンピクンと痙攣を繰り返すだけになった鉄平。さすがにヤバイと正気に戻った私は直ぐに警察を呼んだ。

警察には、鉄平が私にイタズラをしようとしたから正当防衛で反撃したと伝えた。

私のような少女の攻撃で、成人男性の鉄平がボロ雑巾のようになっていて、疑問を持たれかけたが、いなかったはずの目撃者が多数現れたお陰で信用してもらえた。

我ながら無理のある言い訳だと思っていたから、持つべきものは「古手の信望者」なのだと思つた。

そして、鉄平は長期の入院が必要だった。退院後はもちろん逮捕される。

雛見沢で崇められている私にイタズラをしようとして逮捕された鉄平は、もう雛見沢に戻ってくることは出来ないだろう。もしも姿を見せようものなら村人総掛かりで袋叩きになるだろう。

まあ、風の噂によると、あの男は幼い少女が近付くと酷く怯えるようになったそうだ。幼女恐怖症になった鉄平が沙都子に危害を加える心配はないだろう。

「それにしてもあの光は何だったのかしら？」

奇跡を起こしてくれたあの時の光。

初めは羽入の力かと思つたけれど、それは本人に否定された。

『あんな便利な力が使えたならとつくの昔に使っているのです』

納得の答えだった。そして羽入は何故かイタチに視線を向ける。
『あれは、あの子の力なのですよ』

羽入の視線の先では――

「フエ、フエレットさん!? 服の中に潜り込むのはおやめになって下さい!」

「キュイキュイー♪」

「そんなところを吸わないでー!? ミルクは出ませんことよー!!」

「キュイー♪」

「下の方には行かないでー!」

「キュキュイー♪」

「本気でそこはダメー!!」

――沙都子がエロイタチに襲われていた。

私の沙都子に何をしている!?

「エロイタチはぶっ殺すのです!」

『止めるのです、梨花つ、そのイタチさんは恩人なのですよ!!』

結局、あの力は古手の血に眠る力が一時的に目覚めたのだろう。

きつとそうに違いないと私の勘も告げている。たぶん。

羽入はエロイタチの力だと言い張っているが、そんな訳がない。

『梨花は強情なのです』

「そんなに言うならもう一度あの力を見せなさいよ」

『イタチさん、梨花に見せてあげて欲しいのです』

「キュウ……」

『そうなのですか…梨花、イタチさんはこう言っているのです。「僕も魔法を見せてあげたいけど、あまり大っぴらに魔法を使うと恐ろしい大魔王という存在に気付かれて、僕はお仕置きをされてしまう危険があるから緊急時以外は見せれないんだ。本当にゴメンね」僕も本当に残念に思うのですよ』

「そのエロイタチは「キュウ」としか言っていないわよね!？」

たったひと鳴きでどれだけの意味が込められているのよ。まったく、羽入は嘘が下手

くそすぎるわね。

『うう…嘘ではないのですよ』

羽入はしつこく食い下がろうとしていたけど、私はいい加減ウンザリしてきた。

「もういいわよ。別に本気でそのエロイタチを始末する気はないから羽入も無理して庇おうとしなくても大丈夫よ」

なんだかんだ言っても、エロイタチのお陰で我が家は賑やかになったのだし、沙都子もエロイタチを可愛がっている。

羽入のことも見えているから、羽入もエロイタチとコミニケーションが取れて楽しそうだ。

エロい部分は許容範囲として大目にみるとしよう。

『ほ、本当に嘘ではないのですよ!?!』

「だあああつ!!　しつこいわよ、羽入っ!!　だいたい魔法だけならともかく、さつき言ってた大魔王ってなによ!!　羽入はアニメの見過ぎなのよ!!」

どうせ、あの力は羽入が無理をしたのでしよう。きつと命を削った力とかだから私に怒られると思って誤魔化しているつもりなのよ。

まったく、ばか羽入め…

本当に、本当にありがとう。

楽しい日々は瞬く間に過ぎていく。

私に羽入、そして沙都子とエロイタチ。

いつものメンバーと比べれば人数こそは少ないけれど、エロイタチが加わることで今までのループとは異なった日常を体験できた。

とつくに枯れてしまったと思っていた心が、エロイタチを中心に巻き起こる騒動に一喜一憂する。

なんて楽しい日々だろう。

なんて輝かしい日々だろう。

そして、なんて悲しい日々なのだろう。

終末へと向かうと分かっているながら、何もできない日々。

泣こうと喚こうと止まらない時間の流れ。

それなら最後の瞬間まで笑っていよう。

家族と共に笑っていよう。

そして、私はタイムリミットを迎える。

その日、エロイタチと散歩をしていた私の背後から何者かが襲いかかってきた。

いつもの私なら簡単に薬品を嗅がされて、あっさりと昏倒させられていただろう。

しかし今回はエロイタチが気付いてくれたお陰でその場を逃げ出すことに成功した。必死に逃走する私だったけれど、謎の集団に次第に追い詰められていった。

そして気がつけば人気のない場所で敵に囲まれていた。

「うふふ、絶体絶命といったところね。梨花ちゃん」

「…まさか貴女が」

私の目の前には、今まで味方だと思っていた女性が微笑みながら立っていた。

「ゴメンなさいね。梨花ちゃんには恨みはないけど、ここで死んでもらうわ。抵抗しなければ苦しまなくて済むわよ」

「鷹野、よくそんな台詞を笑いながら言えるわね」

「あらあら、年上を呼び捨てしちやダメよ」

こんな状況だというのに何時ものように振る舞う鷹野の様子に私は恐怖を感じた。

周囲を見渡すと武装した男達が無表情のまま銃を構えていた。

この男達は、どこか狂気を感じさせる鷹野にも何も反応せずにまるで機械のように従っている。

その様に男達がヤクザのような烏合の衆ではなく、訓練された集団なのだと素人の私でも察することができた。

どうやら私の敵は、私が思っていた以上に強大な相手だったみたいだ。

「キユウ…?」

肩に乗っているエロイタチが心配するような鳴き声を発する。

目を向けるとエロイタチと視線が合う。

私にはイタチの表情など読めないが、この時だけは間違いなく分かった。

「まさかイタチに心配される日が来るなんて思ってもいなかったのですよ」

私は、私のことを気遣うエロイタチを安心させるためにニパーと笑う。

「キユウ…」

残念ながら効果はなかったようだ。エロイタチは悲しそうな鳴き声をあげる。

「……鷹野、このイタチは逃してあげて欲しいのです」

せめてエロイタチは助けたい。私の分まで生きて沙都子と幸せに暮らしてほしい。

「イタチ?」 その子はフェレットよね。イタチと同じにしては可哀想よ」

「キュ!? キュキュウ♪」

「エロイタチ!」

鷹野の言葉にエロイタチは嬉しそうな鳴き声を発すると鷹野の元に駆けていく。

鷹野の元に辿り着いたエロイタチはスタタツと肩まで駆け上がる。彼女の頬をペロペロと舐める。

「あらあら、人懐っこいフェレットね。うふふ、いいわよ。梨花ちゃんの最後の願いは叶えてあげる。この子は可愛いから私が責任を持つて飼つてあげるわね」

「……」

何故かしら。

私の望み通りの展開なのに、今は無性にエロイタチをぶつ飛ばしたいわ。

「あつ、服の中に潜り込んだらダメよ」

「キュウキュウ♪」

「アン、そんなとこ舐めたらダメよお」

「キュキュー♪」

キヤツキヤウフフという感じにエロイタチと鷹野は戯れていた。

「……」

うん、決めたわ。

鷹野は無理だとしてもエロイタチは意地でも殺す。

私のループに巻き込んでやる。

覚悟を決めた私は懐に隠し持っていた包丁を握りしめると、エロイタチに向かつて一直線に走り出す。

「ちよっ!!? 誰か梨花ちゃんを止めなさい!!」

包丁を振りかざし迫る私に驚愕の眼差しを向けた鷹野が慌てて叫ぶ。

エロイタチの方はというと、鷹野の胸のあたりに潜り込んだままゴソゴソとしている。

よし! 鷹野の胸を突き刺せばエロイタチも仕留められて一石二鳥ね。

私はいつかの鉄平のときと同じように雄叫びをあげながら鷹野に襲いかかる。残念ながらあの時のような羽入のバッグアップはないけれど、ここは乙女の意地の見せ所だ。

「うわあああああつ!!!」

「ひいつ!!? 早く止めなさい!! いいえっ、構わないから撃てええええ!!!」

鷹野の叫びに反応して周囲の男達から殺意が溢れる。

そして男達の銃から弾丸が放たれた。

——その瞬間だった。

“ヒュン”

「イタチ、迎えに来てあげたの。ちゃんと反省はした？」

轟く銃声に思わず目を閉じてしまった私だったけれど、訪れたのは銃に撃たれた激痛ではなく、聞き慣れない女の子の声だった。

不思議に思いながらゆっくりと瞼を開く。

すぐ近くに可愛い女の子がいた。

不可解なことに男達が放つたであろう銃弾が、私達の周囲の空間で固定されたように止まっていた。

「ど、どうなっているの？」

もしかして羽入の不思議パワーだろうか？ 周囲を見渡して羽入を探すが、その姿

は見つからない。

「一体何なのよこれっ!？」

鷹野の金切り声が響き渡る。

その胸元では相変わらずエロイタチが蠢動していた。

そのブレないエロイタチの姿に苦笑がもれる。

「……イタチ。何をしているのかな?」

恐らくはこの超常現象の原因だろう謎の女の子から冷たい声が発せられた。

〃ジユツ〃

次の瞬間、止まっていた全ての弾丸が蒸発する。

いや、たぶん蒸発したのだと思う。金属である弾丸が蒸発するのは信じられないけど、聞こえた音は水が蒸発するときが発する音に似ていた。

方法は分からないけど、きっとあの女の子の仕業なのだろう。

「ねえ、そのイタチを渡してくれないかな?」

謎の女の子は満面の笑みを浮かべながら、鷹野にエロイタチを渡すように要求した。

その彼女の笑顔を見た瞬間、何故か分からないけど身体が震えだして止まらなくなる。

私の身体が此処から逃げ出せと叫んでいるのが分かる。

「……………、この子をどうするつもりなの?」

鷹野は、胸の中のエロイタチを彼女から隠すように身を背ける。

鷹野は正気なの!?

あの化け物ような女の子相手にエロイタチを庇おうというの!?

間違いない殺されるわよ!!

……ううん、別にいいわね。

考えてみれば鷹野は恨み骨髄に達する相手なのだから、あの化け物が殺してくれるのなら手間が省けるというものだけわ。

「もちろんお仕置きをするんだよ。反省しているかと思えば、女のおっぱいに夢中だなんて巫山戯てるよね」

女の子は、にやははと笑っているけど目は全く笑っていないかった。

その時だった。

よくよく女の子の存在に気付いたのかエロイタチが恐る恐るといった感じで、鷹野の服から顔を出した。

女の子とエロイタチの視線が絡み合う。

「イタチ、次は人間のいない世界でサバイバル生活を送らせてあげるね」

「キュウ!?!」

女の子の言葉にエロイタチは服の中に引つ込むとプルプルと震えだす。

当然、鷹野の胸もプルプルと震えている。何故かその光景はイラつく。いやいや大丈夫だ。私には将来性がある。イラつく必要はないはずだ。

「こんな可愛い子に酷いことをしようだなんて、貴女は悪魔なの!?!」

「鷹野、僕を殺そうとしていた貴女が言わないで欲しいのですよ」

数え切れないほどのループの中で延々と私を殺し続けた鷹野こそ間違ひなく悪魔だろ。

そんな悪魔な鷹野に非難の眼差しを向けられた女の子は不思議そうに首を傾げていた。

「あたしが悪魔？　それは違うよ」

「何が違うっていうのよ!!　こんな可愛いフェレットに酷いことをしようしてっ、それにさっきの妙な力は何なのよ!?　悪魔じゃなければ神だとも言いたいの!!　神はいつまで私を苦しめれば気が済むのよ!!　このクソ神がっ!!!」

魂を絞るかのような絶叫が響く。

「ククク、確かに神は愚かな存在だが、クソ神とまではこの『余』でも口にはしなかったな」

女の子は小さな声で何かを呟いたようだった。

「にゃはは、少しだけあんたの事が気に入ったの……だから本気で相手をしてあげる。この『大魔王』の本気でね」

次の瞬間、世界が爆ぜた。

覚めると新しいループが始まっていた。

部屋を見渡してもエロイタチは何処にもいなかった。

いつもの様に沙都子と朝食をとり、学校へと向かう。

羽入は何も言わずに優しい目で見送ってくれた。

*

「転校生を紹介します」

今日は圭一が転校してくる日なのね。

先生の合図を受けて廊下で待っていた転校生が教室に入ってくる。

テクテクと歩いて教壇に立つ可愛い女の子。

え？

女の子!?

「初めまして、あたしは高町なのと言います。仲良くしてね!」

「キュキュウ!!」

とても元気に自己紹介をする女の子。

その彼女の肩には、とても見覚えのありすぎるエロそうな生き物がチョココンと座っていた。

「……とても嫌な予感がするのですよ。にぱー」

これが私にとって最後の……そして、始まりの物語の幕開けだった。

〈 F i n 〉

大魔王とまどか☆マジカ

そこは凄惨な事故現場だった。

燃え盛る炎とむせ返るほどの血の匂い。

すでに息をしていない者も数多くいた。

そんな地獄のような光景の中、彼女は——バママは絶望を受け入れていた。いや、受け入れざるを得なかった。

自分の近くには息絶えた家族の姿。そして自分自身も四肢が捻じ曲がるほどの大怪我を負っていた。

これで希望を持つという方が無茶というものだろう。

(ふふ、せめてもの救いが大怪我すぎるせいで痛みすら感じないことかしら?)

ママは混濁する意識の中で、そんな埒もないことを考えていた。

それが、目前に迫る死という絶対なる恐怖に耐える為の、力無き少女の唯一の抵抗だった。

「やあ、大丈夫かい？」

そんなママの前に白く耳の長い妙な生き物が現れた。

(なに、この妙な生き物は？ 幻覚かしらね)

人語を話す見たこともない妙な生き物。こんな状況でなかったら用心深いママは決してその言葉に耳を傾けることは無かっただろう。

「時間がなさそうだから手短に話すよ。僕と契約して魔法少女になってくれたら、どんな願いごとでも一つだけ叶えてあげるよ」

妙な生き物がそんな胡散臭い取引を口にする。

(ふふ、もうすぐ死ぬ私に願いなんか聞かれても困るわね)

最後にみる幻覚にしてもナンセンスね。と思いながらママの臉は閉じられていく。

「その願いごとが、その大怪我を治してほしい。だったとしても勿論叶えてあげるよ」
閉じようとしていたママの臉が再び開く。僅かだが、その瞳に力が戻る。

(なんなのよ、この幻覚は。希望を持たせるような戯言を聞かせないでよ)

絶望の淵にいるママは、自分の幻覚ながら腹が立ち殴りたい衝動に駆られる。

ママは最後の力を振り絞り、拳を振り上げようとしたが無常にもその小さな拳はピクリとも動かなかった。

その事実絶望の二重底に落ちていくママ。そして、妙な生き物はここぞとばかりにママに希望という甘い毒を垂れ流す。

「さあ、どんな奇跡でも一つだけ叶えてあげる。僕と契約をして魔法少女になっ「チェリ

オー!!」へブツ!!」

「そのセリフは僕のものだ!! さあ、見知らぬ女の子よ! 僕と契約をして魔法少女になってよ! そして、なのはみみたいなバツタもんとは違う王道の魔法少女ストーリーを僕と綴ろう!」

ママは魂の底から溜息を吐きたくなる。

(ハア: 耳の長い人語を操る妙な生き物を人語を操るイタチが蹴り飛ばした。そして、こっちのイタチも胡散臭いことを言ってるわ)

今際の際にみる自分の幻覚がこんな低レベルなものだと信じたくないママは泣き止まらなかった。いや、全力で泣いた。

「泣いている暇はないよ。さあ、早く僕と契約をして魔法少女になってよ!」

「ちよっ!! 泣かないでよ、見知らぬ女の子!」

(イタチの方がまだマシね)

泣きじやくる自分を前にして、尚も契約を迫る妙な生き物と一応は慰めようとするイタチ。

比較レベルは低いがまだしもイタチの方がマシだとママは思った。

(それにどっちも未確認生物^Uだけ^Mけど、イタチの方が地球産っぽい分、信用出来そうね)

イタチの方は長年生きたイタチが妖怪化したのだと考えられるけど、耳の長い妙な生

き物はどう見ても地球外生物にしか思えないとママは考えた。

妖怪が信用できるのかと問われれば、甚だ疑問だが、他の星の生き物よりかはマシだ
と思おう。

今にも死にそうな重体なせいで、色々な脳内物質がドバドバ出ているママは、ア
パーになっている思考でそう結論づけた。

そして、何故か幻覚と思いつつもながらも契約しようと決意する。

(私はイタチさんと契約……声が出ない!?)

だが、世界はママに厳しかった。

ママは気付いていなかったが、彼女の喉は潰れていたのだ。

もしも、契約を迫っていたのが一匹だけならママは頷くだけで良かったのだろう。だ
が、二匹いるせいでどちらかを選ぶ必要があった。

ここでママの体の状況を整理してみよう。

右腕! (へし折れてて動きません!)

左腕! (ピクリとも反応しません!)

右足! (目を背けたくない状態です!)

左足! (だから見たくないっての!)

喉! (ひゅーひゅーと空気が漏れています!)

つまり、マミは選ぶことが出来なかった。

(絶望した！ 幻覚にすら頼れないなんて！ せめて最後の幻覚ぐらい優しい嘘で

私を甘やかしてよ!!)

この世界の余りの残酷さにガン泣きするマミ。

この世に神は存在しないのだろうか？

この無力な少女を救うことは出来ないのだろうか？

「何やってんのよ、イタチ？」

そんな哀れなマミの耳に新たな声が聞こえてきた。

(今度はなに？ 人語を操るマングースかしら？)

そんな投げやりな思いで、マミは声の主に視線を向ける。

(女の子……?)

視線の先にいたのは、マミよりも年下らしき可愛い女の子だった。

(無事な子がいたんだ!!) お願い、早く救急車を呼ん……ちよつと待って?)

マミはその女の子に違和感を感じた。

ジツと観察してみる。

服装はごく普通に年齢にあつた可愛いものだった。

手足も2本ずつある。角も尻尾も羽だつてない。目鼻口の数も自分と同じだ。

(うん、ただの女の子だよね)

心の中で胸をなで下ろすマミ。

一方、その女の子というといタチとお喋りをしていた。

「それで、あんたは何をやっていたのよ?」

「なのは! 実はこの怪しい生き物がその女の子を魔法少女に勧誘してたんだよ!」

イタチが指差す先には、なのはと呼ばれた少女が現れた瞬間から銅像のように固まって動かない妙な生き物がいた。

「何こいつ? モンスターなの?」

「きつと僕のライバルだよ! このフェレット界の貴公子である僕のライバルに違いないよ! 女の子を魔法少女に勧誘する僕のライバルだ! 今こそ死蔵されている

デバイスの「うるさい」ブキャラツ!」

なのはは、騒ぐイタチを煩そうに蹴り飛ばした。

「ふーん。魔力は強そうな雰囲気なのに、あんたからは弱い魔力しか感じないね」

なのはは、妙な生き物を観察している。

「名前は何ていうの?」

「……」

なのはの問いかけに黙秘する妙な生き物。

「へえ、キュウベえって言うんだ。変な名前だね」

「……どうして僕の名前が分かったんだい？　もしかして誰かから教えられていたのかな？」

この妙な生き物はキュウベえと言うのね。いまや蚊帳の外に置かれているママは呑気な感想を覚えた。

「あはは、やっと喋ってくれたね、キュウベえ——ううん、インキュベーター」
「っ!？」

なのはから大きく距離をとるキュウベえ。

「本当に君は何者なのかな？」

「にやはは、あたしには勧誘しないの？　魔法少女にならないかって」

なのはの全てを見通すような目にキュウベえは最大の警戒をする。

「君に魔法少女の資質はないよ」

キュウベえの言葉に嘘はない。魔法少女に必要な資質——それは魔女化の際に莫大なエネルギーを生む器の持ち主を指していた。

キュウベえの前に立つ不気味な少女は、何やら怪しい力を持っているようだが、魔法少女としての資質は微塵も感じなかった。

「ふーん、魔女化の際の絶望という感情を莫大なエネルギーに変換できるんだ」

「……君はどこまで知っているんだい？」

無表情のまま、キユウベえはなのはに尋ねる。

「あはは、それならあたしには資質はないかな。だって、絶望という言葉はあたしには無縁だもん」

次の瞬間、何かが爆発した。

それは物理的な現象ではなかった。だが、近くにいたマミは本能で理解した。目の前
のただの少女だったなのという存在が、“変わった”ことを。

「……………君は神とでも名乗るつもりかい」

キユウベえのその言葉に、常に冷静だったなのはが初めて怒気をみせた。

「ククク、このあたしを神如きと同一視するなんて……………どうやら消滅したいようね、あん
た“達”は」

「っ!？」

キユウベえは突然その場を逃げ出した。

それを追いかけると思われたなのは、何故か黙ってキユウベえを見逃す。

「逃してよかったの、なのは？」

イタチが不思議そうに問いかける。

「にやはは、サーチは続けているからいつでも捕まえられるよ」

「ハハ、そりやそうだね。なのはから逃げれるわけがないんだ」
イタチが遠い目をして笑う。

そんな一人と一匹の掛け合いをママは微笑ましく思い見つめていた。

(うん、こんなとぼけた幻覚を見ながら逝くのが気楽でいいかも知れないわね)

ママは先ほど姿を消したキュウベエの正体も気になったが、どうやら彼女に残された時間は尽きたようだ。

ママの視界がどんどん暗くなっていく。

(この続きは、来世で死ぬときかな?)

とぼけた幻覚に負けるものかと、意味不明の意地をみせたママが、とぼけた思いを抱いた。

(バイバイ、イタチと……なのはちゃんだったかな。あなた達のお陰で少しは死ぬのが怖くなくなったわ。ありがとう)

ママは穏やかに瞼を閉じる。そして、そのまま暗く冷たい底なしの場所へと魂が墮ちて……

(やっぱりイヤッ!! このまま死にたくない!!)

ママの瞼が再びカッと大きく開く。

(誰か助けてっ、助けてくれたら何でもするわ!!)

魔法少女だろうと何だろうとなっ

てやるわ!!　だから、だから助けて!!」

魂が落ちていく恐怖の中、マミの魂は絶叫をあげた。

「金髪のお姉さん……マミさんつて言うんだね。そっか、マミさんはまだ死にたくないんだね」

暗闇の中で声が聞こえた。

マミは、すでに光の無くなった瞳を必死にその声へと向ける。

根拠はなかったが、マミには何故か分かった。

この声が奇跡へと続く唯一の道だということが。

（お願い助けて!!　わたしはまだ何もしていない!!　わたしが生きた証を残してい

ない!!）

何かが頭に触れた気がした。

「にやはは、アリサちゃんみたいに綺麗な金髪だね。よかったね、マミさん。実はあたって、金髪好きなんだよ。だから助けてあげる」

もしもこの時、マミが平常心を保っていたなら「何よそれ!!　金髪じゃなかったら

助けられない気なの!？」　あんたバツカじゃないの!!」と、どこぞのアリサ某のように激し

く突っ込んで、なのはの機嫌を損ねていたかも知れなかった。いや、逆に気に入られる

可能性も高かった。

何はともあれ、この時のマミは平常心とは真逆の心境だった。それゆえ、こう思った。

（ありがとう、お母さん!! わたしを金髪に産んでくれて!! これからは毎日髪の手入れは欠かさないわ!!）

頭に触れていた手から、満足そうに頷く気配が伝わってくる。

マミは奇跡へと手が届いたのだ。

暗く冷たい場所へと堕ちかけていたマミは、どこかで「べほま」という言葉が聞こえた気がした。

あたしの腕の中で、すうすうと穏やかな寝息を立てる金髪少女^{マミさん}。

「にやはは、今日は可愛い拾い物をしたの!」

「可哀想に、よりにもよってなのはに拾われちゃうなんて」

「うるさい、イタチ」

生意気なイタチを教育をしようとする蹴り飛ばしかけたとき、周囲の地面に広がっていた血溜まりに足を入れかけてしまった。

「もうっ、アリスちゃんとお揃いの靴が汚れちゃう所だよ」

足元が気になると周囲の煙たい空気も気になってくる。あたしはクンクンと服の匂いを嗅いでみた。

「……すずかちゃんとお揃いの服がけむっぽくなってる」

「火よ、消えよ」

この世界の魔法を解析して、あたしが新たに開発した言霊魔法によって周囲の炎が消火された。

「まったく、意味ある言葉に魔力を乗せるだけで、理論上はどんな現象でも起こせるなんて反則だよ」

イタチはあたしの魔法を羨ましそうに見ている。

「にはやは、たしかに応用がきく魔法ではあるけど、その代わり魔力消費量は他の系統の魔法と比べたら一桁以上多くなるよ」

どんな魔法にも長所と短所がある。

例えば、メラゾーマと同等の威力の炎を言霊魔法で再現しようと思えば、メラゾーマ10発分程度の魔力量が必要になる。

研究を重ねて作られた呪文は、その威力と魔力消費量とのバランスがとれているけど、言霊魔法の場合は違う。言霊による結果を得るために、膨大な魔力で強引に現象を

引き起こしているだけだ。

つまり、あたしが元々使える魔法を言霊魔法に置き換えるメリットは全くないけど、新しい効果の魔法が欲しい時には、開発する手間が省けるわけだ。

「でも、なのはみみたいにSランク魔導師が百人いたって敵わないほどの魔力量がなかったら下手に使えないよね」

「うん、それが言霊魔法の最大の欠点だね。保有魔力量よりも多い魔力が必要な呪文を唱えちゃったら、干からびるまで魔力を吸い取られたあげく、効果もでないからね」

これが本当の骨折り損のくたびれ儲けだね。

「まあ、今みたいに炎を消したいときは便利だよ。ヒヤド系の魔法でも消せるけど、威力の調整とか面倒くさいもん」

「さっきの魔法で、なのはが消費した魔力量はどのぐらいなの?」

〃マヒヤド〃

空に向けてマヒヤドを放つ。

少し手加減をしたけど、巨大な氷の塊が空の彼方に飛んでいった。本当は氷の嵐を起こす呪文だけど、嵐になったら周囲が滅茶苦茶になって後始末が大変だから効果を低下させた。

「これの5発分ぐらいかな」

「……うん、僕は絶対に言霊魔法は覚ええないよ」

イタチは今日二回目の遠い目になった。

「う、ううん……」

あ、眠っていたマミさんが起きそうになってる。

マミさんは目をこすりながら体を起こす。

「あれ、どうしてこんな所で寝てるのかしら？」

マミさんは記憶が曖昧になっているみたいだね。よし、ここはあたしが教えてあげよう。

「あのね、マミさん。マミさんはあたしの所有物になったんだよ。これからは命の恩人のあたしに一生尽くして生きていってね」

「……」

あれ、反応がない？

あたしはマミさんの目の前でヒラヒラと手を振ってみる。

だけど、マミさんは何の反応もせず一点を凝視していた。

そのマミさんの視線の先を追ってみる。

血みどろの死体が数人分ある。

あまり見ている気分の良いものじゃないと思うけど、マミさんは目を大きく見開いて

凝視している。

何だか呼吸も荒れてきたような？

うん、やっぱり死体なんか見たくないよね。

あたしは死体を無くすことにした。

〃ザオリク×人数分〃

「もう大丈夫だよ。マミさん」

死体を燃やしてもよかったけど、ついさつき炎を消したばかりだったから、生き返らせる方を選んだ。

「うそ……おかあさん、おとうさん、それに……ユミ!!」

マミさんは転びながらも一心不乱といった感じで駆けていった。

「うんうん、美しい家族愛だね」

イタチが納得顔で頷いている。

「……えっと、よく分かんないけど、流石はあたしだね!!」

マミさんがすごく喜んでいてみたいから細かいことは気にしないで良いよね!!

抱きしめ合うマミさん達の姿を微笑ましく見つめるあたし達は、迫り来る魔女達の脅威と恐るべきインキュベーター共の策略にまったく気付いてはいなかった。

〈
F
i
n
〉

「なーんてね…☆」

大魔王と禁書目録

「ふーん、ここが噂の学園都市なんだ」

最近、学校で噂になっている最先端の科学技術を用いて建設された学園都市。

今日はアリサちゃん達と見学に来ていた。

「へえ、噂通りの所ね。まるで、未来世界に迷い込んだみたいだわ」

「……そうだね、アリサちゃん」

アリサちゃんは目をキラキラさせて周りを見渡しているけど、すずかちゃんはあまり興味が無さそうだね。

「すずかちゃんも学園都市に興味がないの？」

「ううん、私も科学技術は好きだから興味ならあるわ。ただ……」

あれ、どうしたのかな？　なんだか言いにくそうにしているよ。

「なによ、すずか？　言いたいことがあるならサツサと言いなさいよ」

気の短いアリサちゃんがすずかちゃんを急かす。

「う、うん。学園都市の科学力は凄いなと思うけど、なのはちゃんの『力』や『道具』のことを知っている身としては……ここってチンケに見えるよね？」

「すずか、あんた……気持ちにはわかるけど、せめて言い方ぐらい気を使いなさいよ。いくら何でもチンケはないでしょう、チンケは」

「でもつ、チンケなものとはチンケじゃない！　例えば、そのチョコマカと鬱陶しい自動清掃機も何なのよ！　なのはちやんに貰った清掃用の道具なんか念じるだけで、屋敷中のニャンコの抜け毛が一瞬で消えちやうのよ！」

「ああ、あれは便利よね。今まではメイド達がブーブー言いながら処理してたうちのワシンコ達の抜け毛も一瞬だもの……たしかにあれと比べればチンケと言いたくなるかしら」

「そうでしょう！　ここはチンケなのよ！　これで世界最先端の科学技術だなんて、チヤンチャラ可笑しくて笑っちゃうわ！」

「あの、すずか……？　あんた、そんな性格だっけ？　もっとお淑やかじゃなかった？」

「はっ!?　コ、コホン。私が大人になったら世界の科学水準を一気に引き上げてみせるわ。楽しみにしていてね、アリサちゃん」

「そ、そうね。一応、楽しみにしておくわ」

「うふふ、じゃあ、今日はこのチンケな施設を見学して周りましょう」

「……チンケって言葉はやめないのね」

なぜだろう？

二人が、チンケ、チンケって言葉の口にするたびに胸がドキドキする。

……今度、フェイトちゃんとお姉ちゃんにも言ってもらおう。

アリシアには……いくら何でもまだ早いかな？

うん、もう少し成長してからアリシアにも言ってもらおうことにしよう！

*

三人で街中を散策していると銀行強盗に出くわした。

「ここはあたしの出番だね！」

あたしは意気揚々と銀行強盗退治に乗り出そうと腕まくりをする。

「あら、あんたって、そんなに正義感が強かったかしら？　あ、言っておくけど、強奪

された現金でもそれを奪ったら犯罪よ？」

「なのはちゃん、銀行強盗を退治しても犯人を人体改造のモルモットには出来ないよ？」

「二人とも酷いよ！」　あたしは純粋な想いで銀行強盗を退治しようとしてるんだよ

！」

まったく、アリサちゃんとすずかちゃんはあたしという人間を誤解してるんじゃない

かな！

「ふーん、純粋な想いねえ。ちなみにその純粋な想いの中身を聞かせて貰えるかしら？」
アリサちゃんが胡乱げな目付きであたしを見つめている。

思わず、すずかちゃんに目を向けると、彼女はウンウンとアリサちゃんに同意するよう
うに頷いていた。

「もうつ、本当に二人とも酷いよ！　あたし達は親友だよね！　もつと、無条件にあ
たしのことを信頼して愛してよ！」

「あのね！　信頼はともかく、愛してよとか言うあんたは油断できないのよ！」
「……アリサちゃん、それはなのはちゃんの仕事は信頼はできるとい意味かしら？」

アリサちゃんの言葉に、すずかちゃんが余計な事を問いかける。シヨックを受けそ
うな返事をされそうだからそんな事を聞かないでよ！

「ただ、問いかけられたアリサちゃんの方は、その意味がわからないというよう
なキョトンとした表情になった。」

「なに言ってるのよ、すずか？　なのはは親友なんだから当然、信頼してるわよ」
性的な意味では事案にしようかと悩むレベルだけどね。と続けるアリサちゃんの言
葉が耳に入らないほど、あたしは感動していた。

前世では友人と呼べるのはミストだけだった。

今世では友人は複数いる。だけど、あたしの事を「親友」だと言ってくれたのアリサちゃんが初めてだ。

今までは、あたしが一方的に親友だと言ってたけど、過剰な期待はしていなかった。でも、アリサちゃんの方もあたしの事を親友だと思ってくれていたなんて——嬉しいよお!!

「ちよっ!?」抱きついてこないでよ! 鬱陶しいわね!」

思わず抱きついたあたしを、アリサちゃんも口では拒絶するけど引き離そうとはしなかった。

やっぱり、ツンデレは最高だね!!

それから、呆れた顔のすずかちゃんに見守られながら、あたし達は思う存分に抱き合う。

クンカクンカ。

うんうん、年々、成長してアリサちゃんの香りも大人になってきてる。

将来が楽しみだね。あたしも頑張つて「アレ」を生やす魔法を開発するからね。

えへへ、実は研究の目処は立っているんだよ。

言霊魔法を使って「アレ」を生やすことには成功したの!

後はちゃんと生殖機能があるかの検証だね。

実戦投入はアリサちゃんが大人になってからだから、時間的余裕は十分にある。これからのんびりと検証する予定だよ。

ちなみに「アレ」は、普段は生やしていないよ。

下手に生やしたままだと、こうやってクンカクンカしてる最中にメタモルフオーゼしちゃうかもだからね！

今はこうやって、女同士の友情を確かめ合う抱擁で満足できるんだよ。

クンカクンカ、クンカクンカ、クンカクンカ。

満足ー！ー！ーっ！！！！

「いい加減に離れてよ！ 本当に限界だから！ 後でまた抱きついていいから！

本当に離れて!!」

下半身をモジモジさせたアリサちゃんの切羽詰まった絶叫にあたしは渋々離れた。

離れた瞬間、アリサちゃんが地面にへたり込む。

「お、お願い、なのは……て、転送して……う、動いたら……」

蒼白になって、プルプル震えているアリサちゃん。

ヤバイ。本気で限界みたいだね！

あたしは急いでアリサちゃんを万一の事態に備えて、アリサちゃんの屋敷のトイレに転送した。

「アリサちゃん、大丈夫かなあ？　心配だよ」

「間違いない、なのはちゃんの責任って分かってる？」

「すずかちゃんのツツコミは、いつものようにスルーした。」

*

アリサちゃん達に格好良いところを見せようと銀行強盗退治に乗り出す予定だったけど、いつの間にか銀行強盗は連行されていた。

近くの道路に大破してスクラップになった車が転がっている。

「犯人の車よ。中学生ぐらいのお姉さんが手から電撃を放っていたわ」

「電撃……ライデイン。この世界の勇者かもしれないね」

あたしの言葉にすずかちゃんは素直に頷く。

「そうね、猛スピードで迫ってくる車に眉一つ動かさずに対峙できるなんて、もの凄い勇氣だと思おうわ」

そう呟くすずかちゃんの顔には尊敬の色が浮かんでいた。

ムカツ。

「あたしなら百億の宇宙戦艦とだって眉一つ動かさずに対峙できるよ！」

あたしは、つい張り合うようなことを言ってしまう。

すずかちゃんは、あたしの言葉に驚いたように顔を向けてきた。

まずい、少し不機嫌な顔になってるかもだよ。

ムニムニと自分の顔を解して笑顔を浮かべる。

あたしの突然の行動にすずかちゃんは先ほどのアリサちゃんみたいなキョトンとした表情になるが、次の瞬間には今まで見せてくれた事のない優しい笑顔になった。

「うふふ、私もなのはちゃんの親友だって、胸を張って言ってもいいのかしら?」

「もちろんだよ! すずかちゃんはあたしの親友だよ!!」

当然、あたしはすずかちゃんに抱きついた。

クンカクンカーーーーーッ
!!!!

アリサちゃんから携帯に連絡が入ったから、転送で合流した。

「……」

「……」
「……」

合流を果たしたあたし達は三人とも無言だった。

「……」
「……」
「……」

えつと。

「……」
「……」

「なにか言いなさいよ」

アリサちゃんの服装が変わっていた。

「あつ、忘れていました！ 今日にはニヤンコトレーナー達の寄り合いがあったんです！ 私はここで失礼しますね！」

あたしが反応する間も無く、すずかちゃんはダッシュで去っていった。

「……」

「あんたもなんか言いなさいよ」

いつも表情豊かなアリサちゃんが無表情だった。

「……」

「親友のあたしに何も言えないの？」

「いへり。」

「あ、あの……」

「なごよ」

あたしは覚悟を決めて、恐らくは傷ついているだろう親友を慰める言葉を口にする。

「あたしは、アリサちゃんのオムツなら喜んで替えるよ！」

「まずは謝れーーーーっ!!!」

アリサちゃんの蹴りが飛んできた。

「うう……この歳であんな粗相をするなんて」

「大丈夫、失敗は誰にだってあるんだから。大事なのはその失敗を繰り返さない事なんだよ」

「あんたが拘束したせいでしょうが!!」

あたしの愛のこもったハグを拘束だなんて言わないでほしいよ。

「はあ、もういいわ。自宅のトイレだったから被害は最小限に抑えられたもの。さっきの蹴りでチャラにしてあげる」

えへへ、やっぱりアリサちゃんは優しいね。ところで、場所がここだったら許してく

れなかった？

「ここって、この場所であたしが粗相をしてたらって意味かしら？」

うん、そうだよ。

「その場合、あんたを殺して、あたしも死んでたわ」

そこまでの!?

「当たり前でしょうが!! ちよつとは自分の身に置き換えて考えて見なさいよ!!」

自分の身に置き換える？

「そうよ、あんたは平気なの？ その、こんなところでアレをしちやっても」

アリサちゃんの頬が少し赤くなっている。

「あたしは、アリサちゃんがどうしてもしたいならいいよ」

「へっ?」

アリサちゃんの目がまん丸になった。

本当はあたしも恥ずかしいけど、アリサちゃんの為なら我慢できる。

「アリサちゃんがここでオムツプレイがしたいなら、あたしは喜んでアリサちゃんのオムツを替えるよ。でも、アリサちゃんのそんな姿を他の人に見せるのは妬げちやうから

……やっぱり止めようよ」

「あたしを変態みたいに言うな!!」

ゼエゼエと荒い息をつくアリサちゃん。

大丈夫かな？

「落ち着いて、アリサちゃん。あたしはアリサちゃんがオムツプレイ好きの変態だったとしても最後まで味方だから安心して」

「いや、もういいわ。これ以上は勘弁してよ。今日のあたしにはもうライフが残っていないのよ。あんたとの漫才に付き合う元気はないの」

アリサちゃんは疲れた顔でそう言うと、ヨロヨロと歩いていく。

「悪いけど今日はもう帰るわ。立ち直れたらまた連絡するから……あんたからは連絡してこないで」

振り向いてくれないアリサちゃんに慌てて声をかける。

「アリサちゃん、ふらついてるよ！　転送するから待つて！」

「転送は要らないわ！　い、今はまだ屋敷のメイドと顔を合わせたくないのよ」

えーと、事情はなんとなく分かっちゃったけど、それはメイドの仕事のうちだと思うから気にしなくてもいいんじゃない？

「他人事だと思つて軽く言わないでよ！　苦笑されながら体を拭かれたあたしの気持

ちがあんたに分かるつて言うの!？」

いや、その、ごめんなさい。

分らないです。

「……やっぱりと百回ぐらい蹴らせなさいよ」

あたしはその場から逃げ出した。

あたしは一人寂しく学園都市を散歩していた。

テクテクテク。てくてくてく。

あれ、いつの間にか隣にシスターの格好をした女の子が歩いている。

「あなたはシスターなの？」

「私はインデックスだよ？」

インデックス……？

あたしの問いによく分からない返事が返ってきた。

「インデックス……文房具じゃないよね。もしかしてあなたの名前なの？」

「もしかしなくても、私の名前なんだよ」

シスター……いや、インデックスは綺麗な瞳をあたしに向けていた。

「そっか、あたしはなのはって言うの、よろしくね！」

「うん！　よろしくだよ、なのは！」

満面の笑みを見せるインデックスは、全身から光を出しているかのように輝いてみえた。

うん、この子は可愛いね!!

「すごく美味しいんだよ、なのは！」

「うん、それなら良かった。好きなのでお代わりをしてね」

「おおっ！　なのはは太っ腹なんだね。それなら次はこっちのチーズインハンバーグつてのを食べたいんだよ！」

インデックスがお腹が空いていると言うからファミレスに連れてきた。

見ている気持ちいいぐらいによく食べる子だね。

今日はアリサちゃん達と夕食も食べるつもりだったからお小遣いを多めに持っていて良かったよ。

ドンドン積み重なっていくお皿を見ながら、あたしはそんな事を考えていた。

*

「記憶がない……?」

「正確には一年ぐらいの記憶しかないんだよ」

食事もひと段落して、インデックスとお喋りをしていると、彼女からそんな爆弾発言が飛び出した。

インデックスはここ一年程度の記憶しかなく、しかも正体不明の敵に追われ続けているそうだ。

「ご馳走してくれてありがとう、なのは。でもここでお別れだよ」

「インデックス……」

インデックスの敵は、彼女に味方する者も巻き込んで攻撃するらしい。だから彼女はここで別れを告げる。

「だけど、このあたしが気に入った少女の危機を見逃すとも思っているのかな？」

「だとしたらこの大魔王も甘く見られたものだね。」

「なのは、ダメだよ。私に関わろうとしちゃダメ」

そんなあたしの心を見透かすような、インデックスはクギを刺してくる。

そして、インデックスは寂しそうな微笑を浮かべながら、あたしに言葉を投げかける。「それとも、私と一緒に地獄の底まで着いてきてくれる？」

きつとこれが、インデックスの……彼女の別離の言葉なのだろう。

世界のどこに逃げてでも追い続けてくる敵。

そんな明日もわからない闘争の日々へと飛び込める人間など、そうそういないだろう。

だからあたしが返す言葉も決まっていた。

あたしは満面の笑みと共に彼女に言い放つ。

「別にその地獄そのものを壊しちやってもいいんだよね？」

「ふえっ？」

想定外の答えに呆けたように大きく口を開くインデックス。

その口の奥を見つめながらあたしは思った。

“記憶喪失の原因、見つけちゃった”

あたしはインデックスをホテルに連れ込んだ。

大事な事だからもう一度言おう。

あたしはインデックスをホテルに連れ込んだ。

にはやは、別にあたしの初陣じゃないよ？

あたしの初陣の相手はアリサちゃんだからね。

単にインデックスに仕込まれている魔術刻印を消すために、人気のない場所が必要だっただけだよ。

「ここに横になればいいんだね」

「うん、後はあたしに任せてね」

「私はなのはを信じてるよ。でも、無理はしてほしくないんだよ」

「にはやは、分かっているから大丈夫だよ。無理はしないから安心して眠っててね」

「ラリホー」

インデックスのシスター服は、高い魔法防御を備えているみたいだけど、このあたしの魔法を防げるほどではなかった。

あつさりと深い眠りにつくインデックス。

「ホテルのベッドに無防備に眠る可愛い女の子」

これは辛い戦いになりそうだね。

あたしは邪念を振りほどきながら、インデックスに仕込まれている魔術刻印の解析を開始した。

*

10分後

「魔術刻印の消去に成功なの!!」

我ながら長く辛い道のりだったよ。

インデックスってば、寝相が悪いんだもん。

はだけたシスター服の下から覗く素肌の誘惑は強力だった。

もしも、昼間にアリサちゃんの匂いをたつぷりと補給していなかったら、このあたし

といえど勝てなかったかも知れない。

「本当に恐ろしい子!」

ベッドの上でクークー寝息を立てているインデックスの姿を見ないようにしながら、あたしは勝利の美酒に浸るのだった。

*

あたしはインデックスをホテルに残したまま、インデックスの服を調達しに出かけた。

インデックスのシスター服は高性能だけど、敵はそのシスター服を目印にして追いかけているみたいだからだ。

インデックスの敵を屠るのは簡単だろうけど、問題はどれだけの数があるのか分からない事だろう。

延々と湧き出る敵をモグラ叩きのように潰していくのは、いかにも面倒くさい。

それでも敵が多少なりとも歯応えがあれば、日常のちよつとしたスパイスにでもなるだろうけど、インデックスから聞いた話だとただの雑魚達の集団でしかない。

「そんなの相手にしてらんないよね」

インデックスの服は自動的に世界中を転移し続けるように細工をしておけばいいだろう。

インデックス自身には隠蔽の効果のあるアイテムを渡すつもりだ。

「これで一件落着だね！」

「そうはいきません」

軽い足取りで歩いてきたあたしの進路を塞ぐように剣を持った女性が現れた。

長身でスラリとした体型の美人さんだ。ポニーテールもよく似合っているけど、ジーズンの片方の裾を根元でバツサリと切断している。それにTシャツを態々へソ出しになるように結んである。

うん、間違いなく露出趣味のお姉さんだね！

「出てこなかったら見逃してあげるつもりだったよ？」

「ふふ……そうでしょうね。残念ながら、あなたに勝てる幻想すら抱けそうにありません」

魔力を「抑えていない」あたしの前に出て来た女性は、全身に冷や汗をかきながらも震えてはいなかった。

「覚悟は出来ているんだね」

あたしはその女性の殉教者のような瞳に興味を覚えた。

「私は彼女を守ると誓いました。その誓いを破るわけにはいきません」

「彼女を……守る？」

「あつ………リテイクをお願いしても宜しいでしょうか？」

うーんと、面白そうだからいいかな。

「……ほん……覚悟は出来ているんだよね」

「……これが私の使命です。この命に代えても彼女の身柄は奪わせていただきます」

命に代えても……か。

そこまでの想いをインデックスに抱いているということは……つまり、目的はそういう事だよ。

「インデックスの純潔は貴女に渡さないの!!」

「何言ってるんだお前は!!」 お前の脳味噌は腐って………こほん、リテイクツォをお

願いしても宜し『そこまでだ、神裂』何故こちらに来たのですか、ステイル」

面白いお姉さんと遊んでいたら、長身で赤毛の不良神父って感じの若い男が割り込んできた。

「メラ」

「どわあああああつ!!」

轟音を発しながら燃え盛る炎が不良神父へと襲いかかる。

「クソツ、問答無用ってわけかよ!!」

「ステイルツ!!」

「お姉さん、お話の続きは向こうでお茶でも飲みながらしよう?」

不良神父は懐から怪しい札を取り出すと早口で何かを口走る。呪文かな?

興味

は湧かないけど。

その呪文と札が効果を現したのか、あたしのメラは進路をずらされてしまった。

「この俺が炎にやられるわけがないだろうがっ!!」

「ステイルツ!! 貴方のお尻が燃えていますよ!!」

「うわっっちゃあ!? 神裂っ、助けてくれ!!」

「動かないで下さい!! 今、服ごと火を消し飛ばして差し上げます!!」

お姉さんは持つていた剣を振る。

不良神父の服が細切れになる。

あたしは携帯で電話をかける。

「もしもし警察ですか。裸の変態男がいます。場所は……」

「てめえっ!? くそっ、お、覚えてやがれ!!」

「待って下さいステイル!! せめてこれを!!」

「すまん、借りるぞ!!」

あたしの110番に逃げ出す変態男にお姉さんはスカートのような布を投げ渡してあげる。

腰に布を巻いた変態男が逃げていく。

「悪が栄えることは決してないの!」

あたしの正義が勝ったのだ!

「ふふ、この余が勇者の真似事とはな。あの者が見たならなんと言うかな」

きっと驚愕のあまり顎が外れるだろうと、もう二度と会うことのない強敵友の姿を幻視した余は愉快な気持ちになった。

「いや、ちよつと待つてくれないか。うまく思考が回らない。結局、貴女は何がしたいんだ？ ステイルもわざと見逃してくれたのだろう？」

頭を抱えたお姉さんがそんな事を言ってくる。

「じゃあ、お茶でも飲みながらお話をしようよ、お姉さん」

あたしは、露出趣味だけどエロかつこいお姉さんに友好的に笑いかけた。

「ひいつ!? い、一体何を企んでいるのですか!？」

……チャームングなあたしの笑顔を見たお姉さんに何故か怯えられた。

どうしてかな？

「完全記憶能力のせいで、一年以上経つと脳が圧迫されて死んじゃうの?」

エロかつこいお姉さんこと、神裂かんざき火織かおりにインデックスの事情を聞いた。

「そうです。ですから私達は彼女に嫌われてでも任務を遂行しなければならぬので。どうか、貴女にもご理解していただきたい」

うーん、そういう理由なんだね。

確かに死ぬよりかは記憶を失う方がマシかな。

でもね。

「それなら脳を圧迫している10万3000冊の魔道書の記憶を奪っちゃえばいいよね？」

「えっ!? いや、その、それは、魔道書の記憶を保持するのが彼女の大事な『禁書目録』の役割でして、そう簡単にその記憶を手放すわけにはいかないと思うわけで……」

火織はあたしの提案にそんな巫山戯た答えを返す。

「あんたにとつて、インデックスの幸せよりも魔道書なんぞの方がよっぽど大事なんだね。その程度の想いなら捨てちゃえばいいんだよ。そしたら火織も無駄に苦しまなくて済むよ」

「巫山戯るな!! あんたに何が分かるって言うんだ!! 私達がどんな想いであの子の記憶を……」

火織は一瞬激昂するが、すぐにその瞳に涙が浮かぶ。

余はその涙を見ながら苦笑する。

「クク、笑わせてくれる」

「なんだと!？」

「貴様は何を悲劇ぶっている。貴様は友の心よりも魔導書を保存するなどいう下らない役割が大事なのだろう。ならば、喜んで友の心を奪うがいい。それが友の心を裏切った貴様の義務と責任だ。それを放棄するのなら貴様には任務という免罪符を口にする権利すらないわ」

「う、ぐう……わ、私は……どうすれば……」

火織は頭を抱えて悩みます。

まったく、ウジウジと鬱陶しいなあ。火織がエロかつこいいお姉さんじゃなかったら、とつくに消しているよ？

「もうっ、仕方ないからあんたに判断情報を追加してあげるね」

「は、判断情報……?」

火織が顔をあげた。その表情には縋るような感情が浮かんでいた。

「黙って聞け」

「は、はい!」

「あたし思うんだけど、10万3000冊の魔道書の保存に人間の脳を使うのって効率悪いよね。だって、人間なんていつ死ぬか分からないんだよ? 病気や事故で明日どころか10分後に死んだって不思議じゃないよ。そしたら10万3000冊の魔道書は無くなっちゃうの? もう二度と手に入らなくなっちゃうの?」

あたしの言葉に火織は目を見開くだけで答えは持ち合わせていないみたいだった。「ところで、インデックスの脳に10万3000冊の魔道書を記憶させた方法はどうかやったのかな? 実物を読んだのかな? それとも術式で焼き付けたのかな? どっちにしる10万3000冊の魔道書の「原本」はインデックスの脳の「記憶」とは別にあるんだよね」

火織の顔色が、どんどん悪くなる。

「あたしの考えだとインデックスの『禁書目録』という役目は、「原本」の10万3000冊の魔道書を守るための目眩しだと思うよ。派手に動き回る人間って目眩しに丁度いいよね」

火織はもう突つ伏して顔を上げる元気も無くなった。

「それで、火織にとつて「友の心」と「代わりのきく目眩し」のどっちが大事なの?」顔を上げた火織の表情を見れば、答えは聞かなくても分かった。

「うん、良い顔になったね。火織」

「はい、ありがとうございます。お陰で全ての迷いが晴れました。上層部がそのような巫山戯た役割を彼女に押し付けるのなら、私はもう上層部になど従いません」

「ううん、そこは従おうよ。その方が後々楽だよ」

「へっ? それはどういう意味なのでしょう?」

「にやはは、インデックスの役割が目眩しならそのインデックスの代わりを用意すれば面倒がなくて良いよね」

火織の話だと、今までにインデックスが記憶している魔導書を魔導書として使用した事はないそうだ。

あくまでも彼女の役割は魔導書を保存する『禁書目録』だからだ。

その時点で、彼女の真の役割は目眩しだと分かりそうなものだけど、エロかつこいとお姉さんの火織は脳筋っぽいから気付けないみたいだね。

火織のいう上層部を潰すのは簡単だけど、裏の世界は色々と勢力争いが繊細だからあまり掻きまわすと、すずかちゃんとの“夜の一族”に迷惑をかける可能性がある。

それを回避するために、あたしが作った実体を持つ幻のインデックスに彼女のシスター服を着せて世界中を巡らせればいいよね。

そして年に一度、火織が記憶を消す儀式を行う振りをする。

もしも火織がインデックスの担当から外されたら、あたしが幻のインデックスを事故にでも見せかけて処分すればいい。

強力な防御魔法がかけられているシスター服は残して、肉体は跡形もなく焼き尽くされるような事故にすれば上層部に気付かれることはないだろう。

「それなら直ぐにでも事故に見せかけて彼女が亡くなった事にすればいいのでは？」

「脳筋のエロかつこいお姉さんの火織が単純な意見を言う。

「ダメだよ。事故があれば調査のために魔術師達が派遣されるよね？」

「それはまあ、そうでしょうね。ですが、貴女の力なら偽りの事故だと見破られる心配は要らないのでは？」

「そういう心配はしてないよ」

「では、どのような心配事があるのでしょうか？」

「遠くにいれば気にならないけど、近くをウロチョロされたらつい潰したくなるかも、だよね」

堪え性のない発言をしたあたしは照れ隠しに「にやははく♪」と明るく笑う。

だけど、火織はそんなあたしとは対照的に乾いた笑い声をあげていた。

火織と別れた後、事件は起こった。

インデックスの服を調達したあと、ホテルに戻るとインデックスが居なくなっていたのだ。

「あたしのインデックスがっ!？」

あたしが直ぐにインデックスを探しだして駆けつけた時には手遅れだった。

あたしの眼前には無情な光景が広がっていた。

「とうまに全てを見られちゃったから、とうまに責任を取ってもらうんだよ!」

「信じてくれ! 俺は無実なんだ!!」

「とうまは酷いんだよ! 私を無理矢理裸にしたくせに!」

「違う! いや違わないけど、たぶんあんたが考えているようなシチュエーション

じゃないぞ!!」

「とうまは酷いんだよ! 裸になった私を押し倒したくせに!」

「だから違う! いや、これも違わないけど、絶対にあんたが想像している状況とはか

け離れているからな!!」

「とうまは酷いんだよ! 押し倒した私のおっぱいも触ったくせに!」

「だから違う! いやいや、確かに触ったけど、完全無欠にあんたが妄想しているラブ

ラブな状況とは別物だからな!!」

「とうまは、とうまは……わ、私のこと……きらいなのかな……?」

「っ!? ち、違う!! ああ、もうっ、どういう状況なんだよっ、チクシヨウ!! あ

あ、そうだよ!! 会ったばかりだけど、俺はお前のことが……い、インデックスの事

が大好きだよ!!」

「とうま!! 私も、私も、とうまが大好きなんだよ!!」
二人は互いの愛情を確かめ合うかのように強く激しく……そして、愛おしそうに抱きしめあった。

そして、あたしは――

――砂糖を吐いた。

げろげろ。

「アリサちゃん、聞いてよーっ!!」

あたしは傷心を慰めてもらうべくアリサちゃんのもとに転移した。

「あんたから連絡してくんなって言ったでしょうが!!」

「だから連絡じゃなくて、直接来たんだよ!!」

「こ、こいつは屁理屈ばかり言うわね」

「そんな事より話を聞いてよ!!」

拳を握りしめてプルプルと震えてるアリサちゃんを宥めながらあたしの話を聞いてもらう。

*

「ふーん、友達になった女の子に両思いの彼氏が出来たら良い話じゃない。何が問題なの?」

「ええっ!?! そうなの!?!」

「別に相手の男は悪い男じゃないのよね? それなら友達として祝福してあげなさいよ」

「でもでもっ、あたしが面倒みてあげようと思っていたのに、いきなり二人で同棲するっていうんだよ!!」

「それって、生活費はどうするのよ?」

「……相手の男がバイトを増やすって言った」

「へえ、甲斐性のある男なのね。ふふ、いいじゃない、若い頃の苦労は男を育てるって言うからね」

「うう、でもでもっ、インデックスも絶対に苦労するよ!!」

「あんたの友達は苦労したくないって言うてるわけ?」

「……………相手の男を支えるとか何とか言ってた」

「うふふ、その子もいい女じゃない。好きな男と苦勞を分かち合うなんて素敵だわ。一体何が問題なのよ？」

本当に大変なときはあんたも助けてあげるつもりなんですよ？」

「もちろんだよ!! あたしは自分が気に入った相手を見捨てたりしないもん!!」

「あはは、それなら心配事なんかじゃないじゃない。新しい友達を取られたなんてポヤかずに、あんたも友達なら笑って祝福してあげなさいよ」

そう言つて、優しく笑うアリサちゃんにあたしは、「うん」と答える以外の選択肢はなかった。

グスン。

*

「それじゃあ、インデックスにお祝いを言つてくる。ついでに魔導書の記憶も消してやるよ」

「魔導書の記憶？ 何よそれ、ちよつと詳しく聞かせなさいよ」

あたしはインデックスの事情をアリサちゃんに説明した。

「それであたしはインデックスを助けるために10万3000冊の魔道書の記憶を消すことにしたんだよ」

「あんたって妙なところで馬鹿なのね」

「ふえ？」

アリサちゃんは呆れた顔をしながらも人間の脳の構造について説明してくれた。

詳しくは省くけど、人間の脳は10万3000冊の魔道書を丸暗記していても死ぬことはないそうだ。

「にやはは、なるほどね。アリサちゃんって頭がいいね」

「あんたの方が頭はいいわよ。単にあんたが興味のない分野だったんでしよう。でも個人的に興味はなくても最低限の知識ぐらひは集めておきなさい。じゃないと今回みたいに間違った判断をしちゃうわよ」

「うん、そうだね。今回は反省だよ」

うんうん、流石はアリサちゃんだね。将来の伴侶のあたしの事を想って、敢えて耳に痛いことも言ってくれるよ。

「大好きだよ、アリサちゃん！」

「だから抱きつくたっての!!」

インデックスの10万3000冊の魔道書の記憶はそのままにする事にした。

記憶に問題がないのなら、将来インデックスの役に立つかも知れぬ。

まあ、この話は火織には内緒にしている。だって、自分の間違いを説明するのは嫌だもん。

あたしには元大魔王としてもプライドがあるから、失敗話を下手な相手には出来ないもの。

これがアリサちゃんやすずかちゃんのような親友相手なら失敗話も笑って話せるけどね。

とにかくアリサちゃんのお陰で、インデックスには笑って祝福を伝えることが出来た。

ついでに10万3000冊の魔道書の記憶をコピーさせてもらったから、魔法研究の資料にさせてもらおうつもりだ。

その記憶の対価として、インデックスがツンツン頭の部屋に住むことを関係者に暗示をかけて納得させてあげた。

もちろん、対価とは関係なしにインデックスに危機が迫れば無条件で力を貸すよ。だって、インデックスは友達だもん。

インデックスの身に危険が迫ったなら、あたしが相手になるよ。

まあ、今は少し気になったこれだけをしておこう。
あたしは天を仰ぎ、声を紡ぐ。

【余を覗き見る愚か者よ】

——同時刻某所。

【余を覗き見る愚か者よ】

『なっ!? この思念は!!』

【一度のみ忠告をしよう】

この瞬間、私は死を迎えた。

そして、再び生を得た。

『……………今のは現実なのか?』

【忠告は一度のみ。二度目は破滅を与える】

『……………』

私は彼の者の監視を止めた。

「にやはは、ついでに1000万個ほど潰しておいたの」

あたしは覗き見をしていた変態に警告をした。

まったく、この世界は変態が多くて困っちゃうよ。

そういえば、インデックスの相手の男も妙なモノを右手に宿していたよね。もしかしたらあいつも変態かも？

うう、やっぱりインデックスが心配だよ。

でも、ちよつとぐらいの障害は人生のいいスパイスになるもんね。

うん、本気でインデックスが困るまでは見守るスタンスでいこう！

じゃないと、またアリサちゃんに窘められちゃうもんね！

よしつ、今からアリサちゃんに会いに行こう!!

アリサちゃーん
!!!!

クンカクンカーーーーっ
「だから抱きつくなんての
!!!」!!!

大魔王、続けてます。

プロローグ、ぱーとつーだよ。

「第九十七管理外世界」にて巻き起こった一連の騒動は、彼の管理外世界を無期限の《不可侵監視対象世界》に指定とされることにより、ひとまずの幕引きを図られる事となった。

この決定に際して、一部より反対の声が上がったが、時空管理局の上層部は強権を発してその声を封じ込めた。

その行為は多くの反発を招いたが、「第九十七管理外世界」に生息する前代未聞の危険生物の脅威の前には些細な事柄として上層部は黙殺した。

その危険生物による被害は、非公開資料によると時空管理局が誇る時空航行部隊一個師団にまで及んだと噂されている。

階段を駆け上がる。

風が頬を撫でていった。

僅かに潮の香りが混じったそれは、目的の場所が近いことを教えてくれた。

——
トンツ。

軽い足音を立てて、あたしは目的の場所に到着する。

朝日が輝いていた。

愛する人々が住まう街を優しい光が包んでいる。

そんな当たり前の光景が凄く尊いものに思えた。

ふと、空を見上げる。

そこには透き通るような蒼い空が、新たな一日を祝福するように広がっていた。

「うん、今日も頑張ろう！」

“ギシイッ”

空間が軋むような音を立てて、あたしの周囲に複数の魔力球が具現化する。

光り輝く魔力球は、互いにぶつかる事もなく高速で身体の周囲を不規則に飛び回る。

魔力球の数を増やしながら身体を浮遊させていく。そして、同時に魔力球の速度を上げていく。

魔力球は際限なく増えていきながら、速度も上限なく上がっていく。
増え続ける魔力球は、あたしの周囲を結界のように隙間なく覆い尽くす。

傍目には普通の結界のように見えるだろうけど、実際には高速で不規則な軌道を飛び回る魔力球だ。

もしも触れれば、激流に手を差し入れたかのように弾き飛ばされるか、運が悪ければ砕け散るだろう。

もつとも、この結界もどきに突撃するようなバカはいないだろうけど。

魔力球が十重二十重と重なり、徐々に厚みに増していく。

魔力球の数が一億を超え、その速度が音速に達した頃に初めて僅かな負担を感じ始めた。

こんな基礎的な訓練でも際限なく負担を増やせるからこそ、あたしは毎朝の日課にしていた。

あたしは訓練を続ける。

結界もどきの厚さが一キロを超え、速度が光速に達する。すでに魔力球の数は数えていない。

ここで一旦、魔力球の数と速度を増すのを止める。身体の上昇は大気圏最上部で止まっている。

あたしの意識は魔力操作に集中しているけど、まだまだ余裕があった。

更なる負荷をかける為に魔力球に新たな魔力を込めていく。

魔力球の魔力密度が増していき、同時に輝きが強まっていく。

魔力球の一つ一つに限界まで魔力を込め圧縮していく。一つの魔力球に対してメラゾーマ三発分に値する魔力量で限界に達する。

今や本気で訓練に集中しているが、これが全力かと問われれば「否」と答えるしかない。

ニヤリと唇が歪むのが分かる。

ここからが本番だ。

光速で移動させている魔力球に回転を与える。つまり地球のように公転しながら自転をしている状態とする。もつとも魔力球は公転のように規則正しい軌道ではなく不規則な軌道で動かしているけどね。

やがて、自転の速さも光速に達した。

あたしの額から一筋の汗が流れる。

膨大な魔力の制御と操作を行いながら、両手を腰だめに構える。

イメージするのは、あたしが“あたし”ではなく、“余”だった頃の強敵友の姿だ。膨大な竜闘気を一気に放出する必殺技。

今にして思えば、あの技は無尽蔵ともいえる魔力量を誇る余にこそ相応しいだろう。だが余は竜闘気の代わりに魔力を放つだけの単純な真似はせぬ。

限界まで魔力を詰め圧縮した魔力球には、自転による回転エネルギーと複雑な公転による運動エネルギーを与えていた。

余の魔力に、回転と運動エネルギーを加えた破壊力は竜闘気をも上回る。

余は暗黒の宇宙に視線を向けた。

全身から闘気が溢れ出す。余は構えた両手を宇宙に向けて気合いを込めて突き出す。

「マジックキャンソ
魔力砲!!」

余が放った魔力砲は、時空振動すら起こしながら宇宙空間を切り裂いていく。

かつての強敵友とは違い、事前準備をすることによって、余の魔力砲の威力は強敵友の必殺技とは比べ物にならないほどの絶大な威力を誇っている。

「フハハハハハッ!! 今の余なら貴様如きに負けることなどあり得ぬぞ!!」

余は勝ち誇る。もう二度と会う事は叶わぬ強敵友を嘲りながら――

——そして、
“あたし”はにっこりと微笑む。

「にやはは、ちなみに構えに意味はないの…☆」
あたしのは魔法だから、構えはただの演出なんだよ。

第1話 「車椅子の少女」

「おはよう、なのは」

「おはよう、なのはちゃん」

「おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん」

朝のバス停で、親友達と待ち合わせをして一緒に登校をする。

一年前のあたしには、想像も出来なかった。

きつとあの頃のあたしは高嶺の花すぎたのだろう。男子達はもとより、女子達からも遠巻きにされていた。

例えるなら、雑草が郡なす草原に咲く一輪の薔薇の花だった。

全校生徒の誰もが憧れ、恋い焦がれる存在に話しかけられる蛮勇の持ち主はいなかった。

そんな憧憬の想いを向けられる本人としては、もつと気軽に接して欲しいと思うんだけどね。

だけど、そんな孤高な日々も永遠には続かない。

運命と出逢ったのだ。

——その出逢いは偶然だった。

——ただど偶然は必然となり、いつしかあたし達三人を共に生涯を歩む運命の三人へと導いた。

笑顔を見せる親友達にあたしは笑いかえす。

凛と咲く、一輪の薔薇の花に——

——共に咲き誇る仲間ができた。

*

通学バスが到着した。

車内はうんざりするほどに混んでいたけど、あたし達が乗り込むと他の生徒達は通路を開けてくれる。

えへへ、こういう時は人気者は得だよね。

あたしの左右の腕を、まるで拘束するかの様に抱きかかえている両脇の親友達と共に

悠々と最後尾のシートへと向かう。

満員の車内だけど、最後尾のシートだけはいつも空いている。

そこはあたし達の指定席だからだ。

これも人気者の特権だろう。あたしが何も言わなくても、周りの信望者達が色々と気遣ってくれるのだ。

あたしは両腕に温もりを感じながら機嫌よく歩いていく。

——ピタリ。

歩みが止まる。

ヴァージンロードを進むが如く、厳かに進んでいた歩みを止められた。

その元凶に目を向ける。

そこには、耳にはヘッドホンをはめ、顔を手元のスマホに向けている小僧が立っていた。

あたし達の進路上に立ち塞がった愚かな小僧。

その小僧は、周囲の有象無象共の——

「早くどけよ!」

「お前、死にたいのかよ!」

「もう遅いよ! 早く離れよう!」

「こゝ、殺されるぞー！」

「待つて！ 置いて行かないで！」

——などと言つた助言にも耳を貸さずに、一心不乱に手元のスマホを見つめていた。その狂気をも感じさせる執着の様子に、あたしの右腕を更に抑えつけるように抱きしめる力を強めたアリサちゃん。

可哀想に、きつと怖がつているんだね。

あたしは怖がるアリサちゃんを守るために、眼前に立ち塞がる狂気を孕んだ愚かな小僧に立ち向かう。

周囲の有象無象共は、我関せずといったていで無関係を装い、とてもじゃないけど当てにできそうにもない。

今、アリサちゃんを守れるのはあたししかないんだ！
その想いがあたしの背中を押す。

「そこをどいてよ」

あたしが声をかけても小僧はこちらを見向きもしない。

こちらと話をする気などまるでないのだろう。

無視をされたあたしは思わず殺気が漏れそうになる。

「ひい!! た、助けてくれ!!」

「ヤダヤダヤダツ!!　ここから出してえっ!!」

「まだ死にたくねえよお!!」

「もうヤダツ!!　この子どうにかしてよ!!」

「誰か助けてよお!!」

——少し、漏れたみたい。

騒がしくなった車内の騒動を速やかに納めるためにも、あたしはこの場から小僧を排除すべく動き……あれ、動けない？

右腕を見る。

アリサちゃんがプルプルと震えながらあたしの右腕を抱き寄せている。そのか弱い力にますます保護欲が刺激される。

でも、動けなかった原因とは関係なかった。

はて？　どうして動きが止まったのだろう。

なんとなく左腕を見る。

すずかちゃんが真っ赤な顔で、アリサちゃんの数倍の力で左腕の関節を極めていた。

そっか、左腕の関節を極められていたから動けなかったんだ。

ん？

あれ？

どうして、すずかちゃんも関節を極めてるのかな？

「待って、なのはちゃん！」

ハテナマークなあたしだったけど、すずかちゃんの必死な叫びに納得する。

すずかちゃんもアリサちゃんと同じように、この人の話を聞かない傍若無人で狂気を孕んだ愚かな小僧に怯えていたんだと。

あたしはなんてバカなんだろう。

たどえ腹黒いすずかちゃんといえど、彼女も女の子なんだから怯えても不思議じゃなかった。

あたしはすずかちゃんを安心させるべく言葉をかける。

「安心して、すぐに始末するからね」

騒がしかった車内が水を打ったかのように静かになった。

ゴクリと、誰かの喉がなる音がやけにハッキリと聞こえた。

すずかちゃんがあたしの関節を極めたまま必死に叫ぶ。

「なのはちゃん！ あの子はもう気を失ってるから！」

すずかちゃんの言葉に小僧に目を向ける。

そこには、立ったまま白目を剥いて気絶している小僧がいた。

「あんたごんだけ馬鹿力なのよ！ さっさと力を抜きなさいよ！」

アリサちゃんが悲鳴めいた叫び声をあげた。

すずかちゃんの瞳が真紅に輝きます。夜の一族としての力を発現させながらあたしの関節を極めていようだ。

そんなあたし達の様子を周囲の有象無象共は息を殺して見つめている。なるほど、これはアレだね。

美少女三人がキャツキャウフフと戯れているのを微笑ましく見つめているというシチュエーションなわけだ。

「にやはは、あまり注目を浴びたら照れちゃうよ」

あたしは照れ隠しに笑いながら、最後尾の指定席に向かった。

もちろん気絶した小僧の横を通り過ぎるときには魔法（若禿の呪い）をこっそりとかけておく。

アリサちゃんとすずかちゃんを怯えさせたお仕置きは必要だろう。

シートに腰を下ろしたあたしはひとまず胸を撫で下ろす。

今朝も親友達を守り抜くことに成功した。

あたしの左右の二人は、シートに座りながらもあたしの両腕をいつものように——まるで拘束するかのような熱烈さで組んでいる。

組まれた腕からは二人の体温と共に彼女達の愛情が伝わってくる。

「だけど忘れてはならない。彼女達がまるで幼子のようなあからさまな愛情表現をするのには理由があることを。」

彼女達は超絶美少女のあたしを超えるほどではないけれど、あたしに並ぼうかといえる程度の美少女達だ。

男共だけではなく、女共も彼女達を放つてはおかない。

その美貌を狙う野獣共に日夜脅かされている二人は無意識に愛するあたしの庇護を求めている。

そして幸いなことにあたしには力があつた。

かつては神をも超えると称された力。その全ての力を取り戻したとはまだまだ言えないけど、少なくとも親友達を守り通すだけの力はあると自負している。

愛する親友達。

そして、あたしを愛してくれる親友達。

その関係に未だに気恥ずかしさを感じるが、それは決して悪いものではない。

だってこの想いは、彼女達に仇なす邪悪な存在を悉く殲滅し尽くす決意をする程度には強いのだから。

ふと、視線を感じて前方に目を向ける。

一人の野獣のごとき男が此方の様子を伺っていた。

どうやらまた親友達を狙う輩が現れたようだ。

「おいつ、あの方達を見るんじゃねえよ!」

「でもよ、けつこう可愛いよな、あいつら」

「か、可愛いって……お前にはあの方の殺気が分らないのか!」

「殺気ってなんだよ? 他の奴らもそんな事言ってるよな」

「お前……鈍すぎるよ。絶対に早死にするよ」

「はあ? なんだよそれ?」

「ひいつ!? あの方に気付かれてる!! お、俺は関係ないからな!! もう俺には

近付くなよ!!」

「おいつ、どうして離れるんだよ!」

薄汚い野獣は欲望に濁った目で親友達を舐め回すように視姦している。

もう我慢が出来なかった。いや、我慢をすべきではない。あたしの親友達を穢すものを存在させてはいけないのだ。

「あのクソ野郎を始末してくるね」

あたしは席を立とうと腰を上げかける。

「とおっ！」

アリサちゃんが突然、あたしの膝にダイブしてきた。

浮き上がっていた腰が再びシートに沈む。

「たあっ！」

驚くあたしをよそに、すずかちゃんまでアリサちゃんに覆い被さるようにダイブしてきた。

全身で感じる親友達の愛しい重さと温もり。

そしてその至福の匂いに包まれて、あたしは酩酊感にも似た幸せな気持ちになる。

「今日も良い日になりそうなのー！」

あたしの新たな人生は愛に満ち溢れている。

*

「ふう、どうして通学バスに乗るだけでこんなに苦労しなきゃいけないのよ」

「でもよかったね、アリサちゃん。今朝は誰も被害にあってないよ。気絶だけならノー

「カンだよね」

「氣絶がノーカンってあんた……もうつ、普通は被害がないのが当たり前なのよ！」

「どうして通行の邪魔だとか、目が合ったとかで毎朝乱闘になるのよ!!」 あんたはチン

ピラかつて言いたいわ!!」

「まあまあ、なのはちゃんも悪気がないんだよ。あれでも私達を守っているつもりだしね」

「……すずか、あんた最近あいつに甘いんじゃない?」

「それでもないよ。でも以前よりかはなのはちゃんの事を身近に感じているかもね」

「あいつを身近に!?」 あんたどうしたのよ!!」

「え?」 別にどうもしないよ。ただ最近なのはちゃんのやんちゃぶりも可愛いなって、思えるようになっただけだよ」

「うーん、あんたの感性がよく分かんないわね。何もしかして、あいつから貰った裸マントマジックアイテムが気に入ったとかなの?」

「その話には触れないで!!」

「ご、ごめん。あたしが悪かったわ。でも、あんたのあの姿を見た奴は全員、なのはが記憶を奪ったんだからそんなに気にしなくても」

「アリサちゃんはいいいよね!!」 大太刀振り回して、炎弾を撒き散らして格好良かった

もんね!!」

「いや、その、本当にごめん。この話題はやめるね」

「……永遠に封印してね」

市立図書館で時々見かける車椅子の少女がいる。

高い場所に置かれている本を取ろうと、一生懸命に手を伸ばしている姿が健気に見える美少女だ。

あたしは影ながらそんな少女を応援（暇な時には、うんしようんしょと頑張っている少女を物陰からジューズを飲みつつ心の中で声援を送って見物してた）していたけど、最近気付いた事があった。

どうも彼女には魔力があるみたいなのだ。

あたしが気付くのに遅れたのにはもちろん理由がある。

彼女の僅かばかりの魔力が、何かに吸い取られていたからだ。

そのせいで元々が小さな魔力が更に小さくなり、あたしの目から逃れていたわけだ。

「なんだか気に喰わないの」

あたしが見守っていた少女に隠し事をされていた気がして気分が悪い。
あたしは少女の身辺調査をする事にした。

「にやはは、今日はアリサちゃんとすずかちゃんが忙しくて遊んでくれないから、丁度いい暇つぶしになりそうだね！」

く次回に続くく

第2話「魔導書」

車椅子の少女の魔力を辿り、彼女が住んでいるマンションを探り当てた。

「えへへ、まずは敵情視察だね」

少女が帰宅する前に家捜しをするべく、あたしは素早くマンション内に忍び込む。

マンションのオートロックなど、あたしの前では番犬よりも無力な存在だ。

そして万が一、家探し中に帰宅した少女と鉢合わせをするといったお間抜けな事態を回避するために、市立図書館からこのマンションへの道は軒並みイオナズンで破壊しておいた。

家探しをする時間ぐらいは十分に稼げるだろう。

ただその代わり、周辺からパトカーや消防車のサイレンがうるさく鳴り響いており集中力が落ちてしまう。

うん、思わぬポカをやらかささないように気をつけよう。

「それじゃあ、抜き足差し足忍び足つてね」

あたしは目的の部屋に辿り着く。

「へえ、けっこういい部屋に住んでるんだね」

あの子が着ている服から推測すると、中流以上の家庭だと思っていたけど、想像よりも資産家みたいだね。

玄関の前であたしは室内のサーチを行う。

どうやら家人は不在のようだ。サーチに引つ掛かったのはペットのワンコの反応だけだった。

「ワンコ好きなんだ。アリサちゃんと同じだね」

車椅子の少女への好感度が少し上がる。

あたしは蹴破ろうと思っていた扉を丁寧に開けることにした。

「アバカム」（開錠）

「お邪魔しまーすー！」

元氣よく挨拶しながらあたしは室内へと入る。

入った室内はよく片付けられていて清掃も行き届いていた。

あたしの挨拶の声に反応したのか、のそりと大きなワンコがソファの近くで起き上がる姿が見えた。

なんだかキョトンとした目で見られている気がする。なんとなくだけど頭の良さそうなのワンコだと思った。

「初めましてだね、あたしはなのはだよ」

ワンコ相手に愛想よく挨拶をする。これはアリサちゃんの影響でワンコびいきになっただからだ。

他にもずかちゃんとりニスの影響でニヤンコびいきにもなっている。

イタチは……どうでもいいよね。

「……」

大きなワンコは無言でこちらを見つめている。

その視線からは困惑が伝わってくる……ような気がしたけど気のせいだろう。

「はい、おやつだよ」

あたしはポケットからお母さんお手製のクッキーを取り出すとワンコに差し出す。

ワンコは少し躊躇したようにあたしの顔とクッキーを見比べていたけど、あたしがニッコリと笑いかけると安心したのかクッキーを口にした。

「……（パク）」

〳〵バタン〳〵

ワンコが倒れた。

あたしはポケットに残っていたクッキーを取り出して確認する。

「これ……お姉ちゃんのクッキーの方だ」

良かった。

もしも今日、アリサちゃん達と遊んでいたらコレをおやつにしようと思っていたからね。

あやうくアリサちゃん達にベホマ……もしかしたらザオリクをかける羽目になる所だったよ。

あたしは泡を吹き白目を剥いて痙攣するワンコに手を合わせた。

「あなたの尊い犠牲は忘れないよ。安らかに眠ってね」

そしてあたしは室内の物色を開始した。

*

リビングやキッチンには怪しい所は存在しなかった。

ごくごく普通のものしかない。

いくつかの部屋を回って見たところ、複数の人間が共同生活をしている痕跡はあるのに個室がないことに気付いた。

おそらくはプライベートルームらしき場所では、サイズの違う大量の衣服が段ボールや紙袋に纏められていた。

衣裳ケースなどはないけど、貧乏ゆえの悲壮さとかは感じられない。単にそういうこ

とに無頓着だという印象だった。

要するに、運動部の合宿所のような雰囲気だ。

「面白いものが全くないの」

当初、思っていたような魔法的なものは一切なかった。

つまらないから紙袋を漁って見つけた女の子用のお子様パンツを痙攣を続けるワンコに穿かせてみた。

ついでに段ボールを漁って見つけたブラジャーもワンコに着けてあげる。

「うわあ……通報したいかも」

その想像を超える破壊力に、この「余」ともあろう者が一瞬とはいえ倫理観を刺激された。

……この事は忘れよう。ワンコのイメージが悪くなる。

あたしは気分を入れ替えて物色を再開する。

*

不穏な部屋を見つけた。

【主の部屋】

そんなルームネームプレートが貼られた部屋だった。

「『あるじ』と呼ぶのか『しゅ』と呼ぶのかは分からないけど、どっちにしろロクなものじゃないよね」

ご主人様プレイなのか、妙な宗教関係なのか、どっちにしろこれ以上は関わるべきではないだろう。

紙袋や段ボールに収まっていた衣服は女物だけだった。大人用だけではなく幼い女の子用もあつたのだ。

それでいて干されている衣服には数は少ないが男物が存在した。ならばここがその男の部屋なのだろう。

このマンション内で、一人の男と複数の女（幼女含む）が共同生活を行なっている。そして男の部屋に掲げられた【主の部屋】というルームネームプレート。

「そんなの想像するだけで羨ま……ううん、不潔なの!!」
という事はあの車椅子の少女も……そういう事なのだろう。

強制された関係なら解き放ってあげたいけど、あの少女からはそういった影のようなものは感じられなかった。

むしろ、今の生活が楽しくてしょうがない！
といった雰囲気すら放っていた。

「きつと、もう手遅れなんだね」

あたしは僅かな憐憫を覚えたが、それを振り払う。何が幸せかは人それぞれが決めればいい。それだけの話なのだから。

もうここには興味はない……でも、せっかくだから一応将来の参考のために男の部屋も物色をしておこう。

あたしはドアのノブをゆつくりと回した。

「えへへ、ドキドキするの」

*

何の変哲も無い部屋だった。

チツ。

面白くない。

本当に面白くない。

この部屋の男は何をやっているんだろう？

期待を裏切られた腹いせにこのマンション目がけてベキラゴン乱れ打ちをかまして

あげようかな？

そんな事を半ば本気で考えていたあたしの目に“ソレ”が映った。

『魔導書』

この世界にそう呼ばれるものがある事をあたしは知っている。

かくいうあたしも現物を見たことは幾度もあるし、幾つかは所有もしている。

だけど、真に力ある『魔導書』の中にはその内に精霊を宿す。

精霊というのが語弊があるというのなら、『真なる魔導書』の化身と言ひ換えてもい

い。

残念ながらあたしでも『真なる魔導書』の所有は叶っていない。

だけど、あたしは嘗て出逢った事がある。

真なる魔導書の中でも、最強と謳われし『彼女』に。

あたしは『彼女』と出逢い、語り、触れ合った。

それ故に理解ができた。

今、この場にあるのは『彼女』にも匹敵……いや、超えるかもしれないほどの存在だ
ということが。

あたしは内心で（これは浮気じゃないよ。あたしの心は今でも貴女と共にあるよ）と
将来を誓った『彼女』に言い訳をしつつ、その存在に手を伸ばしかける。

うう、どうしよう。

悩むあたしに天啓のごとくある考えが浮かぶ。

“彼女”の方も今は他の男の手の中にあるのだからお互い様だ!!
うんうん、良かったよ。

納得できたあたしは、本棚に納められた『真なる魔導書』を手にとった。

その瞬間だった。

部屋の扉が壊れるほどの勢いで乱暴に開かれると共に、ブラジャーとお子様パンツを着けたワン……いや、そう呼びたくない。そう、こいつ駄犬だ。

駄犬が飛び込んだ。

「それに触れるな!!」「えい」うぐわあああつ!」

駄犬に蹴りを喰らわせるとアツサリと気絶した。

何だったんだろう?

この駄犬、喋っていたよね。

そういえば、あたしが手に入れた『真なる魔導書』に触れるとか不遜な事を言っていたよね。

気になったあたしは、少しだけ『真なる魔導書』を調べてみる。

その結果、あたしの『真なる魔導書』と繋がる存在に気付いた。

どうやらそれは『真なる魔導書』の化身ではなく、『真なる魔導書』が作り出した使い魔のような存在のようだ。

あたしは腹をみせて伸びている駄犬（ブラジャーとお子様パンツ付き）に嫌々ながら目を向ける。

「これが使い魔……こんなものじゃないよ」

“全契約切斷”

あたしは言霊魔法を使い、速攻で使い魔契約を切斷した。

解除ではなく、切斷にしたのはこの駄犬が、あたしの『真なる魔導書』の中に戻ってきたら嫌だったからだ。

ピクピクと痙攣をする駄犬。

契約を切斷したから魔力供給も無くなるだろう。数日もすれば綺麗に消滅してくれる。

それにしても言霊魔法は燃費が悪い。

契約切斷をしただけで、メラゾーマ百発分は軽く超える魔力を消費した。

あたしにとつては負担とすらいえない魔力量だけど、なんとか改良したいものだ。

「でも今は、この『真なる魔導書』の研究が優先だね」

新しいオモチャに心が踊る。

軽く解析しただけでも、この『真なる魔導書』の凄まじい能力が分かった。それに色々問題も発生しているようだ。

ククク、これは研究のしがいがありそうだね。

あたしは『真なる魔導書』を亜空間に収納すると、早速自宅に戻って研究をするためにルーラを唱えた。

*

ひっくり返っていた駄犬は、仲間達に蹴り起こされるまで目を覚ますことはなかった。

「誤解だ！ 俺の話聞いてくれ！」

「黙れっ、この変態が!!」

「最低です」

「あたしのパンツ……もう穿けねえじゃねえか!!」

「えっと、人の趣味は人それぞれやから、あの、その……ゴメンな、見てもうてほんまにゴメンな」

「うおおおおっ!!」

チクショウツ、あの女っ!!

絶対にぶっ殺す!!!」

く次回に続く

第3話 「孤高なる男達」

俺はヴォルケンリッターが一人、【盾の守護獣】ザファイラと“かつて”呼ばれていた男だ。

そう、かつてだ。

つまりは過去形だ。

今はただの【野良狼】ザファイラだ。

住処は公園だ。

ブランコに揺られるのが日課の気楽な毎日だ。

「どうしてこうなった……？」

俺は誇り高きヴォルケンリッターの中で、頼れる兄貴分として確固たる地位を築いていたはずだ。

それがこうも簡単にヴォルケンリッターを追い出され、こうして野良暮らしにまで落ちぶれるとは我がことながら信じられん。

【鉄の騎士】 シグナム

【鉄槌の騎士】 ヴィータ

【湖の騎士】 シャマル

こいつらと、この俺こと【盾の守護獣】ザフィーラを合わせた三人と一匹が、主の守護騎士としてはやてを護つて……待てよ？

守護「騎士」だと？

俺以外の三人は確かに称号として騎士の名を受けているな。だが、俺の称号は……ケモノ？

ま、まさか俺はヴォルケンリッターにおいて騎士枠ではなく、ペット枠だったのか!?
だ、だからあの正体不明の化け物女に嵌められて変態じみた格好をさせられた俺を簡単に捨てたのか!?

俺があれほど誤解だと、断じて俺は女装趣味などではない、ましてやそういう性癖ではないと必死に訴えたのに、全く聞く耳を持つてくれなかったのは、俺が騎士ではなく、ただのペットだったからなのか!?

うう……知りたくなかった現実を知ってしまった気分だ。

だ、だがっ、たとえ俺がペットだったとしても、今まで苦楽を共にした愛らしくて頼りになるペットを簡単に捨てるなど信じられん!

薄情すぎるぞっ、あいつらは!

だいたい現実に闇の書を奪われているんだ。そして闇の書と俺達ヴォルケンリッ

ターとの繋がりも絶たれている。

しかも主のはやてさえも、闇の書との契約が絶たれるという信じられんほどの異常事態だぞ！

俺の話の信憑性は高いはずだ！

それなのに変態は出て行けだの、はやての足が治ったお祝い会だのと浮かれおつて、俺もお祝い会に出たかったわ！

おつと、噂をすれば影とやらだな。

はやてがご飯を持って来てくれたようだ。

「ご飯やで、ザフィーラ。ほら、今日は奮発してステーキ丼を用意したからたと召し上がれ」

「わんっ」

野良狼となった俺だが、はやてだけは俺を信じて、こうやってご飯を用意してくれる。有難いことだ。

はやての為に、早く闇の書を見つけ出して、再び共に闇の書に囚われ……いや、闇の書って必要なのか？

うーん、よく分からんな。

考えるのは参謀の仕事だからな。

そして決断するのがリーダーの仕事だ。

俺は時々、気付いたことを助言すればいいだけだ。

ふふ、なんとも気楽なペット稼業というやつだ。

「どないしたんや？　食欲があらへんのか？」

おっと、はやてが心配しているな。とりあえず考え事は後回しだ。今、為すべきことをやろう。

「ガフガフガフツ」

「うんうん、ええ食いつぶりやね……ザフィーラ、ゴメンやで」

はやてが悲しそうに俺を見つめている。どうしたんだ？

「家から追い出されるのを止められへんかった。情けない主でゴメンなあ」

「くうくん」

「逆に慰めてくれるんか？　優しいなあ、ザフィーラは」

はやてが流す涙を見た瞬間に俺は悟った。

俺は、俺がヴォルケンリッターだから、闇の書に選ばれたはやてに忠誠を誓ったんじゃない。

俺は、俺がザフィーラだから、はやてに忠誠を誓ったのだ。

他の薄情な元仲間とは違い、俺を信じてくれるはやてに俺は忠誠を誓ったのだ。

はやてが闇の書の主でなくとも、彼女が俺の主であることに変わりはなかった。たとえ、ヴォルケンリッターを追い出されようとも、俺ははやてを護り続けよう。俺は人型へと変化する。

「ザファイラ……？」

涙を流すはやての頭を撫でる。

「答えは得た。大丈夫だ、はやて。俺はこれからも頑張つていくから」

「ザファイラ……！」

俺の言葉に顔を輝かすはやて。やはり、この子には笑顔が一番よく似合う。

「わたしも、わたしも頑張るから！ あんたの趣味が皆に受け入れてもらえるように頑張るから！ 妙な性癖なんか、わたしは気にせえへん！ わたし達は家族なんやから、あんぐらいの性癖は見て見ん振りするぐらい当たり前や！ 絶対に皆を説得してみせるから、あんたもそれまで頑張るんやで！」

はやては顔を輝かしたまま元気に手を振って帰っていった。

俺は公園の土管に引き籠もった。

地球、イギリス某所。

「グレアム様、お茶が入りました」

「ありがとうございます、アリア」

第九十七管理外世界は、時空管理局にて無期限の不可侵監視対象世界に指定された。

本来ならば、時空管理局顧問官を務めるギリアムといえど立ち入りは許されないはずだった。

だが、この世には何事にも例外というものがある。

ギル・グレアムという男は、実は第九十七管理外世界のイギリス出身だった。

「ちよつと里帰りしてきます」

この申請を拒否することは、福利厚生がしっかりと完備されている時空管理局ではあり得なかった。

「アリア、あの子の様子はどうかね？」

「はい、既に闇の書の守護プログラム、ヴォルケンリッターが目覚めています。恐らく近いうちに闇の書を完成させるべく動き出すと想定されます」

「そうか、いよいよだな」

「はい、ギリアム様」

ギリアムは目を閉じて過去に想いを馳せる。

「……クライド、今度こそ終わらせてみせるよ」

己の主人の深い苦悩を知るアリアは、その眩きに込められた悲しみに心を傷めることしか出来なかった。

「ギリアム様……」

闇の書によって繰り返される悲劇。

ギリアムは、一人の少女を犠牲にしてその悲劇の連鎖を止める決意をしていた。

だが、たとえ鋼の意志にてその決意を支えようとも、自分の手によって生まれる確実な悲劇から目をそらすことは彼には出来なかった。

「アリア、私のことを非情な男だと思うかね」

「いいえ、ギリアム様は永遠に続くはずの悲劇を止めるべく立ち上がられた勇敢な方で
す」

「そうか……ありがとう、アリア。だけどね、やはり私は非情な男だよ。犠牲にするあの子に援助しているのもただの偽善にすぎん」

「そうではありません。闇の書に選ばれた者は、選ばれた時点で死ぬ運命に囚われています。ならば、その死を無駄にしないためにも、その死までの間だけでも、心穏やかに過ごせる時間をギリアム様はあの娘に送られているのです。あの娘も真実を知ったとしても、ギリアム様に感謝はすれど、恨むことなどあり得ないでしょう」

「ハハ、アリアの言葉を聞いてみると、まるで自分が聖人君子にでもなったような気がしてくるよ。私は良い娘を持ったようだ」

アリアの言葉は客観的には事実だとしても、現実には命を奪われる者にとってはただの戯言にしか聞こえないだろう。

それを分かっているながらも、敢えて自分の心を軽くするために口にしてくれたアリアの気持ちがグレアムは嬉しかった。

「……全てが終わったら、私は全てを告白し罪を償おう」

「ギリアム様!？」

ギリアムのその言葉に初めて冷静さを失うアリア。ギリアムはそんなアリアの様子を優しげに見つめる。

「いいんだよ、アリア。それがかつてクライドを……そしていま一人の少女を犠牲にするしかない能無し私ができる。最後の贖罪だ」

「ギリアム様が贖罪など!」

「アリア、私を自分がやったことの責任も取れない情けない男にしないでくれ」

「ギ、ギリアム様……」

「ふふ、どうだい、意外と男らしいだろう? 君の父親はね」

それまでの暗い雰囲気を一変させ、ギリアムは茶目つ気たつぷりに言ってみせる。

ついでとばかりにウインクまでするギリアムにアリアは目を丸くする。

「……うふふ、そうですね。ギリアム様の意外な一面を拝見させていただきました。もしもギリアム様がもう少しお若ければ不覚にも惚れてしまっていたかものです」

「おやおや、それは惜しいことをしたね。アリアの心を射止められなかったとは、私の一生の不覚だよ」

ギリアムの軽口に対するアリアの精一杯の仕返しも、彼は年の功であつさりと返した……つもりだった。

アリアの瞳がキラーンと光る。

「あらあら、ギリアム様が本気だと仰るのなら私の方には否はございません。ささつ、こちらにいらつしやつて下さいませ。親子を超えた愛情を深め合いましょう」

「ふえっ!?」　アリア、冗談はやめっ!?」

アリアの信じられないほどの怪力で寝室へと引き摺られていくギリアム。

嬉々としてギリアムを引き摺るアリアの姿を、少し離れた場所で警護をしていたロツテは呆れた顔で見えていたが、ギリアムの助けを呼ぶ声は当然のごとく聞こえない振りでした。

〽次回へ続く〽

第4話「余の名は」

どんなに強靱な肉体や超魔力、それに鍛えられた武術に魔法技術、そして数千年の経験と強大なモンスター軍団、その上戦略的、戦術的に絶対的に有利な状況であろうとも、僅か10人程度の敵に敗れる時はある。

しかも中心となり、最強の存在を倒したのは驚きの12歳の少年だ。

ちなみに本格的に戦士として鍛えだしてたったの三ヶ月後だったりする。

この三ヶ月というのは旅をしていた期間もあるから実質的な修行期間はごく僅かだった。

「前世のあたしって……」

現在のところ、あたしはこの世界で敵なしだけど、だからといって油断をしていては前世の二の舞になると思う。

だから教訓とされるべく前世での状況を思い出していたけど、こうして整理すると前世のあたしって馬鹿だよな。

どうやったらあんな有利すぎる状況で負けるかな？

今のあたしだったら、あの世界の人間なんか一ヶ月もかけずに殲滅できる自信がある

よ。

慢心、油断、遊び心、原因は色々と思いつくけど、本当に前世のあたしは馬鹿だ。そして恐るべきは世界に選ばれし勇者だろう。

たとえばどれほど慢心しようと、油断しまくろうと、遊び心をだしてお茶目な真似をしていようと、あたしが最強の存在だったことには変わりはない。

あたしが負ける要素は皆無だった。

すでに神々の力を超えていたあたしには敵など存在しないはずだった。

それが敗れた。

勇者という存在に敗れた。

敗れた遠因は、馬鹿なあたしが結果的に勇者を育てるような采配を許したからだけだ、それでも普通なら敗れるわけではない。

修行を始めたばかりの12歳の少年に敗れるなんて、あり得るわけがなかった。

その不可能を可能とする勇者。

そんな恐ろしい存在が、この世界には存在しないとは言い切れないだろう。

いや、存在すると仮定して動くべきだ。

しかし、勇者を倒すことを目標とすべきじゃないだろう。何故なら勇者というのは敵の強さに合わせてその強さも増すからだ。

そんなものの相手なんかしてらんない。

倒すよりも、勇者など生まれないうように動く方が得策だと思う。

勇者が生まれる条件はなんだ？

もちろん決まっている。

人類が滅亡の危機に瀕したときだ。

ならば対策は簡単だ。

それは――

「人類はあたしが守ってあげるの！」

――人類を繁栄させればいい。

「まずは戦争が起こらないように、優秀で有能な選ばれた人間といつても過言じゃないあたしが人類を管理運営すればいいよね！」

流石はあたし、ナイスアイデアだった。

「今日もアチーなあ」

炎天下の中、あたしは自宅に向かつて歩いてきた。

今日もゲートボールは楽しかったけど、この暑さには参っちまうな。

「あつ、なの姉ねえがいてる！　ラッキーだぜ！」

あたしは駄菓子屋の店先でアイスを物色しているなの姉ねえの姿を見つけて歓声をあげた。

なの姉ねえというのは、最近知り合った年上のお姉さんだ。

不思議な力の持ち主で、なんと百発百中でアイスの当たり棒を引き当てる天才だった。

しかもなの姉ねえは気前が良くて、その当たり棒を近くに年下の女子がいればくれるんだよな。

見たところ今日は周囲にあたししかいない。

つまり当たり棒を貰えるわけだ。

よし、こうしちやいられない。他の奴が現れる前にあたしが当たり棒をゲットしてやるぜ。基本的になの姉ねえは、先着順で当たり棒をくれるからな！

「なの姉ーっ!!」

あたしは、なの姉を呼びながら駆け出した。

*

「もしかして、ヴィータちゃんには不思議な力があるんじゃない?」

「えっ、な、何言ってるんだよ。不思議な力があるのは百発百中で当たり棒を当てるなの姉の方だろう」

アイスを舐めていると、なの姉から突然かけられた言葉に内心ドキリとする。

「ううん、隠しても分かるよ。ヴィータちゃんから凄く微弱だけど、初めて会ったときから魔力を感じていたもの」

「す、すごく微弱……?」

いや、その、なんだ。

あたしはこれでも歴戦の守護騎士で、魔力の強さにも自信があるんだけど?

まあ、別にそれはいいけどさ。魔力自慢したいわけじゃないからな。

「あの、なの姉。あたしは……」

それよりもどう言えばいいんだろう?

今は闇の書は失われて、あたし達はヴォルケンリッターの名を捨てた。

本当はヴォルケンリッターの名前には愛着があったから闇の書が失われた後も名乗り続けたかったけど、ヴォルケンリッターの一員がとんでもねえ変態だと判明したせいで、その気が失せちゃった。

うう、今思い出しても悍ましい姿だったぜ。

あたしは頭を振って、その記憶を振り落とす。

あんな変態よりも、なの姉ねえとの話の方が大事だ。

「えっと、もしもあたしに魔力があったらどうするんだ？」

できれば、なの姉ねえとの付き合いは切りたくねえ。

アイス云々は関係なく、なの姉ねえは凄く優しく、あたしのことを妹のように扱ってくれる人だからな。

でも、あたしの魔力を何かに利用したいとかいうなら話は別だ。

ヴォルケンリッターの名は捨てたけど、はやての守護騎士は続いているんだ。

はやての守護騎士として名を落とす真似に加担は出来ないからな。

「うん、まずは話より先にあたしの力も見せるね」

「え……？　な、なんだこの馬鹿強え結……か……いいいいっ!？」

なの姉ねえが指を一振りすると、見たこともない強力な結界に一瞬で包まれた。

それに驚いていると、なの姉ねえから何というか、もう凄いか、強いか、そういう言葉で表せるレベルを超えている程の魔力、いや超魔力というべきものを感じた。

なの姉ねえは本当に人間なのか？

本当は、魔神や邪神とかに分類される存在じゃねえのか？

しかしヤベえな、身体の震えと冷や汗が止まらねえんだけど、ここから逃げ出したらなの姉ねえ怒るかな？

そんな風に考えながらも、なの姉ねえが優しい笑みを崩さなかったから、あたしはこの場から逃げ出したい衝動を何とか抑えることができた。

そんな状態の中、なの姉ねえに近寄られてもチビらなかつた自分を褒めてやりたい。いや、ホントにマジで。

*

なの姉ねえから、どうしてあたしの魔力の話をしたのか教えてもらった。なの姉ねえは自分の目的のために力を貸してくれる仲間が欲しいそうだ。

そして、その目的というのは決して利己的なものじゃなかつた。

「そうか、なの姉ねえはこの世界から戦争をなくしたいのか。うん、あたしも戦争はなくした

いな」

魔神や邪神かと疑うほどの力を持つ者の願いが人類平和だなんて、何というか……なの姉ねえはやっぱ優しい人だった。

「あたしにも力を貸してくれる仲間はいてるけど、ついこの間も宇宙人の侵略を防ぐために無茶をさせちゃったから今回はダメなんだ（すずかちゃんねえが裸マントのトラウマから脱してないからね）」

「宇宙人が侵略しに来てたのか!？」

なの姉ねえの超魔力を知って、もう驚くことは滅多にないだろうと思っていたけど、これには驚いた。この時空の異星人なのか、他の時空の来訪者かは分からないけど、あたし達が気付かないまま色々起こっていたんだな。

「うん、少しだけ見せてあげるね」

なの姉ねえはそう言うと、あたしの頭に手を置いた。

その手から、なの姉ねえの記憶が流れ込んできた。

数千隻を超える戦艦が漆黒の宇宙の彼方から迫ってくる威容に、あたしはただの記憶だと分かっているも絶望しか感じなかった

そしてその絶望の前に立ち塞がるのは、悲しいほどに小さな人影がたったの三つだけだった。

そして数千隻の戦艦は警告もなく、その主砲を発射すべく一斉にエネルギーを溜め出す。

もはやそれは絶望という言葉すら生温いほどの状況だろう。

数千隻の戦艦が一斉に主砲を放てば、時空振動すら起こしかねないほどの地獄がこの場に顕現するはずだ。

数多の死地を超えてきたあたしですら、悪あがきをする気すら起きない。

なのにそんな状況においてなお、なの姉ねえの顔には絶望の色はなく、笑みすら浮かんでいた。

それは仲間と思しき他の二人も同じだった。

黄金の髪を持つ一人は、その鋭い顔貌に好戦的な笑みを浮かべていた。

漆黒の髪を持つ一人は、その穏やかな顔を羞恥に染めて……羞恥？ どういうこと

だ？ あれ、この人の身体がよく見えないな。塗りつぶしたように真っ黒なような

……光の加減かな？ まあ、いいか。

とにかく三人は、眼前に迫る絶望を前にしてなお希望を失わずにそこに在った。

きつと、ついさつきまでのあたしなら三人の心が理解できなかつただろう。

あまりの絶望に気が触れたのかと思うだけだったかも知れない。

だけど、なの姉ねえの考えを知った今なら理解できる。

この三人は、あかし達、ヴォルケ……いや、えーと、そうだな、はやての守護三騎士と同じなんだ。

護る対象は違うかも知れないけど、護るモノのためなら笑って命を捨てれるのだから。

だって、数千の絶望を前にする三人の後ろで……泣きなくなるほど優しい光で、彼女達の母なる星が輝いているんだからさ。

なの姉は言った。

大事な人を護りたいと。(可愛い女の子は人類の宝だから護らなきゃね)

人の世界を救いたいと。(人類のピンチになると湧き出る勇者つて怖いよね)

その為に力を貸してほしいと。(一人で黙々働くより、可愛い女の子を侍らせながら働きたいよね)

三人は優しい光を護る為に頑張っているんだ。絶望を前にしようが、地獄を前にしようが、三人は護るものを背にして笑っている。

……なんだかあかしは無性に叫びたくなった。

なの姉達が動き出す。

「にやはは〜！ みんなっ、ここが死に場所と心得よ！ って感じだね〜！」

「あら、あかしは絶対に嫌よ。こんな問答無用で攻めて来るような奴らに負けてなんか

「やらないわよ」

「お喋りはいいから早く終わらせてよう!! どうして私だけこんな格好なのよ!!」

「大丈夫だよ、すずかちゃん! ちゃんと色っぽいよ!」

「やかましいわ!! この変態が!!」

「ところで、アリシア達はどのようなのよ?」

「うん、もう配置についているよ。十字砲火の準備はバッチリだよ」

「それならサツサと始めるわよ!! 総員、構えろつ!!!」

「攻撃合図はあたしの役目なのにーっ!!」

「なのは、そのぐらい譲ってあげなさいよ(すずかのストレスが本気でヤバそうよ)」

「う、うん、分かった。(ほ、ホントだ。すずかちゃんの目が座つてて怖いかも)」

「それじゃあ、いくわよ!! ゴミ虫共を撃ち殺せ!! 総員、ファイヤーーーーーッ!!!!」

それからの記憶は人の脳が理解できる範囲を超えていて説明しにくい。

だけど結末は、なの姉ねえの圧勝だった。

数千隻の戦艦はスクラップになって宇宙空間を漂うゴミになっていた。

「……ま、まあ非常識な結果だけど、なの姉ねえの魔神や邪神レベルの超魔力なら不可能じゃ

ねえよな」

「えっと、魔神とか邪神なんて呼び方は趣味じゃないかな」

「ん？　じゃあ、好みの呼び方でもあるのか、なの姉^{ねえ}」

「……（ここで大魔王と名乗ったら嫌なフラグが立つ気がするの）」

「どうしたんだ、なの姉^{ねえ}？」

「にや、にやははる、あたしは何処にでもいる平凡な魔法少女だよ」

「平凡な魔法少女って……まあいいか。えっと、そうだな。それならさっきの記憶の映像、叙情的というか、感情溢れる感じだったからリリカルも付けたらどうだ？」

「リリカル……うん、いいかも！」

なの姉は小さく呟くと気に入ったみたいで、いつもの満面の笑みを見せた。

「魔法少女リリカルなのは!!　ここに爆誕なの!!」

〜次回に続く〜